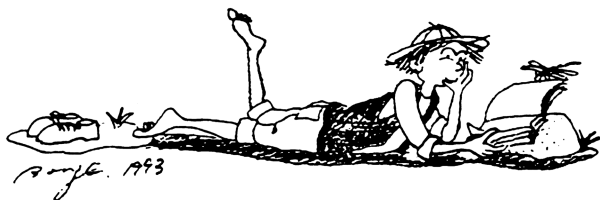


『短編小説を書いてみよう！』講座

第一回目作品集
2012年3月号



宮代町立図書館

小さな、しかし大きな一歩。

新井政彦

三ヶ月間で三〇枚から五〇枚の短編を書く。これが当初の企画だった。書き切れるかな、というのが正直な思いだった。

意欲があれば書き始めることはできる。途中まで書き進めることもできる。しかし「書き切ること」つまり一編の小説として完成させるということは、僕の経験から言えば、書き始めることの数倍の精神力を要する。

今の若い世代は決して活字離れしていない。従来の小説を読まなくなっただけだ。という僕の思いの裏には、彼らは新しい感性、新しい言葉は表現できるかもしれないが、小説を書く上での技術——たとえば伏線の張り方、ミスリードの仕方、意外性の大切さ、どんながえし等の手法——は、うまく使えないだろうという思いがあった。簡単に言えば、おもしろい文章は書けるかもしれないが、「小説」としての完成度はいまいちではないかと思っていたのだ。

しかし、いざ彼らの小説を読むと、彼らが小説のこうした手法を充分に知っていて、

しかも「実際に使っている」ことに驚いた。彼らは、僕が小説を書き始めたときよりはるかに、小説を「知っている」。

三人とも、今まで書いた経験はあるが、完成させられなかった。こんなに長いものを書いたのは初めてだと言う。その三人が、三ヶ月で作品を仕上げたのだ。しかも三人とも、なんと四〇〇字詰め原稿用紙に換算して八〇枚以上。

いや、期間や枚数の問題ではない。小説の質そのものを、僕はまず評価したい。新井綾の「平和への翼」には、雄大な想像力がある。ファンタジー仕立てであるにもかかわらず、設定の細かい部分にまで筆を伸ばし、登場人物も魅力的に描けている。佐藤来夢の「僕と彼女の犬物語」は、伏線の張り方が実にうまい。あつと驚く結末もいい。それ以上に、登場人物の心理描写がみごとだ。代口勇真の「二日間の結末」は、人間の心の奥にある「闇」を強く感じさせる。人を動かすのは、心の奥にあつて、自分でも制御できない「闇」であるという認識。これは小説を書くうえで、非常に大切な前提である。

毎年、何千、何万という小説が書かれている。三人の小説は、その世界にほんの小さな足跡を残したにすぎない。しかし、小説を書き切ったこと、自分の世界を言葉にできたこと、この意味では、彼らにとって大きな一歩なのだ。

目次

平和への翼

新井 綾

7

僕と彼女の犬物語

佐藤 来夢

89

二日間の結末

代口 勇真

177

平和への翼

新井
綾

空は寒い。

季節は真夏であるにも関わらず、上空は真冬のように寒い。

特に、今彼らは雲の中において湿気に体温を奪われているところだ。

「相棒、視界が悪い。少し高度を落とそう」

「了解」

相棒が頭を少し下げ降下の体勢になると、彼は雲の中からは見えなかつた眼下を見下ろす。

黒々とした森が生い茂り、転々と存在する村や街の明かりがわずかに見える中、ある一点に注目する。

「あれだな」

彼は頷き、手綱を掴む手に力を込める。

「急いでくれ」

真つ暗な闇夜に、重い金属の音がする。何重にも重なって聞こえるその音は、不気味なくらい揃っていて、他に何も聞こえない。

「夜襲か」

彼は上空からその集団を見ていた。

国境付近の街道を、黒い集団が波の様に埋め尽くしていく。

全身を重そうな鎧で固め、足並みを揃えて進軍する姿は圧巻だった。

「よくあんな装備で動けるな。」

自分だったら指一本動かすことができないだろう。血を吐くほどの鍛錬を積まなければ、あの重い鎧を着ることもままならないだろう。

「行けるか？」

彼は、相棒に聞く。

「もちろん」

ある一兵の男は、厚い雲に覆われた空を見上げていた。

「上も注意しろよ！あいつらがいつ襲ってくるかわからないからな！」

今回の夜襲は中央から派遣された兵も多く、この国の事を知らない者もたくさんいる。

「こんな田舎に、空中戦力があるわけ無いだろう」

ある士官が嘲笑しながら言い、続けてその周囲から笑いが漏れた。

これだからお偉いさんは……と男は内心毒づいた。

ここは敵地だというのに、緊張感というものがかけらも無い。

「とにかく、注意してください。さもないと……」

男が全てを言う前に、辺りに轟音が響き渡った。

「なな、なんだ！」

慌てふためく上官たちに、男は空を見上げながら、冷静に言い放った。

「来ましたよ」

再び轟音が鳴り、その場のほぼ全員が上を向くと、そこには巨大な影が舞っていた。

「ドラゴンです」

「喰らいつけ！ジーク！」

彼の言葉に、相棒、ジークは咆哮した。大気を震わせるほどの大音量は、熟練の兵士をも震え上がらせた。

そしてジークは翼を折りたたみ、重力に任せて急降下した。

「う、うわあああ！」

人間の五倍以上大きい巨体が、軍勢の真ん中に降り立った。

その風圧だけで、周囲の兵士たちは吹き飛ばされ陣営が崩れる。

彼は、戦況を分析してから手綱を二回強く引いた。

ジークは丸太のような逞しい足で地上を駆けた。

至近距離に迫る敵を、ある時は牙で、ある時は爪で、次々と切り裂いていく。あの重装備も、紙切れのようにバラバラになっていく。

ジークが戦い続けている間も、彼は辺りに注目していた。

そして、この場にあふれる音の中から、状況を冷静に判断する。

「飛べ！」

突然の命令にもジークは瞬時に答え、彼らは再び空へ舞い上がる。

それとほぼ同時に、彼らの下を矢の雨が飛んで行った。

「空から何か来た。現れた方向からすると敵だろう。」

彼は目を細めて遠くを見つめた。

「下はどうする？」

ジークが聞いてくる。

迎撃している間に茶々を入れられるかもしれない。ここは撤退してもらったほうが妥当だろう。

「威嚇程度でいい。ブレスだ」

ジークは高度を落とし、息を吸い込んだ。

口の中、ずらりと並んだ牙の間からチロチロと火がもれる。

「発射！」

彼の合図で、ジークはブレスを放った。あまりの熱量で白っぽく見える炎が、地上の兵士たちに降りかかった。

「冥福を。」

地上では、炎にやられた兵士たちが慌てていた。火達磨になっている者、炭化している者、鎧が溶けて熱さに苦しんでいる者……。

そんな者たちに彼は手を合わせ、敵の増援を見据えた。

「あれは……グリフォンだな」

飛ぶことが出来る騎獣の中ではまあまあ強いほうだ。

「でも、実戦では初めて見たな」

彼は他に増援がないか確認し、踵でジークの腹を軽く叩いた。

ジークは再び咆哮をあげ、グリフォンの隊列に突っ込んだ。

「実力を測る。暴れていいぞ」

彼は、戦いの指揮権をジークに譲った。

「振り落とされるなよ？」

ジークは大きな翼で空気を掻き分けるように羽ばたいた。その巨体が弾かれたゴムのように進み、すれ違いざまに一頭のグリフォンを切り裂く。

背後を取ろうと迫った敵を確認し、ジークは勢いを利用して一回転し、尻尾で違うグリフォンを叩き落した。

「上と下をとられたぞ」

彼の言葉で、ジークは下から突っ込んできた敵に重力に任せて体当たりした。鉄の塊が落ちてきたような衝撃に、グリフォンはショックで絶命した。

そのままジークは急上昇して、四体目のグリフォンの背中にブレスを吹きかけた。

「あと一体は俺が倒す」

彼は、腰のベルトに挿してあった銃と折りたたみ式の槍を取り出した。

ジークに残っていたグリフォンを追わせ、騎乗した兵士に銃の標準を合わせた。

発射の音から少しずれて、兵士は力なく地上へと落ちていった。

「結論、グリフォンは相手にならない」

彼は終わったと背筋を伸ばす。

「んじゃ、後処理をはじめるか」

暗闇のなかに、静寂が戻った瞬間だった。

丘の向こうから、太陽が昇ってきた。

「結局、徹夜になっちまったな」

彼は、閉じそうになる臉をこすりながら大きなあくびをする。

本来なら、夜が明ける前に交代するはずだった哨戒飛行は、彼が倒した敵の規模が予想以上に多くて交代時間をだいぶ過ぎてしまった。

引き継ぎ相手に基地への連絡を頼み、彼自身は領土の被害を確認したり、敵兵士の所持品から今回の夜襲に関する情報を集めたりと大忙しだったが、上司が歩兵部隊を送ってくれたので大まかな説明をしただけで残りを任せて帰ってくる事が出来た。

「敵も侵略に本腰を入れてきたな」

竜舎へと向かう途中、ジークがポツリと呟いた。確かに、今回の敵は今までの嫌がらせとは違い、ある程度の侵略の意思があったようだ。

「そうだな。もうすぐ、本格的な戦いが始まると思う」

彼は、自分の言った言葉に嫌そうな顔をした。

「またこき使われるのか……。今のうちに有給とっておこうかな」

「そうしろ。俺もたまには休みたい」

ついでに美味しいものが食べたいと言うジークに、彼は思わず吹き出した。

竜は騎獣と呼ばれる生き物の中でも、トップクラスの実力を持つ。銃弾さえ通さない硬い鱗と、防御不可能といわれるブレスは、敵に恐怖を与え、味方に勇気を与える。

だが、その体の大きさや姿から怖がられることも多い。その誕生の過程から気味悪がられ、ほとんどの人間には恐怖の対象として映る。

彼は、そんなことはないと思っている。何百年という月日を生きる竜は、人間よりもよっぽど思慮深く、誇り高い。人間は竜を見下すが、どろどろとした負の感情が渦巻く人間社会ほど汚らしい、低俗なものはない。

彼は、そんな竜が大好きだった。特に、小さいころから一緒にいたジークは兄のような存在だと思っている。

「ん？・・・あ、ユウトだ」

「本当だ。おはよう」

竜舎の中に入ると、通路の両脇にある柵の中から声が聞こえてきた。

「おはよう。今日は任務が無い日だったな」

任務や飛行訓練がある日は、部隊の隊員たちが忙しく準備をしているのだが、今日は基礎訓練だけなので、竜舎は静かだった。

だが、中には早起きの竜もいて、柵越しに会話している姿もあれば、ぐっすり寝ている竜もいた。

彼、ユウトは声をかけてくる竜にそれぞれ丁寧に答えながら、竜舎の奥へと進んでいく。そして、ジークに割り当てられたスペースにたどり着くと、柵を横にスライドさせ、中に入れるようにした。

「それじゃ、俺は司令官に報告に行ってくる」

「がんばれよ」

柵の中に入ったジークは、丸くなって寝る体制になりながらいつも通りに応援した。

「今度は何言われるのかな・・・」

ユウトは苦笑して竜舎をあとにした。

「失礼します」

ユウトは、基地の最上階にある司令室に来ていた。

司令室は応接室も兼ねており、立派な家具が並べられている。

「ああ、お疲れ。ずいぶん暴れたようだな」

一番奥にある大きな椅子に座った初老の男が、ニコニコと笑みを浮かべながら彼を出迎えた。
うわあ、良い顔してるよこのじじい……

ユウトは笑顔を浮かべたままの男を見て冷や汗を流す。今までの経験で、この男が生き生きとした笑顔をしている時は、決まって碌なことが無いことを彼は知っていた。

「任務はご苦労だったな。それほど力が有り余っているなら、基地のほうでも仕事があるから言ってくれば良いのにな」

このやりとりで、何回面倒ごとを押し付けられただろうか。力がどうか言っているが、この後に回される仕事のほとんどが軍への苦情の対処だったり、基地内でのいざこざの仲裁だったり、全く関係ない面倒な仕事ばかりだった。

そして、人が八つ当たりやとぼっちりで困っているのを見て楽しんでいるからなおさら性質が悪い。

そのとき、考えていることが表情に出たのかもしれない。男の笑みがますます深くなった。

「さて。冗談はこれぐらいにして、今回はそれよりも大事な事がある」

あつさりと話題を変えたことに、ユウトは無意識に身構えていた体から力を抜いた。正直、拍子抜けしてしまった。

「では、司令官。哨戒飛行の報告は……?」

ユウトは恐る恐る聞いてみた。あまりにあっけなくて、新手の部下いじりでも身につけたのか怖くなってしまったのだった。

「その件は報告書だけでかまわん」

司令官はそう言ってから、してやったりと得意そうに口角をクイツとあげた。

「……」

ユウトは上司の前であるのにもかかわらず、大きなため息をついた。

徹夜の任務の後なので、安心した。これ以上働かされたら、ストライキも本気で考えていたかもしれない

「ほら、関係者も来たようだし、話を変えよう」

表情を真剣なものにした司令官にたしなめられ、ユウトも背筋を伸ばした。

そして、あらかじめ打ち合わせてあったかのような絶妙なタイミングで扉がノックされた。

「入りなさい」

扉が開くと、甘い、花のような匂いがユウトの鼻をくすぐった。

そして、前後を兵士に守られ、一人の少女が入ってきた。
少女は疲れや苦勞を知らない、柔らかな顔つきをしていて、ユウトはすぐに身分の高いお偉いさんだと悟った。

争いとは無縁の雰囲気、ユウトは不思議と目を奪われた。

彼女を守っている兵士も、ずいぶん豪華な防具と全盛期の銃を持っていた。

「彼女はアスカ。今まで首都のほうで暮らしていたが、本人の希望でこのたび竜騎士隊に配属されることとなった。兵役についたことは無いが、竜への関心がとても強い。先輩としてしっかりサポートしてくれ」

「アスカだ。よろしく頼む」

アスカはふんわりと微笑んだ。見た目とは裏腹に、軍人のようなきびきびとした口調であるのには正直驚いた。だが、やはりというか、これから目上の人物になる相手への敬意が感じられない。自分より上の立場の者に会う機会が少なかったのだろうが、かなり手ごわそうな気がする。

「竜騎士隊所属、ユウト」

ユウトはアスカに名乗ってから、司令官に視線を向けた。

「……新兵の教育は副隊長の担当のほうですか？」

彼の所属する部隊は万年欠員状態である。

先頭で最前線に配置され、何かあったときは真っ先に出勤を強いられる竜騎士隊は、死亡率は低いがとにかく忙しいことで有名だった。

戦闘以外でも、偵察やら物資輸送やら、災害救助や伝令までやらされるので、一部の兵士には雑用係とも呼ばれる始末である。

以前他の上司に、家族に手紙を届けてくれと命令されたことがあるユウトは、あながち間違っ
てはいないと苦笑したものだ。

しかも、先ほども書いたが竜は恐怖の対象である。そんな竜に乗る度胸があるのはよっぽどの
物好きか実力者だけである。

そんなこんなで、滅多に來ない新兵を教育することだけを仕事とした教官なんかには人数を裂く
ぐらいだったら、誰かが兼任してしまおうという話になっていったのだ。

それで、最近では騎獣の知識が豊富な副隊長が担当していたのだった。

「そうだ。お前には伝わってなかったか。まあ、昨日の午後急遽決まったことだから仕方ない」
司令官は苦笑していた。自分が変わりに教官をやるということは、副隊長か隊長に何かあった
のだらうか？

「来月、大規模な異動が決まったのだが。それで、お前の部隊の隊長が首都に行くことになった
のだ」

異動の話は、前から噂になっていた。戦争の最前線であるこの基地で、しかも敵の侵攻が盛んになってきたこの時期に異動を行うなんて首都の軍部も何を考えているのだから、と他人事のように考えていた。

「他に私と、部隊の隊長・副隊長が五人首都に行くのだが、代わりに来るのが司令官一人とその私兵だけなのだ。そのため、役職を繰り上げてアキ副隊長を隊長に、隊員の中で一番実力のあるお前が副隊長になった」

「あー、なるほど」

ユウトは納得した。と言うより色々諦めた。隊長職は書類整理が仕事の大部分を占めるようになる。それに、様々な会議にも出席しなければいけないので、新兵の教育のような時間のかかる仕事は出来ないのだろう。

面倒くさいと言っても、他の人に迷惑をかけるのは遠慮したい。

「正式に役職が変わるのは来月からだが、指導者がころころ変わるよりは最初から同じ者が教えたほうが良いだろうという結論になった」

「わかりました」

特に大きな反応を起さなかったユウトに、司令官は不思議そうな顔をした。

「なんだ、昇格して喜ぶか、面倒ごとを押し付けられて不貞腐れるか、どちらを見られるか楽し

みにしていたのに」

「司令官……」

今まで黙っていたアスカが、面倒ごことと言われて目を細めた。

上品な空気が彼女の拗ねた表情により薄まる。代わりに、最初よりも何歳か幼く見えて微笑ましい。

「そうですね。俺は自分より忙しい人に仕事を押し付けてまで楽をしたいわけではないです。俺は相棒と仕事が出来れば満足ですから」

これは、嘘偽り無い本音である。

ユウトが司令官の言葉を否定せずに答えるので、アスカは頬を膨らませ、そっぽを向いてしまった。

「そうか。じゃあ、詳しい話は部隊のほうで聞いてくれ。しばらく忙しくなるだろうが、お前なら大丈夫だろう」

「どうも」

用事が済んだので、ユウトは苦笑しながらアスカを伴って退室した。

「さて、まずは隊長との顔合わせだな。新しい隊長のほうとはもうあったのか？」
司令室を出てすぐ、ユウトはアスカに問いかけた。

先ほどの扱いをまだ根に持っているのか、目線を合わせようとしなない。

「まだだ。この基地の者とは、司令官とユウト殿以外は会ってない」

アスカは周囲を眺めながら低い声で言った。

「わかった。じゃあ、この階の下が隊長・副隊長クラスの執務室だから、挨拶をしてから宿舍の方に向かうぞ」

「了解」

ユウトは今後の予定を頭の中で組み立てながら歩き始めた。

とにかく、早く終わらせたい。なにぶん徹夜で仕事をしていたため、今も眠くてしょうがないのだ。

司令室にいた間は、司令官のプレッシャーで目が覚めていたが、特に何事も無く終わったため安心して眠気が戻っている。

「そう言えば、隊長殿はどんな人なのだ？先ほどの会話に出てきた名前からすると女性のようにだが……」

無言の空気に堪えられなくなったのか、アスカが思い出したように聞いてきた。

「隊長は……うーん……」

普段当たり前のように会っている人だが、いざ聞かれるとなんて言い表せば良いか分からない。

「そうだな……美人で仕事熱心。でも、少し……いや、かなり残念な人……だ」

「何だそれ？前半は良いが、後半がよく分からない」

アスカは眉を顰めた。確かに、抽象的すぎてどんな人物だか分からない。

「まあ……なんだ……会えば分かる」

ユウトは困ったように頭を搔いた。

そして、階段を下りてから廊下の突き当たりまで来たところでユウトは足を止めた。

「ここだ。入るぞ」

ユウトはノックもせずに一番端の扉を開けた。

部屋に入ると、室内に充滿した獣臭いにおいがアスカの鼻を突いた。

「うう……これは……」

アスカは無意識の内に指で鼻をつまんだ。首都のほうでも犬や猫を飼っていたのでこのにおいは知っている。だが、ここまで酷いのは初めてだ。

一度言ったことのある首都の童舎よりも酷いかもしれない。隣にいたユウトが無言で歩き出し、部屋にある窓を全開にした。

「この部屋割りをした人には感謝しなくちゃな」

ユウトは窓を見ながらそう言った。ここは角部屋で、他の部屋より窓が多くなっている。こうなることを見越しての配慮なのだろうか？

彼女としては、この部屋で平然としていられるユウトに敬意を表したい。

臭いが薄まったところで、アスカはやつと部屋の内装に意識を向けることが出来た。さっきの司令室ほどではないが、それなりに良い家具がそろっているが、いくつか変な点があった。

机の向こうに、紙の山がある。そして、部屋の角には木枠の中にてんこ盛りの藁が積まれているのだ。

「ん・・・誰かいるの？」

その時、真ん中の紙の山が崩れた。中からは軍服をかなり着崩した女性が顔をだす。寝ていたのだろうか、口元によだれのあとがある。

「おはよう、ユウト君。よく寝たー」

女性はずもぞと山の中から這い出してきた。

「隊長。書類の中で寝ないでください」

ユウトは呆れながら書類だった紙を拾い集め始めた。

「えー。紙って意外と寝心地良いんだよ？私は藁の方が好きだけど、たまには違う物も試してみたいなって思っていたんだ。こんなに紙もあるんだし」

女性はにばーと効果音のつきそうな笑顔を浮かべた。

「そ、そうですか・・・」

ユウトは力なく呟いた。彼の表情には諦めの色も濃く、このやり取りがめずらしいものではないことを示していた。

「それより、隊長。うちの部隊に配属された新兵を挨拶させるために連れてきたのですが」
自分の気持ちごと切りかえるように、話を変えた。

「あ、本当だ。女の子なんだ、めずらしい」

女性は興味津々といった様子でアスカに歩み寄る。それにつれてさっきの獣臭いにおいが強くなっていることに彼女は気づいた。

臭いの元はこの人か・・・

アスカは引きつる顔を抑え、無理やり笑顔を浮かべた。

「ア、アスカだ。よろしく頼む」

「だめだよ。目上の人のため口なんて。ちゃんと敬語を使わなきゃ」

女性は子供のように頬を膨らませた。

「敬語って……どうすればいいんだ？」

敬語なんて、生まれてこの方使ったことが無い。

「とりあえず、語尾に「です」と「ます」をつければ良いと思うよ」

女性はそう言ってから、ユウトを見て目を丸くした。

「あ！だめ！私のベッドに触らないで！」

女性は叫んでユウトにしがみついた。

ユウトは藁を束にして、どこから取り出したのか縄で縛り始めた。

「じゃあ、自分で片付けてください！下の藁が腐りかけています！」

ユウトは女性の叫び声に負けないように声を張り上げた。

「だって、最近は書類の中で寝てたからそんな分からないもん！」

「最近っていつからです!?!」

女性はユウトを離して腕を組んで考え込んだ。

「多分……十日ぐらい」

「……今まで毎日替えていましたよね？」

急に落ち着いた二人を尻目に、アスカは女性の言うベッドに近づいた。

この辺りでは藁をベッドに使うのだろうか？

不思議そうに覗き込むと、木枠の中には黒く変色してボロボロになった藁が入っていた。

「うわあ！な、何なのだ、これは！ふ、不潔だ！不潔！」

アスカの体に悪寒が走った。

「は、早く片付けてくれ！」

アスカは扉の前まで後退し、振り払うように手を振った。

「分かったー。ポイー！」

女性は、アスカの叫びを聞き届けて藁の束を窓の外へ投げた。

「た、隊長！」

「大丈夫、大丈夫。後で管理人さんがちゃんと捨ててくれるから」

女性はピースをしながら微笑んだ。

竜騎士隊のアキと言えば、軍一の変人として有名だ。「好きこそもの上手なれ」という諺にあるように、彼女は竜を愛し、騎獣の知識と扱いは他国の兵士と比べても光るものがある。

彼女を竜に乗せたら、敵う者は今のところ片手の指さえあまるほど少ないと言われるほどの猛

者である。

だが、仕事以外のことは全く興味を持たない困った人物として彼女の部下はよく振り回されているのであった。

彼女が何故、病的なまでに竜を溺愛するのかは分かっていないが、その子供のような振る舞いの裏に、自分と通じる何かがあることを、ユウトは何となく感じていた。

「改めまして、竜騎士隊隊長のアキです。よろしく！」

ユウトの懸命な働き振りにより片付いた部屋で、アキは元気に挨拶をした。

「隊長、引継ぎのほうはもう大丈夫なのですか？」

ユウトは疲れきった顔をして確認した。まだ仕事が残っているのならなるべく終わらせて、まとまった睡眠を取りたいところだ。

「うん。隊長さんからは全部話は聞いてきたから。後は特に急ぎの仕事はないよ」

「この書類は？」

ユウトは机の上に集めた、先ほどまでアキのベッドになっていた書類を指差した。この中に期限切れの物が混ざっていたら洒落にならない。

「これはね。もう用件が終わって私のところに戻ってきた奴だよ。そのまま捨てるのがもったいないなーって思ったからベッドにしてたんだ」

その言葉に、ユウトはほっと安心した。そうだ、この人が仕事をサボるなんてありえない。

アキは再び笑ってから、何かを思い出したように手を叩いた。

「そうだ。私、アスカちゃんに聞きたいことがあったんだ」

「へ？な、なんだ？」

アスカは急に話を振られて驚いていた。

「アスカちゃんは、なんでうちの部隊に入ろうとしたの？」

「わ、私は……。竜騎士に憧れていて、竜に乗ってみたいと思ったんだ」

アスカは頬を赤く染めながら小さな声で言った。

「へー。じゃあ、次の質問。竜をどう思う？」

「私は、かっこいいと思う。」

アスカの答えに、アキは目を輝かせた。

「そうだよね！竜ってかっこいいよね！」

「は、はぁ……」

突然テンションのあがったアキに、アスカは戸惑う。

「私の入隊理由はね、この部隊にいれば竜と一緒にいられるからなんだ」
最初はアルバイトの面接のような雰囲気だったのに、いきなり会話がおかしな方向に進み始めた。

「竜ってすごいよね！私、竜大好き！アイラブドラゴン！」

アキはそう叫んでから、机の奥にある棚をあさり始めた。

「見てみて！これ、竜騎士隊の竜たちの鱗！古くなると生え変わるからこうやって集めているの！」

彼女は棚に飾つてある人の顔と同じくらの色とりどりの大きな鱗を机の上に並べ始めた。

「今日は仕事もほとんど無いし、これからみんなの所に遊びに行けると思うと楽しみでしょうがないの！」

本当に楽しそうに笑うアキを見て、ユウトは思わず微笑んだ。

変人と呼ばれているアキだが、周囲からの信頼は驚くほど厚い。

彼女は、絶対に仕事をさぼらない。軍に、竜騎士隊に所属し続けるために、誰よりも完璧に仕事をこなすのだ。

竜が好き、純粋なその思いがあるからこそその理由だった。

「どうだった？うちの隊長殿は？」

本部を出てから、ユウトはアスカに聞いてみた。

「変なところもあるけど、良い人だと思う」

アスカはニコニコしながら言った。

「そう感じてくれたのなら良かった。初対面の奴の中には、あの人を馬鹿にする奴もいるんだ」

「そうなのか？ああいう真っ直ぐで無邪気な人、好ききだぞ。隊長を悪く言う奴の方が馬鹿だと思う」

アスカはユウトの話を聞くと、眉間に皺を寄せて怒り始めた。

この数時間で分かったが、アスカは感情の起伏が激しくて物事をはっきり言うタイプである。

お偉いさんは心にも無い言葉を言い合い、常に腹の探りあいをしているような信用できない連中、というのが彼のイメージで、特に名家の令嬢なんかは「おほほほほ」なんて笑いながらにらみ合っている光景を思い浮かべていた。

アスカみたいな例外もいるとは、正直驚きだ。

「話は変わるが、宿舎はまだ見えてこないのか？」

一人で考えている間に、アスカは歩きつかれてしまったようだ。

「宿舎は、あの建物の隣にあるやつだ」

ユウトはそう言つて、前方に見える童舎を指差した。

「……あの家畜小屋みたいなコンクリートの建物か？」

「か、家畜小屋か……」

アスカは目を細めて両手を額の辺りにつけながら言った。

「あんなのにユウト殿たちは住んでいるのか？」

「ああ。本来なら五人部屋だが、お前は女だから一人で一部屋使えることになっているらしい。首都より不便だが、我慢してくれ」

「うう……がんばる……」

アスカがしょんぼりと肩を下げるのを見て、ユウトは楽しそうに微笑んだ。

訓練場に銃声が鳴り響いた。

「構え！」

ユウトの号令に、隊員たちが一斉に銃を的に向けた。

「撃て！」

そして、再びの銃声。

「よし、今日の訓練は終わりだ。各自銃の手入れを怠らないように！」

隊員たちから威勢の良い返事が返ってきた。ユウトはそれに満足そうに頷いた。

「それと、昨日連絡したように第二小隊は午後から任務だ。最低でも三日はかかるからしっかり準備しろよ！」

ユウトはそう言ってから腕時計を確認し、本部に向かって駆け出した。

今まで何度も訪れた司令室が、最近はとてつもない嫌な場所になった。

前の司令官にからかわれることとは違う、もっと陰湿で悪意に満ちた行為に、正直苛立ちが募る。

「司令官殿に面会しに来たにしては、ずいぶんとみすぼらしい格好だな。これだから野蠻な連中は、理解できない」

司令室の扉の両脇に立つ兵士が、あからさまに嫌そうな顔をした。

「あまり言い過ぎてはいけませんよ。竜騎士隊は我々が異動してきたので、軍資金をずいぶんと削られたのですから」

もう一人の兵士がたしなめてから、でも、と付け加える。

「普段の仕事ぶりからすれば当然でしょうね。あなたの部隊は、我が主人に最も反抗的ですからね」

くすくすと、芝居がかった仕草で兵士たちは笑った。

ああ、情けない。ユウトの心は冷えていた。

彼らの見下すような言葉も、身にまとった豪華な鎧も、小さな子供が背伸びをして必死に自分を主張しているかのようで、哀れに思えてくる。

自分が崇高な存在だと勘違いしている彼らは、酷く滑稽に見えた。

「任務に出発するので報告に来たんだ。司令官に取り次いでくれ」

「あの方はお取り込み中です。それに、あなたごときが室内に入れば、主人が機嫌をそこねますので、私がお伝えしておきましょう」

ユウトは少し考えた。

「……分かった。よろしく頼む」

期待はしていないけれど。

ユウトはどうでも良い、といった風に踵を返した。

「ユウト殿！」

振り返った通路の先に、アスカの姿が見えた。

「みんな準備が出来たぞ。早く出発しよう！」

せつかな部類に入る彼女は、短距離走をしているように全速力で駆け寄ってきた。結局直らなかつた言葉遣いでまくし立てる。そして、兵士たちが気になったのか彼らをまじまじと見つめると、

「これ、金メッキだな」

と言いつつ放った。

「なんだと！」

「貴様！これは純金製の鎧だぞ！」

兵士たちは顔を真っ赤にして怒鳴った。

「そんなわけないだろ。金は今、貴重な物だ。首都の外への持ち出しは禁止されているんだぞ？
知らないのか？」

アスカは彼らを冷たい目で見つめた。

「そうなのか？」

ユウトは驚いた。貴重な物資は流通の制限がされるのは知っていたが、具体的に何がどのように規制されているのかは知らなかった。

「ああ。首都の外に住んでいると分からないからな。だが、お前たちは首都から異動してきたのだろう？知っていて当然だが？」

「あ、当たり前だ！これは、信頼できる筋から買い取った物だ。首都の検査も、司令官どのが口を利かせてくれたのだろう」

「そうだ。お前たちはこれがうらやましいからそういつているのだろう？
これはすごいぞ！銃弾さえも弾くのだからな」

一瞬慌てた彼らだが、変な誤解をして得意そうに鎧を見せ付けてきた。

「金は脆くて純金じゃほとんど使わないよな、確か」

「そのはずだ。わざわざ合金にして使うぐらいなら、鉄とかのほうが丈夫な物が造れると思うぞ」

二人は顔を見合わせて頷きあった。

「しつこいぞ貴様ら！この鎧は何よりも硬い金で造られているのだ！」

「……もういい、言うだけ無駄だ」

ユウトは呆れたようにため息をついた。

「いるんだな、こういう馬鹿。まともな会話をしようとした私たちが恥ずかしい」

アスカは階段に向かって歩き出していた。

「なんだかな・・・」

ユウトはアスカの後を追いかけた。

「つてな事があつたわけだ」

先ほどの幼稚なやり取りを振り返り、ユウトは大きなため息をついた。

「ああいう馬鹿を左遷させるのはいいが・・・他の迷惑にならないようにして欲しかったな」

「そうだな。オレも嫌いだ。あいつらが来てから食事の量と質が落ちた。」

「そういう基準か・・・」

食べ物にうるさいジークは真剣に怒っているが、ユウトはその理由に呆れて文句を言うのが馬鹿らしくなつてしまった。

「小隊長殿。目的地が見えてきましたぜ！」

ユウトの右後ろに飛ぶ竜の背中から、隊員が声をかけてきた。だが、眼下には青い海が広がるばかりだ。

「えーと、どこだったって？」

「あの三角に近い形の島です！」

彼は、海に豆粒のように点々と浮かぶ島の中でも一際大きい島を指差した。

「あれか……」

「あの島、私教科書で見たことあるぞ！確かあそこが旧日本領の最北端だったんだ」

アスカが左後ろから叫んでいるのが聞こえた。

「名前が……えーとホ……」

「ホッカイドウ」

「そう、それ！」

ユウトが呟いた言葉に、アスカがびしつと指を向けた。

「『温暖化による海面の上昇で日本の国土は二十七パーセントが水没した。それによりシコク、オキナワは完全に海の底へと沈み、ホッカイドウは独立した島という扱いに変えられた。』以上

『近代日本史』より」

すらすらと教科書の内容を暗唱するユウトに、アスカは目を丸くした。

「なんだ、ユウト殿も知っているじゃないか」

「一応、オレが住んでいた地域も義務教育が残っていたからな」

ユウトは苦笑しながら言った。

「なるほど。今回は、あそこで金属の収集をすれば良いのだったな」

「ああ。そうだ」

この地域が政府の衰退とともに統治が困難になったことで、ここに住んでいた人々は本島の方に移住した。

そのため、多くの生活の名残が島には残っている。

「よし。ジーク、あそこの砂浜に降りてくれ」

「分かった」

ジークが高度を下げると、後ろについてきている三頭の竜もそれに続いた。

「資料によると、あそこに見える街にまだ鉄が残っているらしい」

島に降り立ったユウトたちは、静かな砂浜で任務の確認を行っていた。

表面上は無国籍の無人島だが、その資源を求めて多くの国が密かに動いているため、最前線と同等の緊張感を持つ必要がある。

敵軍とぶつたり、最悪の場合、他の国家を巻き込んだ混戦にまで発展する可能性もあるからだ。

「敵国の偵察ルートが近いため飛んで近づくことができないが、偵察は一日に二回、早朝と夕暮れに行うそうだから時間はたっぷりある。……この情報が正しければな」

ユウトは資料の最後の行に書かれた日付を見て眉をひそめた。

よりによつて五年前の資料しか出てこないとは、あの司令官の手腕の悪さには頭が上がらない。五年も経てば駐屯基地のひとつやふたつ、とつくに建っているだろう。もしかしたら、極秘に移住を進めて街まで造っているかもしれない。

「今日はもう暗くなつてきた。あと二時間たつたら、俺とアスカで夜間偵察してくるので、まずは拠点を造ろう」

ユウトは空と腕時計を見比べながら言った。

「了解」

それぞれが自由に返事をして、自分の騎竜の元へ駆け寄つた。

「ジーク、悪いけどこの任務中は干し肉で我慢してくれな」

「覚悟はしているさ」

ジークは困つたように目を細め、溜め息をついた。

ユウトはジークの背中に積んでおいた荷物を降ろした。

完全に日が落ちて辺りが闇に包まれたころ、廢墟の街の上空にふたつの大きな影が浮いていた。

「ユウト殿、どこにも人はいないぞ」

「わかってる。でも、今はいなくても偵察に来るかもしれないからな」

口ではそう言っているけど、ユウトも心の中ではこの偵察の無意味さに気づいていた。かれこれ三時間近くはここにいるが、肉眼で異変を確認することは一度もなかった。人の何倍も五感が優れているジークたちでさえ何も感じ取れないのだ。

もう帰ろうかと思つたとき、ジークが急に辺りを気にしだした。

「何か、来たな」

時間がたつに連れて、ジークの視線が定まっていく。

「あつちだ」

ユウトたちがいる高さから見下ろせる辺りに、三つほどの影が現れた。

影は辺りをぐるぐると旋回し、十分ほどでもと来た方向へ帰っていつてしまった。

「なんだ？あれで偵察なのか？」

アスカが不思議そうに首をかしげる。

「偵察と言うよりも、何かを探しているような感じだったが」

考えても答えが出てくるわけでもないので、ユウトは追求を諦めた。

「アスカ、そろそろ切り上げよう」

敵がここまで来ると分かっただけでも収穫だ。帰ろう。

「よし！」

アスカは嬉しそうに声を上げた。暗くて見えないが、その顔も満面の笑みを浮かべているに違いない。

「ジーク、頼む」

ユウトの言葉に答えて、ジークは翼を大きく羽ばたかせた。

「よし、レナ私たちも行くぞ！」

アスカの騎竜であるレナの羽ばたきがすぐ後ろについてきた。

そのまま二人を乗せた二頭は、闇夜にまぎれながら海岸の方に飛んでいった。

二人が戻ると、待機していた隊員たちが食事を準備していた。

「お疲れ様です。どうでしたか？」

「敵は見つけたが、何か変だったな」

ユウトは偵察のときに見た敵の情報を伝える。

「もしかしたら、ここに来ていことがばれているのかも知れませんね。」

「そうかもな。予定より早めに任務を終わらせようか」

焚き火に干し肉とパンをかざしながらユウトは言った。

「私も賛成だ。野営をすると、次の日首が痛くなる」

うんうんと頷きながらパンをかじるアスカに、他の三人が苦笑した。

「そういえば、アスカもこの三ヶ月で丸くなったよな。最初のころは宿舎での生活さえ耐えられない状態だったのに」

ユウトは遠い目をしながらいった。

入隊したところのアスカは、もう我が儘言い放題のじゃじゃ馬娘だった。

ベッドが硬いと真夜中にたたき起こされ、マットの数を増やしたり、雑穀が食べられないと夕ダをこねられたり、以前の任務で野営をしたときも虫が出たとかで泣き叫び、危うく敵に場所を知られそうになったり、数えたらきりが無い。

その我が儘を最終的に叶えてしまうユウトにも上司としての責任があるが、彼はアスカが泣く表情をみると、必ずやるせない気持ちになるのだった。

「私も学んだんだ。まさか、首都以外の地域ではここまで生活水準が落ち込んでいるなんて、思

つてもいなかった」

そう、アスカのもうひとつの問題だった部分は、なんでもかんでも首都での生活を基準にする
ことだ。

現在、電気とガソリンは首都でしか使用が出来ない。そのため、車と電化製品も首都にしか
ない。他の地方では、使い方どころか存在さえ知らないという人もいるぐらい貴重なものとなっ
ている。

全盛期の名残を、首都が独占していることに不満をもつ者もいるため、アスカが何気なく言っ
た一言が、基地の兵士と口げんかに発展することもよくあった。

「私も、国を変えられるようにもつとがんばらなくちゃな」

「お嬢、そういうのは政治家に任せておけばいいんだよ」

隊員の一人が、笑いながらいった。

「任せられないから言っているんだ」

不機嫌そうに頬を膨らめますアスカを微笑ましく眺めながら、ユウトは暖かい気持ちが心に広が
っていくのを感じた。

無人の街に風が吹きぬける。建物の影から辺りをうかがいながら、ユウトたちは街の中心へと向かう。

昨日の敵の動きがあまりにも不可解だったため、いつも以上に用心しなければならない。

「よし、行くぞ」

ユウトは銃を構えながら建物の影から出た。そして、周囲を確認しながら近くの住宅に近寄る。

「人の家を物色するのか!？」

玄関に近づき、短剣を使って扉をこじ開けるユウトに、アスカは驚いた。

「……まるで強盗だな」

「違うない」

苦笑しあう二人を先頭に、彼らは中へ入った。

「これは、ひどいな」

ユウトは部屋の惨状に顔をしかめた。部屋にあるものは、すべて原型をとどめないほど壊されていて、靴を履いていなければ怪我をしそうなくらい危ない状態だった。

「俺たちよりもひどい強盗がいたな」

「そうですね。これで何軒目でしょうか？ポロポロじゃないですか」
隊員の一人が、何かの破片を手にとつて眺めていた。

「昔、一体何があつたんだろう？」

「いや、これは住人たちが逃げた時に起こつたものじゃない」

ユウトは、部屋を見回してから言つた。この部屋には、埃が全く積もっていない。何十年前も前に無人島になつたこの島でそんなことはありえないのだ。

「最近、誰か来たな」

ユウトは目を閉じて、風の流れを感じ取る。

「どこかに穴を開けて侵入したんだな。風が吹いている」

「他の国の連中ですかね？」

恐らくな、と言いながらユウトは収穫の少なさに困つたように眉を顰めた。

「運搬のときに目立つから、あまり気が進まないんだがな」

ユウトは玄関へ向かつた。

「みんな、駅へ向かうぞ」

街の中央に、かつては大勢の人が移動に利用していた公共機関の駅がある。その隣には、役目を終えた電車が眠る車庫が併設されていた。

「おおー！首都の博物館にある電車より大きい！」

アスカは目を輝かせながら車庫を走り回っていた。

「ガキかあいつは……」

ユウトは呆れながらも、なるべく老朽化が進んでいない車両を探す。

「このぐらいの大きさなら、一頭で一車両運べそうですね」

「ああ。でも、全員に持たせたら、敵に襲われたとき迎撃できないよな」

二人が話し合っていると、アスカと、その見張り役につけた隊員が大きな袋を抱えて戻ってきた。

「副隊長、こんな物見つけましたぜ！」

どれどれと袋の口を開くと、中にはネジやボルトやらがたくさん詰まっていた。

「良く残ってたな。少しさびているが、これなら使えるだろう」

ユウトは思わぬ収穫に顔が綻んだ。

「あとは、ジークたちをここに呼んで運んでもらうだけだな」

その時、外側からこの倉庫を引っかくような音が聞こえた。

「なんだ？敵か？」

ユウトは三人に待機の指示を出し、窓のそばによって壁にもたれかかりながら外の様子を伺った。

だが、そこから見える範囲には異変は見つからない。

「風か？」

そう小さく呟いてすぐ、その場から少し離れた場所の壁が叩かれた。

正体の分からない存在に、ユウトが息を潜めていると。

聞きなれた羽ばたきの音と共に見慣れた巨体が降りてきた。

「ジーク……」

「よう、待てなくて来ちまったぜ」

のんきなジークの言葉に、ユウトは長いため息をつきながらその場に座り込んだ。

「合図するまで待機って言っただろうが」

呆れと怒りを含んだ声を、絞り出した。

「ああ、何も無ければ俺もそうしていたさ。だがな、」

ジークは一瞬、背後の街並みに目をやった。

「囲まれてるぞ」

「何!？」

ユウトは珍しく声を荒げた。そんな気配は全く感じなかった。いつの間に……

「オレもさつき気づいたばかりだ。今までの敵より、訓練が行き届いているみたいだ」

ジークは敵の接近に気づけなかったことに腹を立てていた。

「他の奴らは入り口に回っている。さっさと運び出して逃げよう」

ユウトはその言葉に頷き、奥のほうに待たせていた三人を呼んで入り口に向かった。そして、人が何とか通れるぐらいだった隙間をこじ開けて全開にした。

そこへ、外で待っていたジークたちが飛び込んでくる。

「持てるか？」

心配そうな声に、ジークはにやりと笑ったように見えた。

「もちろん」

ジークが一番手前にあつた車両を、レールに沿って押し出す。

「軽い軽い。かさばらなければ、もうひとつ運べるぞ」

車両全体が車庫から出ると、ジークはふわりと浮かび上がり、車両を掴みあげた。

「つてどこ行くんだよ!」

ユウトを乗せずに飛んだジークは、そのまま空中で静止している。

「副隊長、全部運び出しました。すぐにでも退避できます」

「苦勞」

他の三頭が電車を外へ出して、ユウトの命令を待っていた。

「その前に、お客さんのようだ」

ユウトは周囲の建物の影に、人の気配を感じていた。

「ばれていたか」

気づかれたことに、隠れることを諦めた相手は姿を現した。

「大人しくしてもらおう。竜に乗るのと銃を撃つのと、どちらが速いか分かるよな」

迷彩服を着た集団が一斉に銃を構えているのを見て、ユウトはゆっくりと両手を挙げた。

「武器も捨ててもらおう。いくら量産型の粗悪品でも我々に危害を加えることは出来るからな」

ユウトは一瞬顔を引きつらせたが、ホルダーにさしてある銃に手をかけた。

「ユウト、下がれ！」

アスカの声が後ろから聞こえたのは丁度その時、ユウトはその声に反応し、弾かれたように後ろに跳んだ。

ほとんど間を置かず、敵のど真ん中に何かが落下した。

「ジークウウ!!」

ユウトは落ちてきた物が電車だとすぐに気づき、上に向かって怒鳴った。

「殺す気かよ!!」

もし、ユウトが逃げなかったら敵と同じように悲惨な状態になっていただろう。

「悪い悪い。でも、結果オーライだろ？」

「よくない」

ユウトは不機嫌そうに言った。

「ジーク、電車の使い方が間違っているぞ」

おかしな方向に指摘をするアスカに、彼は脱力した。何故か、かなり残念な気持ちになったのである。

「誰か俺の心配をしてくれ・・・」

降りてきたジークに跨り、ユウトは街から離れた。

無事に生還した四人は、行きは数時間だった空路を、半日かけて戻っていた。繰り返しの戦闘によって疲労が見えた隊員たちも、久しぶりの基地が見えると笑みを浮かべ始めた。

「やっと……ついた」

普段はありえないような大荷物を運ぶジークたちも、今回ばかりはほっと安堵の溜め息をついていた。

だが、基地の真上に差し掛かると防壁によつて見えなかつた基地の様子にそれぞれが顔をしかめる。

「あいつら……」

ユウトたちの宿舎の前で、任務に出る前にひと悶着あつた連中と同じ鎧を着込んだ兵士が待っていた。

「とりあえず、着陸」

ジークたちに今回の収穫物に気をつけながら降りてもらつと、ユウトは彼らの元へ駆け寄る。

「よく帰つてきたな、貴様ら」

兵士はユウトをあざ笑うように言った。

「司令官の許可なく三日も外出するとは、本当にこの隊は教育というものがなっていないのだな」

「今回は司令官から指令書が出ている立派な任務だ。出発するときにあんたの仲間に伝えたはず

だぞ」

ユウトが硬い表情で答えると、兵士は一瞬呆けてから大声で笑い出した。

「何を言っているのだ？ 貴様らが基地を出た日は、誰も司令室に来なかつたと担当の者は言っているぞ。我が部隊の者に責任をなすりつけようとは、随分浅はかな言い訳だな」

兵士は一通り笑つてから、さらに気味の悪い笑みを浮かべた。

「現在、会議室でお前の隊長が今回の件の罰を伝えられているところだ。

その罰のために、貴様らの隊の仕事を私たちの部隊が引き継ぐことになっている」
「そこまで言い終わつてから、そうそうと兵士は付け加えた。

「引継ぎのために、仕事の概要書を持つてくるようにとの貴様の隊長殿からの伝言だ。これが最後の仕事だと思えよ」

「どういうつもりなのかね。隊長殿」

時間を少し遡り、アキは突然何の説明もされずに司令室へ連行された。

司令官はつまらなそうに彼女を見つめる

「君の部隊の者は、私の許可も貰わずにもう三日も帰つてこないぞ。連中は一体なにをしているのだね？」

「私は、司令官殿に命ぜられた北方での資源回収を彼らの小隊に任せただけですが、ご存知ありま

せんか？」

アキは無機質な愛想笑いを顔に貼り付けながらそう言った。

「いや、知らないな。その日は誰か来たかね？」

司令官は背後に控える私兵のうち、その日に警護の担当をしていたほうに顔を向けながら聞いた。

「いえ、誰も」

私兵はにつこりと笑った。司令官はまるで合図しあうかのように微笑み、アキのほうを向いてだそうだと、といった。

「困るのだよ。一応、この基地最強の部隊であろう。その副隊長ともあろう者が無断で小隊を連れて行くなんて」

それから、少し悲しそうな顔をする。

「管理下の部隊が規律違反を犯すなんてことが中央に知れたら、私の経歴に傷がついてしまうのではないか。私は、傷物は嫌いなのだよ」

違反自体よりも、自分の保身が優先らしい

「副隊長には帰ってきたらしっかり注意しておきます」

アキはもう面倒くさくてしかたがなかった。部下も部下なら上司も上司だ、どうしてこんな奴

らが偉そうに踏ん返り返っているのだろうか？

「それだけじゃ足りないのだよ。自分が違反を犯したせいで、部隊全体にも責任が科されるということをしっかり理解してほしいのだ」

司令官は物分りの悪い子供を見るような目でアキを見つめた。部下の告げ口に乗るような奴にこんな目で見られたくない。

結局はうちの部隊が気に入らないから、なんとか理由をつけてお払い箱にしたいのだろう。

そして、司令官は気味悪く微笑みながら、

「君の部隊に今後一切仕事は与えない。部隊ごと除籍をするので部下どもに言い聞かせて置くように」

さらりと、四十名の人間をクビにする旨を口にした。

「なっ！ あなたは、今の戦況を理解していてその処罰を決定したのですか!？」

さすがのアキも声を荒げた。いつ隣国が侵攻してくるかもわからないこの状況で、客観的に見ても一番の戦力となっている竜騎士隊を切り捨てるなんて。仮にも一拠点を任される指揮官の采配ではない。

「もちろんだとも。私の直属の部隊がその気になれば、あのような蛮族の国など一晩にして攻め落としてしまうだろう。だから貴様らはなんの憂いもなく、この地から去ればいい」

「主、お言葉ですが、この女は部隊のことよりもあの蜥蜴どもと離されることのほうが嫌なのですよ」

後ろの私兵が、可哀相なものを見るようにアキに顔を向けた。

「そうなのか。なら、貴様だけならこの基地に残してやっても良いぞ。騎竜の世話の代わりに、私の相手をするのならな」

司令官の視線に、粘つくような気色悪いものが混ざり始めた。

「貴様は顔が良いのだから、もう少し愛想良くすれば良い。そうだ、貴様が私の侍女になるのだつたらあの部隊を残してやろう」

下心を隠そうともしない司令官の態度に、アキは後ろで組んでいる拳を血管が浮き出るほど握り締めた。

「いえ、結構です」

燃え盛る怒りを静めて、アキは先ほどよりも冷たい視線を前に向けた。

「ですが、司令官が私の出す賭けに応じてくれるのなら、司令官が勝ったときの報酬としてその条件を飲みましょう」

アキがそう言うと、司令官は驚いてから再び笑みを浮かべた。

「それは、賭けの内容にもよる。貴様らに有利なものだったら断る」

「いえ、とても簡単なことです。竜騎士隊と司令官の直属部隊のなかからそれぞれ精銳を選び出し、一騎打ちを行うのです。司令官の兵士が勝てば私の全てを捧げます。私の部隊が勝てばお咎めなしということで」

アキの提案を聞き終わると、司令官と私兵は大声で笑い出した。

「貴様はこんな賭けが成立すると思っているのか？明らかに我らの圧勝であるに決まっていますではないか」

「ええ。こちらはお願いをするほうですから、こちらが分の悪いほうが丁度いいのです」

アキは、そこに付け加えた。

「どうせですから、一カ月後に行われる天皇陛下の行幸時の御前試合という形にすればよろしいかと」

司令官は少し考えるようにあごに手を当てる。

「ふむ、それは良い。ちようど、何をお見せしようか悩んでいたところだ」

「では、決定ですね」

「早くしろ、司令官様を待たせるな」

そんなことを言われても、とユウトは思う。

今、彼は前方が見えないほどの書類を抱えているのだから。

隊長の執務室からかき集めてきた書類は、竜騎士隊が今まで担当してきた仕事の概要が記されている。

これを見た他の部隊の者は決まって顔を青くしたが、この私兵はなんの変化もない。動じていないのか、それともわかっていないのだろうか。

「主様、連れてきました」

やっと司令室にたどり着き、ユウトは扉を背中で押さえながら慎重に中へ入った。普通、両手が塞がっていたら扉を支えてくれても良いのだが。

「隊長、完全に遂行しきった仕事以外、日常的なものや緊急時の割り当てを中心に持ってきました」

ユウトは書類を司令室の中央にある円卓に置いた。

ユウトがそこまで言って、私兵たちはやっとこの書類の山が自分たちに引き継がれる仕事だと理解した。

「では、仕事の引継ぎの説明はここで行ってもよろしいですか？」
アキは司令官に質問する。

「構わない。私も、貴様らが普段どんなに暇を持て余しているか聞きたいところだ」
司令官だけが、仕事量の異常さについてきていなかった。

「では、まず偵察関係の任務ですが……」

アキは書類の中から数枚の紙を取り出した。

「偵察は、毎日五カ所を三時間交代で行います。配置は一カ所に最低二人、できれば四人ぐらいが相応しいです。天馬部隊の方々は八十人ですから、半日に一回順番が回ってくる計算です」

「そ、それは他の部隊には回せない仕事なのか？」

私兵が冷や汗をたらしながら聞いてきた。

「無理です。もともと、偵察任務は機動力と高い戦闘力が求められます。

敵を見つけて基地に報告をしようとしても、敵のほうが速かったらあつという間に基地に奇襲されてしまいます。そのため、飛行能力がある部隊を偵察任務につけるのが軍での暗黙の了解になつていきます」

この基地にある空中戦力は竜騎士隊と連中だけだ。

「次に、この時期に増える大雨による土砂災害ですが……」

引継ぎの説明を終えたころには、司令官と私兵たちは本当に嫌そうな顔をしながら書類とにらめっこしていた。

「……わかった、何とかしよう」

司令官は顔を歪めながら呟くように言った。

「御前試合まで、副隊長とその小隊は謹慎、回収してきたあの鉄の塊はこちらで預からせてもらう。分かったな」

「はい。了解しました」

ユウトとアキはアイコンタクトをしてから退室した。

「本当に良かったんですか？隊長ならもっと連中から絞り取ると思っていたんですが、今回は大人しく引き下がりましたね」

ユウトは少し不思議そうな顔をした。彼女の交渉術ならもっと高度なやり取りをしてがっばり儲けそうな気がするが。

「もうちょっと、泳がしておくつもり。それに、あいつらからはうちの部隊の利益になる物が見つからないから、今のところ価値は無いよ」

アキは普段の無邪気な笑顔になった。

「まあ、本音を言えばあの司令官に駆け引きを持ちかけたら、どんな屁理屈押し付けられるか分からないからなんだけどね」

「確かに、部下があれですからね……」

ユウトは数日前の会話を思い出すように遠い目をした。

「あ、やっぱり何かひと悶着あったんだ」

「オレじゃなくてアスカなんですけどどね」

アキはそっかー、と納得した表情で頷いた。

「とにかく、ユウト君たちは謹慎なんだから、久しぶりの休みだと思って遊んできなよ」

「そう言われてもすることがないんだよな……」

謹慎初日、ユウトは自室のベッドに寝転び、ぼんやりと天井を眺めていた。

「とりあえず、今日は寝よう」

ユウトは横向きになり、目を閉じた。

一方、アスカは早朝から童舎のほうへ来ていた。

「どうしたアスカ？レナじゃなくて俺に用があるなんて」

ジークの前に何故か体育座りをするアスカは、俯きながら口を開いた。

「ジーク……ユウトってかっこいいよな」

「は？」

アスカの変な話の切り出し方に疑問を感じたようなジークは、何かを言おうとしてまた口を閉じた。

「初めてあった時、今まで見てきた同年代の男と違う感じがしたんだ。

あいつは自分を飾らない。損得を考えて行動しない。人を区別しない。

首都にいたころ、私に言い寄ってきた男共は自分が一番で、私より、私の地位が目当てだったんだ」

正直思いつくだけで虫唾がはしる。つくったような薄い笑顔の裏に、一体どれだけの欲望を隠しているのだろうか。考えたくもない。

あれは、人の皮をかぶった獣だ。

「ユウトは、自分に厳しくて他人に優しい。真面目で部下を最優先に考える。そんなあいつがとてもまぶしく見えた」

初めて、同年代で心を許せる男性だった。訓練や任務は大変だが、ここに来てからは自分らし

く振舞えることが出来て楽しかった。でも、

「私は、自分が部下のうちの一人として見られるのが、いつの間にかつらくなっていったんだ。」

他と同じは嫌だ。自分だけを特別に見て欲しい。その気持ちに気付いてしまった。

「私は、今までユウトのような人と関わりがなかった。このもやもやとした言葉に表せない気持ちだが、ただの目新しさから来ているのか、この基地に同年代の人がほとんどいないから親近感がわいて、それを勘違いしているのか……」

自分の気持ちがよく分らない。

「それに、ユウトはアキ隊長とすごく仲が良いみたいだから……」

ユウトへの気持ちの正体は分からないのに、アキへの嫉妬心は手に取るように分かる。首都ではそんな感情が当たり前のように渦巻いていたから。嫌っていた連中と同じ感情をいだくなんて。そんな自分が、さらに情けなくなる。

二人が楽しそうに話していると、行き場のない怒りが自分の中で暴れだすのだ。それを抑えるために、我が儘を言ったり、他の部隊の隊員にあたってみたり、いまさらながら子供っぽくて恥ずかしい。

「ジークはどう思う？この気持ちは、何なのだろう？」

「何だと思っって……俺にそう聞かれてもな」

人と竜では物事の考え方が違う。それが分かっているとしても、アスカには他に相談できる相手がいなかった。

「お前は、どうしたいんだ？」

「私は・・・わからない。わからないんだ」

ジークはそこで笑ったように見えた。アスカには竜の表情の違いを見分けることは出来ないが、なんとなくそう思えた。

「他の女と仲良くされるのが嫌なんだろ？他の奴に取られたくない物があったら、しっかり見張つとけばいいんじゃないか？」

「そうなのか・・・？」

「まずは、自分の気持ちに正直に従え」

アスカはもやもやと霧がかかっていた心が、晴れ渡っていくのを感じた。自分の思う通りに行動しろ、そんな簡単なことで良かったのか。

「そうだな・・・ありがとう、ジーク」

アスカは心の底から微笑んだ。

「やっぱり、亀の甲より年の功だな」

「俺はまだ若い方だ」

不満げに反論するジークを尻目に、アスカは童舎の出口に向かって走り出した。

「このことはユウトに秘密だぞ！」

「はいはい」

陛下の出迎えのために整列したユウトたちの視界の果て、首都へ続く道の向こうから黒い点の列が見えてきた。

「分からないな」

ユウトは小さく呟いた。

「何が？」

それを聞き逃さなかったアスカは目だけをユウトに向けた。最近、アスカはやたらと人の呟きに反応する。答えてくれることは嬉しいが、今回は状況を考えて欲しい。

「行幸の時期だ。なんでこんな張り詰めた戦況で、大勢の軍隊を連れて、しかもこんな最前線に来るなんて、敵を煽っているようにしか思えない」

最近、と言うか以前の異動から何かがおかしい。

ユウトは自分の目に見えない何か大きな力が、誰にも分からないところで動いていると思うと、不安が拭えなかった。

黒塗りの高級そうな車が敷地内に入ってくると、楽隊が国歌を奏で始めた。

お付きの者に車のドアを開けてもらい、姿を現したのはまだ二、三十代ほどの若い男性だった。

「あの人が天皇か、随分若いな」

「ちがう、今年で四十歳だったはずだ。六代ぶりの男性天皇で有名な人だ」

二人は、出迎えた指令官と並んで話しながら基地へと向かう陛下に敬礼しながら話していた。

御前試合は、めずらしく長く時間の取れた陛下の希望で、午後に行われることになっていた。

そのため、ユウトたちは会場の準備が終わったら、休憩時間になっている。はずだったが、

「童舎の見学だあ!？」

陛下を迎えての戦況報告会の席で、アキが聞いたことを苦笑しながら話していた。

「うん。十分ぐらいなんだけど、戦っている時以外の童を見てみたいとおっしゃるの」

ユウトはどうしようかと思いを巡らせながら頭をがりがりとかいた。

大勢の護衛と側近をつれて、陛下は童舎にやって来た。

「すごいな。こんなに大人しい童を見るのは初めてだ」

陛下は感心したように頷きながら童たちに目を向けている。

「童は騎獣の中で最も主人に忠実だと聞くが、この童たちは特に良くしつけが施されている」
最後尾にいたユウトは、自分の顔が引きつるのを感じた。

「お言葉ではありますが、陛下。我々は、彼らにしつけなど行つてはおりません」

ユウトは、無意識に口をついた言葉をそのまま抑えなかった。

「彼らは、犬や猫とは違うのです。感情や思考をもち、無駄な争いを好まない。本当に大らかな生き物なのです」

いきなり陛下に意見をさせたユウトに、側近の何人かが不快そうに顔を歪める。

「対立ではなく、共存を選んだのだからこそ、彼らは我々に力を貸してくれているのです」

「貴様、陛下の御前でくだらない自論を述べるでない。こんなトカゲに羽が生えた程度の下等生物に人間のような高等な思考があるわけなからう」

陛下の隣にいたやたら身なりの良い男が、怒り出した。

「大臣。静かに」

続けて何かを言おうとした男を陛下が手で制した。

「共存か。確かに、彼らがその気になれば、私たち人間はあつという間に滅んでいただろうね。」

賢いからこそその判断に私たちは救われたわけだ」

天皇はそこまで言ってから、微笑んだ。

「君、名前は？」

「ユ、ユウトです」

ユウトが名乗ると、陛下は小さく何か呟いてから踵を返した。

「憶えておくよ。試合、楽しみにしているから」

足早に竜舎の外へ向かう陛下を、ユウトは不思議そうに見送った。

そして、午後。訓練場に臨時に設置された天幕に、国の重鎮たちが並んで座っていた。竜舎に来たときにいなかった者の数も含めると、政治に携わる者の半分がついてきているように見える。とのアスカの言葉だ。

「では、これより御前試合を始める」

今回の試合は、一対一の三番勝負だ。竜騎士隊からは、アキとユウトと最近成長がめざましいアスカが選ばれた。

「一応、それなりの肩書きの相手じゃないと、あっちが文句言つてきそうだから」

中央に向かうアスカの背を見ながら、アキは言った。その正面には翼の生えた馬、ペガサスに騎乗した司令官の部下がいる。

「アスカちゃんは、『入隊したばつかりの新人に最初で最後の出番をあげたい』っていったら簡単に許可もらえたよ」

「まあ、はたから見れば運の悪い奴って感じだな」

二人が会話していると、試合開始の笛が吹いた。

それとほぼ同時に、アスカの騎竜、レナは巨体の重さを感じさせずにふわりと飛んだ。それに少し遅れて相手のペガサスが後を追う。

「あのペガサス、あんまり飛びなれてないな」

じたばたともがくように飛ぶ。ペガサスはなんだか見苦しい。

相手がある程度の高度にたどり着く間に、レナは綺麗に空中で円を描きながら、ペガサスに翼をたたきつけた。

ぺちつと軽い音がしそうな光景に、ユウトは噴き出しそうになった。

それから、地面に落ちた。ペガサスはのろのろと起き上がり、なんとかがみついていた相手を振り落とそうと走り始める。

「あれが本当のじゃじゃ馬だな」

「のんきに言っている場合じゃないんだけどね……」

二人が笑っている間に、他の隊員たちが出てきて、竜騎士隊側の天幕に押し入ってきた。

「なんなんだあれは！我々を侮辱しているのか!？」

「相手の体勢が整うまで待つのが戦いの礼儀ではないのか!？」

「いや、戦場じゃ誰も待つてくれないだろう」

「素通りしたけど、あの人が助けてあげないんだ……」

自分たちの仲間が負けたことにより、言い分が滅茶苦茶になっている。

「もう一度だ、我々が勝つまで試合を続ける!」

「そうだ！我々全員であの小娘を袋叩きにしてやろう!」

私兵たちの身勝手な言葉にととうとう堪忍袋の緒が切れたユウトは妙な迫力をまといながら立ち上がった。

「じゃあ、お前ら。突進で全身骨折がいいか、ブレスで火達磨がいいか、銃で蜂の巣がいいか、選びやがれ!!」

私兵たちより小さい怒鳴り声が、彼らを震え上がらせた。

修羅場を潜り抜けた猛者だけが放てる、濃密な殺気である。

「ま、まて、貴様。陛下の御前だぞ。そんな卑怯なまねはよせ!」

「真つ当な方法で勝てないからって、脅すなんて野蛮だ！」

「あ？」

しつこく文句をいつてくる私兵たちを、これだけで黙らせた。

「自分たちが言ったことを棚に上げて、何偉そうに被害者面してんだ!!」

「あーあ。自分で墓穴を掘っちゃった。ご愁傷様です」

ユウトが本当に実力行使に出ようとした瞬間、

パンツと辺りに軽い音が響いた。

「銃声・・・？」

音の正体に気づいたユウトは、咄嗟に前方の天幕をみた。

「て、天皇陛下!!」

ユウトが見たのは、肩に銃弾を受けて血まみれになった天皇の姿だった。

「どこかに狙撃手がいる。気をつけろ！」

ユウトは基地の高い場所を見回す。敵軍の奇襲防止に見張りがしつかり配置されていたはずだ。

そんな時、視界の隅に駆け出すアスカの後姿を捉えた。

「ア、アスカ！無闇に動くな！」

訓練場の真ん中を突っ切るアスカの姿はどこからも良く見え、再び軽い銃声と共に銃弾が彼女

の足を貫いた。

「アスカ!! ジーク、銃弾の軌道は読めたな? 捕獲してきてくれ!」

ジークに指示をしながら、ユウトはアスカに駆け寄る。

「痛い、痛い」

アスカは泣きじやくりながらユウトにしがみつく。

「すぐ手当てするから、ちよつと我慢してくれよ。」

ユウトは彼女を抱き上げ、救護のテントに歩き出す。

「叔父上が・・・助けないと・・・」

アスカはぼんやりとした目で天皇を見ていた。

「肩に当たったようだから、ちゃんとした手当てを受ければ死にはしない。

お前はまず自分のことも考えろ。」

「そうか・・・生まれて初めてのお姫様抱っこ・・・」

「・・・こりや大丈夫そうだな」

ユウトはため息をつきながら足を進めた。

テントに着くと、医師にアスカを預ける。

「よろしくお願いします」

そして、場の混乱を静めるために隊のほうに戻ろうとすると、

「ユウト、行かないでくれ」

アスカが、軍服の裾を引っ張った。

「やっぱり、怖い」

「・・・わかった」

隊のほうはアキが上手くまとめてくれたように見える。ユウトはアスカが横たわるベッドに腰を下ろした。

大混乱に陥った基地に、隣国の使者がやってきたのは、日が暮れてからだった。

「今、なんと言った」

会議室に集められた重鎮たちが、信じられない様子で使者を見た。

「ですから、天皇を銃撃したのは内の狙撃部隊です」

二度の衝撃的な言葉に、正気に戻った何人かが武器に手を伸ばす。

「おっと、私をここで殺すと、ここから一キロ地点に陣営を張っている我が軍総勢五万が侵攻を開始しますよ」

「うるさい！ 蛮人。侵攻があるうと無かろうと、貴様らは皆殺しだ！」

あきらかに展示用の豪華な剣を引き抜き、大臣が切りかかろうとした。

「おやめください」

ユウトは、その手首を掴んで大臣を使者から引き離す。

「貴様！末席に何とか座れるような貧民が、私に触れるな！」

「考えてください。陛下がお怪我をされている今、軍の総司令官は誰が担うのですか？」

「それは私に決まっているだろう！それがどうした！」

ユウトの手を振りほどこうとする分からず屋に、彼は目を細めた。

「では、お聞きします。この人を殺した瞬間から、相手陣営から地上部隊なら十分、飛行部隊なら三分でこの基地にたどり着きます。その短時間の間に、未だ混乱の収まらない基地の部隊をまとめ、ここにいる兵力の三倍はいる相手と戦えるような策をあなたは考え実行することが出来ますか？」

ユウトの鋭い視線と言葉に、大臣はつまらなそうに手を振り払い、席に戻った。その目には、納得の色は見えない。ユウトの強い調子に気圧されて、仕方なく諦めただけのようだ。

「そちら側の意向を教えてください」

ユウトが話を振ると、面白そうに話を聞いていた使者は真顔になった。

「我々は、あなた方に無条件降伏を求めます。了承していただけるのなら、これ以上の侵攻は

行いません。もし、断るのならば、陣營にいる五万の軍勢に加え、本国のほうにも援軍を要請します。おそらく、十数万の兵で、この国を攻め落とすことになるでしょう」

「無条件降伏した場合のこの国の処遇は？」

「わが国の属国として、税と兵役を課します。詳細は、我々が今まで落とした国のことを例にしていただければと」

使者の言葉に、重鎮たちの顔が怒りに染まった。

「私たちを、周辺国のような植民地にするつもりか！」

「やはり皆殺しだ！このような不敬な蛮人はすべて駆除してしまおう！」

天皇がいない会議室には、意味の無い暴言だけが飛び交う。

「お静かに」

パンパンと手を叩いて、一人の文官らしき男が立ち上がった。

「よろしいではありませんか。私は降伏に賛成です」

「な、なにを……」

誰かが反論しようとしたが、男はさらに言葉を続けた。

「わが国が彼らと戦っても、勝ち目はありません。一人残らず死に絶えるのと、他国に従属して生きながらえるのと、どちらがいいか皆さんも分かっているでしょう？」

「だが、その後どのような苦痛を強いられるか、あなたも分かっているでしょう？それを受け入れると言うのですか」

他の政治家の言葉に、男は気味悪く笑った。

「私は問題ありません。この国が併合された後の優遇もしっかり約束していただいておりますか
らね」

男の視線に、使者も頷いた。

「はい。貴殿にはこの国の征服のため、数々の助力をしていただきました。それなりの地位を保証いたします」

「この売国奴め！」

突然の裏切りに怒りだす政治家たち。

「生きるためなら何でもする。あなたがたも、もつと頭を働かせたほうが良かったのですよ」
男の高らかな笑いが響いた。

「あなたも大変ですね」

隣を歩く使者が、苦笑しながら言った。

あの後、方針を話し合うと言われこの基地の隊員は指令官以外追い出された。

「あのような愚かな者が国の政治を動かしているとすると、下で働く者は苦勞するでしょう。とくに、あなたのような賢い人だと」

「賢かったら、もうとつくにこの国を出ている。弱りきった国よりも、もつと平和に暮らせる国をさがしているさ」

ため息をつきながらユウトは言った。

「そうですか。なんとか上を丸め込んで、降伏してくださいね」

防壁の外にたどり着いて、使者はつないでいた馬にまたがった。

「それは、無理かもしれないな」

ユウトは疲れを滲ませた笑顔を浮かべながら、宿舎に戻っていった。

どこか遠くから、車の音がする。

ぼんやりとした意識の中、その音を聞いたユウトはゆっくりと起き上がった。

久しぶりに一晩ぐっすり寝たためか、意識がはつきりするのも早い。

窓を開けて外を見回すと、基地の正門から、黒塗りの車が次々と出て行く光景が目に見え込んだ。

できた。

「!・・・あいつら!」

ユウトは隊服に着替え、部屋を飛び出した。

司令室の隣にある会議室で、事態を聞きつけた部隊長たちが集まっていた。

「あいつら、全員そろって敵に寝返るなんて・・・」

なんでも、あの文官が政治家たちを丸め込んで、彼らの地位を保証する代わりにこの国を好きにして良いという交換条件を出したそうだ。

指導者がいなくなった国を、敵がどう扱うかなんて容易に想像できる。

「正直、勝てるとは思えません。指揮官がいらないこの基地で、全滅覚悟で押さえ込むならまだしも、国の上層部がごっそりいなくなってしまうのですから、その後どうなるか分かりません」

会議室に、沈黙が流れた。

「いや、降伏はしない」

静寂を破った声に、全員の視線が扉のほうに注がれた。

「陛下・・・」

包帯で腕を吊った状態の陛下が、つらそうな表情で入ってきた。

「では、一体どうすればよいのですか？ 敵は五万。まともな作戦も何もないのですから……」
絶望に染まった隊員たちをみて、陛下は微笑んだ。

「実はね、あれは嘘なんだ」

黒塗りの車の列が、舗装されていない道を進んでいく。

「皆さんの賢明なご判断に感謝いたします」

使者はその先頭を行く車の中で微笑んだ。

「いえいえ、こちららも命を助けていただいたことには感謝しております。しかも、その後の保障まで約束してもらえると……」

空気は和やかに見えたが、対話する二人の腹の中では様々な事柄が渦巻いているのだろう。

「……あと二時間ほどで待ち合わせの場所です。そこで我が主が部隊を連れて待つておりますので、合流して皆様を警護しながら国へ向かいましょう。」

「手厚い歓迎ですな。自ら出向いてくださるとは……」

「まったく、陛下も結構な性格してるよな」

ユウトはジークに跨り、目的地へと急いでいた。

「私も同感だ。いくらなんでも演技で撃たれるなんて、私も心配して損した」

アスカの声が聞こえてくるが、彼女はこの場にはいない。

「いや、それよりそれに巻き込まれて怪我したことに対しては怒らないのか？」

「もちろん怒っているぞ。無線機でしか状況が分からないなんてつまらない」

陛下の話を要約すると、半年前の大異動の頃から、この計画は進行していたそうだ。

今まで敵だと思っていた国は、昔の日本のように軍部に政治を牛耳られ、各国に侵攻の手を伸ばしていたらしい。

そこでこちらの天皇に反抗的な派閥の政治家たちと、あっちの軍のトップをまとめて引きずり降ろしてしまおうと二カ国間で計画を練っていたそうだ。

その総仕上げとして、油断している標的を捕縛するのがユウトたちの仕事となった。

「あれかな？」

アキの声に、ユウトは大地に目を凝らした。

道の脇の開けた場所に、大きな影が整列しているのが見える。

「あれって・・・竜、だよな？」

「ああ。間違いない」

十数頭ほどの竜は、こちらに気付いて低くうなりをあげている。

「じゃ、攻撃開始！ノルマは一人一頭ね！」

アキの声で、部隊は散らばった。

ユウトは敵の中で一番早く反応した兵士に向かった。飛び上がった竜に、ジークが勢いよく突進する。

「ちい！かすっただけか」

直撃を避けられたジークは、勢いを殺しながら方向転換する。すると、背後に敵の竜が迫って来て、鋭い牙を剥き出していた。

「ブレスだ！」

姿勢の定まらないまま放ったブレスは、なんとか竜の頭に直撃し、敵が炎に包まれている間にジークは距離をとった。

「騎乗者まで怪我させるなよ」

「難しい注文だな」

ジークは火を振り払った竜に突進し、すれ違いざまに腹を切り裂いた。

「人が言ったそばから……」

「こんな低ければ死なないだろ」

落ちていく竜を見おろしながら、ジークはのんきに言った。

「着きました。降りてください」

待ち合わせ場所に着いた車の列は、道の真ん中で止まった。

ぞろぞろと降りてくる政治家たちは、周囲の異様な光景に目を見開いた。あちこちに怪我をした竜が倒れ、屈強な兵士たちが縛り上げられている。

「ど、どういふことだこれは……」

「叛逆者の末路ですよ」

使者はにっこりと笑った。

「さあ、大人しくお縄についてください」

本心に縄を持ちながらノリノリで言うアキに、ユウトは苦笑した。

「隊長、縄も良いですけど、絶対足りないので手錠も使ってください」

「はい」

場の空気を吹き飛ばすような能天気な会話に、後ろのほうにいた司令官が出てきた。

「貴様ら、上司の前でふざけるな！」

「上司？売国奴に上司面されたくないですよ」

アキが今までの鬱憤を晴らすように笑う。

「うぐぐ……おい！」

司令官は連れてきていた私兵を呼び寄せる。

「実力の差というものを叩き込んでやる」

「それはこっちの台詞です」

ペガサスに乗り込んだ私兵たちが、アキたちに迫ると、ジークがその間に割り込んで上から見

下ろす。

「ひ！」

それだけでペガサスは本能で勝ち目がないうことを悟り、泡を吹いて倒れてしまった。

「まだ、やりますか？」

売国奴たちは、そろって顔を真っ青にしたのだった。

危機が去った基地では、ささやかな祝勝会が開かれていた。明日にでも、国中に戦争の終結が伝えられるだろう。

「君たちには本当に感謝している。私としては表彰したいぐらいなのだが、今回捕縛した彼らの肩書きを考えると、あまり表沙汰には出来ないんだ」

会議室に呼び出されたユウトとアキとアスカに、陛下は申し訳なさそうに言った。

「良いですよ。権力とか名声とか、興味ないです」

あまり嬉しくなさそうに言う、ユウトにみんなが苦笑する。

「私も同感です。今が一番です」

「そう言われても、私の良心が痛む。あとでこっさりこの基地への軍資金を増やすことにしてお
くよ」

陛下はそういつてから、アスカに視線を向ける。

「私は迎えが来次第首都に帰る。アスカはどうする？」

「・・・私は、ここに残る」

アスカは笑った。

「そうか。二人とも、姪をよろしく頼む。今度、首都に遊びに来てくれ、盛大に歓迎するよ」
ユウトとアキが頷くと、アスカがユウトの腕を引っ張った。

「さあ、ユウト。私はお腹が減った。広場まで降りたいから付いてきてくれ」

「はいはい」

そして、アスカはゆつくりと手をずらし、ユウトの手を軽く握った。

「行くぞ！」

その手の感覚が、ユウトの心に温かく広がった。

この幸せなときが、永遠に続くように、自分はこれからも大切なもののために戦い続けるのだ
ろう。

それが恥ずかしくて、照れくさくて、ユウトは思わず微笑んでしまうのであった。

僕と彼女の犬物語

佐藤
来夢

■プロローグ■

ラーメン。ラーメンにしよう！

少年の声が響く夕暮れの公園。

オレンジ色に染められたイチヨウの木の下にランドセルを背負った二人の子供と小さな犬が居た。

「ラーメン？」

首をかき上げて少女が聞き返す。

「そう、ラーメン！」

袖をまくって少年は地面にでかでかとカタカナで『ラーメン』とかく。

しかし納得したくないのだろうか、少女は不満そうな顔をして反論する。

「やだあ。かわいそーだよお」

そう言って隣に丸っこい字でもう一つ別の名前をかく。

それに反応するように今まで静かにしていた犬が動き始めた。

ワンワン！まるで気に入ったかのように小犬は少女の周りを走る。

「ほらー！」

勝ち誇った顔をして少年を見つめる。

「ね、ワンちゃんもこれがいいっていつているよお！」

につきりと無邪気に笑う笑顔が最後のとどめだっただろう、「うう……」と苦痛の表情を浮かべた。

「わかったよお、いいよそれで」

少しふてくされた言い方でプイツと顔を少女から背ける。

しかし子犬を見て、「でも」と付け足す。

「ちゃんとおーつきくなるまで、おせわしようなあ」

少年のぶつきらぼうな声にまたにつきりと笑顔をむける。

「うん！」

躊躇なく答えて「はいっ」小指を前に突き出す。

その意味が分かったのだろうか、少年は躊躇いながらも小指を少女に向ける。

「ゆーびきーりげんまん、うーそついーたら、はーりせんぼんのーます。ゆーびきった！」
最後に「やくそくだよお」と言っつて小指を離した。

「ありがとう、ケイクん」

少女に名前を呼ばれたからだろうか、頬を赤くし「お、おう」と目をあわせないよう下に

顔を向ける。

「おしっ！」

そして照れ隠しにわざと声を大きくして少年は子犬に高い高いする。

「しっかりきけよおー。きょうからおまえのなまえは――

ジリリリリリリリリリッ

突然の目覚まし時計の音に関根溪斗は目を覚ました。

「……ゆめ？」

しかし、とても懐かしく感じたのはなぜだろうか？

『やくそくだよお』

チクリ。頭に響く女の子の音が胸を刺す。ああ、これは昔の思い出か何かだろうか。ぼんやりと考えながら溪斗はカーテンを開ける。

パツと目に入る景色は朝日の光を浴びた黄色いちよりの光景だった。

『ケイクン』と自分を呼ぶ声は誰だったのだろうか？
あの子犬の名前は結局なんだったのだろうか？

でも、思い出したとは一回も思わなかった。

第一話

キーンコーンカーンコーン——
鐘の音が響き授業が終わる。

「気をつけ、礼」

「「ありがとうございます」」

ザワザワと教室が騒がしくなり学生達がそれぞれの掃除場所へ移動する。

関根^{せきね}溪斗^{けいと}も学習室の方へ移動しようと自分の席の椅子を机の上に置く。

「おい、関根。今日部活でるかー？」

なにげなく聞くクラスメイトの男子に溪斗は「考え中」と適当にながして教室から出る。

トソツ。廊下を歩いていた女子生徒の肩にぶつかった。

「あっ」

ごめん。口を開きかけたが、「ごめんなさい」と言われ去ってしまった。敬語だったから、後輩だろうか・・・？

ちよつとしか見ていなかったが、少しウェーブのかかった茶色のショートヘアの女子生徒は素直に可愛いと言えるほどの容姿をしていた。

なんとなくその生徒が走っていった方をボーと眺めていたら、容赦なく頭を叩かれた。

「痛てっ！」

別に痛くはなかったが、頭をおさえ後ろを振り向く。目の前にいたのは同じ陸上部で一緒につるんでいる奥澤勇太おくざわゆうただった。

「おまえ。渡辺の次は宮田を狙っているのかよ？」

「バツ、バカ！おまえもつと声小さくしろよ！」

思わず声を荒げて言うが、良かった誰も聞いてない。ひとまず安心してから溪斗はジロリと勇太を睨む。

「と言うか、宮田ってさっきの奴？見覚えはないんだけど・・・」

「げ！関根ってまだ東小の子達覚えてないのかよ？もう一年たっているじゃん」

ああ、なるほど。どうりで分からないわけだ。自分で納得しながらハアとため息をつく。

溪斗の通う中学校は西小と東小の合同で出来る学校である。

だから、記憶に自信がない溪斗にとっては覚えるのには無理があった。

「確かに俺達が通っていた西小は渡辺とかが人気あったけど、東小もけっこうレベル高いのが多いんだぞ」

あまり聞こえないように勇太は声をひそめているが、『渡辺』と名前がでるだけで溪斗はつい焦ってしまう。

渡辺わたなべひよりは西小のときから人気のある女子で溪斗の片思いの相手である。

勇太しかその事を教えていないが、口の軽い奴だからもうすでに他の人達にも知られているだろう・・・。

「東小の中で最近噂になっているのが、おまえとぶつかっていた宮田みやた零れいなんだよ」

溪斗がもう話を聞いていないことに気づいていないのか、勇太はそのまま口を動かす。

「人見知りか激しいっていうのが難点だけど、慣れてくるとすっごくいい顔で笑うらしい

つて聞いたぞ。・・・げっ、先生が来た」

教師の姿が目に入り二人はいそいそと教室から離れる。溪斗は学習室、勇太はトイレと掃除場所へ移動する。しかし、勇太はふと溪斗の方へ振り返り少し声を上げる。

「でも、男子とはあまりしゃべらないらしいぞ」

注意事項として言ってくれているのだろうか？

別に自分には関係のない事だから覚えなくてもいいだろうと思ひ頭の隅に置いておく。

しかし勇太が情報通だとは知っていたが、あそこまで知っているとして少し引いてしまう。

オレも裏で何言われているか分かんないな、なんて考えながら溪斗は廊下を走った。

「ごめん！零。今日家の用事があつて一緒に塾行けないんだった！」

下校時刻。校門の前でいきなり友人に言われて零はたじろいだ。

「大丈夫だよ、ひよりちゃん。わたしも今日塾休むつもりだったから・・・」

気をつかわせないように思わず嘘をついたが部活に出ない時点で説得力がない。それに気づいているか否や、ひよりはにやにやしながら零をからかう。

「そっか。零は男子が苦手だから一人じゃ塾行けないもんね」

「ち、ちがうよ!?! そんなわけじゃないからね! 今日だって一人で行けるよ!?!」

そう叫んだ後で「あれっ?」と自分で言った言葉に疑問をもつ。ある意味で、ひよりが言っている事は全て凶星だからつい本音をもらしてしまふ。

「ごめん。ごめん。あたしも別の日に一人で行くのやだから、今日は二人でさぼっちゃお」なにげない提案に零は素直にうなづく。結局、気を使わせてしまったと心の中で思いながら、ひよりのフオローには感謝する。

「また明日ね」自分とは反対側に向かって走るひよりに手を振って、零は腕時計を見る。

四時だからまだ暗くならないか……。せつかく時間が空いたからどこか寄り道しようかなあ。家の近くのパン屋にむかってふらりと足を動かす。五分ほどたつて黄色、赤と色づいている木々の道を歩いていたら、クウーンと動物の鳴く声が出て周りを見渡す。

居た。奥に一本だけ生えているいちようの木の下に……

零の目に映っていたのは茶色い毛の犬だった。

弁当を忘れたのが原因なのだろう……。

自分の失態に今更後悔しながら溪斗は今日の出来事を思い出す。午後の授業は気のいい

クラスメイトの男子たちからの支援でなんとかあったが、夕方になってくるとエネルギーも尽きてきた。

ぐるううう。あ、また鳴った。すれ違う人達が気づかないふりをしているが、いつそ笑ってくれた方がまだマシだと思う。ここから家まで少し距離があるから、たぶん無理。空腹で倒れてしまう。近くに店があっただろうか？・・・いや、ある。遠回りになるが、昔よく行っていたパン屋があるはずだ。そう思うとなぜだか不思議に足に力が入った。

「バ、パン・・・！」

ふらふら足で色彩豊かな紅葉の道を歩いていたら「ワンワン」と向こうにあるいちようの木から犬の声が聞こえた。なんだ？半ば好奇心で見に行くと今日見かけたばかりの宮田零が怯えた目で一メートルくらいの犬を見つめていた。

ヤバ。見てはいけないところでくわした気がして罪悪感に苛まれる。すぐに逃げようと後ろに振り返って木の影に隠れようとする。

グシャ。落ち葉を踏む音が自分の下から聞こえた。はつきりと自分の耳に届くほど大きさだったが、大丈夫離れているから聞こえるはずがない。そう願いながらも一度零の方に顔を向ける。よかった、気づいていない。相変わらず零は犬を見ている。ひとまず安心してそのまま退散しようとする。

「ワンッ!!」

溪斗は犬の聴覚をなめていた事に今更ながら後悔する。「待て」とでも言うかのように吠えるその迫力は先ほどのワンワンとは比じゃないくらい威圧感があった。

「誰・・・？」

ああ、せっかく隠れたのにバレたじゃないか・・・。

零の声は犬に対する恐怖で震えている。すぐみ上がってしまい一步も歩けない状態だった。

『東小の中で最近噂になってるのが、おまえとぶつかってしまっ宮田零なんだよ』

勇太の言葉が頭に響く。もし、宮田と関わっていることが誰かに見られれば面倒くさくなる。変に噂が広まれば？勇太が聞いたら？嫉妬深い男子だっている。噂好きな女子だっている。渡辺が知ったらどうなる？勘違いされたくない。

マイナスの感情が入り混じり溪斗はこの場から立ち去ろうとする。

「助けて・・・」

零の今にも消えそうな声ははっきりと溪斗の耳に届いた。

それがもう我慢の限界だった。何が噂が広まればだ、何が勘違いされたくないだ。考えすぎだ。ここで宮田を見捨てたら？そっちの方が最低じゃねえか・・・！
頭で考えるよりも先に足が動いた。

突然駆け出してきた少年は零にとつて何にも動じない救世主のように見えた。

「何、ポーっとしてんだ！早くつかまれ！」

その怒声に怯む余裕も与えず学ランを着た男子生徒は零の手を握り走る。

けれど鬼ごっここと思つたのだろうか、犬も尻尾を振りながら二人の後を追ってくる。

「えええーッ！この犬、鎖に繋がってなかったのかよ！」

聞いてねエぞ！と叫ぶこの少年には見覚えがあった。

今日、学校で掃除のときぶつかつて「あアアン？」と睨んできた怖い印象の人だ。

確か名前は……

「関根君……？」

西小の子だったからあまり詳しく知らないが、体育の授業でいつもトップの方にいたから記憶にはある。陸上部に入っているから当たり前のことだが……

「おおっ、スゲエ。よく俺の名前覚えてるな。同じクラスじゃないのに」

一年のとき同じクラスだったけど……と心のなかでは思ったが口には出さなかった。

しかし、話すのがやっとな零とくらべると、息を乱さず走り続ける溪斗はさすがと思う。

ハア、ハア……。く、くるしい。自分の足が言う事を聞かなくなってきた。けれど、ここで止まれば……。ちよつとだけ後ろを振り返ってみると「ワンワン！」と楽しげに吠える犬が目の前にいるではないか！

「キャアアツツ!？」

大がつくほど犬が苦手な零にとつてこの状況は絶望的といつてもいいかもしれない。このことに気づいているのだろうか、溪斗はぶつきらぼうに呟く。

「あとちよつとでつくから」

大丈夫、がんばろうなどの気を使った言葉ではない。もしかしたら溪斗にとつて精一杯の励みだったかもしれない。けど、真剣に言うその顔を見て零は少し走るペースを上げる。

「あつた……。！」

溪斗が叫ぶ先を見ると今日よる予定だったパン屋がこじんまりと建っていた。

パツ。今まで感じていた手のぬくもりが消えて溪斗は犬に向かう。

「俺、足止めしてるから、先行ってて」

何気ない言葉に昔の記憶が蘇る。心の奥にしまっていた犬の思い出が断片的にしかしハッキリとフラッシュバックする――

『零！先に行きなさい！！』

ヒステリックに叫ぶ母を前に零はポロポロと大粒の涙を流しながら、母を背にして走る。行く場所はもう頭の中で決まっている。山里ベーカーのおばさんのところだ。じんじんと手の痛みは増していく。零の手は血で真っ赤に染められている。

ただ、少し心細くなり顔を後ろに向ける。零の瞳に映ったのは犬に棒を振りかざす母の姿がいて――。

違う。今回はあの時と違う！

唇を軽く噛んで、現実を見つめる。実際に関根溪斗は足止めといっても犬とじやれていないだけだ。

ギイイイ。パン屋、「山里ベーカー」と書かれているドアを開けて中に入る。

「あら、どうしたのお？レイちゃん」

心配そうにでも、やさしく陽気な声で話しかけてくるこのおばさんは昔から変わらない。

「犬が――」。リードありますか？」

山里のおばさんは昔あったあの出来事を知っているから話すのには抵抗がある。もう一度言い直してから返答を待つ。

「ああ！ある、あるわよ」

「リードねり、リード」と言いながら店の奥の方へ行く。

ギイイイ。ドアの開く音がしたと思ったら学ランの袖を捲った溪斗が汗をかいて入ってきた。

「犬、外にいるから。気をつけたほうがいいよ」

ハア、ハア。走っていたときよりも息を吐いているようすを見ると、何をやっていただけろうと気になってしまう。しかし、そこをグツとこらえて必要な事を伝える。

「おばちゃん・・・。こここの店の人が今、リード持つてくるって」

「おばちゃん？」

誰？と聞いてくる溪斗に零はおどおどと説明をする。今更ながら男子でもある溪斗に拒否反応を起こしてしまう。

「おばちゃんは今来るおばさんで、山里ベーカリーの奥さんでもあって・・・」

「ああ、山里さんか・・・！」

そんな零の心境に気づいていないのだろうか、納得した顔で溪斗はトレイに並べてあるパンを見つめる。

「・・・」

「・・・」

話す話題がなくなつて、しばしの沈黙に零は焦る。

どうしよう・・・頭の中では思うが、口は動いてくれない。男性に対する苦手意識があるから、溪斗との間に壁をつくつてしまふ。

ねえ、何でわたしはこんなに震えているの？

問いかけても返事はこない。いや、もう答えは知っている。ただ認めたくないだけ。

仏頂面した溪斗がいかにも不満げな顔をしている。当たり前だ、せっかく助けてくれたのにわたしはありがとうの一つも言っていない。

失礼だなあ・・・わたし。自分をしかつて、零は「ありがとう」とお礼を溪斗に言おうとして口を開きかける。

ぐるううううう。ああ、なんでこのタイミングで鳴るんだよ・・・！

宮田零の前では鳴らないように努力したが、よりにもよつて静かになつたとき出るなんて恥ずかしすぎる。だいたい腹へついているときに、こんないい匂いをしたパンがあるのに我慢は無理だ。

零は不意を突かれたようにキョトンとしている。それに幸か不幸か、お腹がなった直後に店の奥にいたはずのパン屋のおばさんが現れてきた。

「あら、久しぶりねケイちゃん。お腹でもすいたの？」

ここ何年も来てなかったのに一目で溪斗と分かってしまうこのおばさんには感心する。

「いいえ、大丈夫です」と言おうとするがぐるううくと先にお腹が返事をしてしまう。

「まあ、そんな大きな音だして・・・、パンでも食べる？」

そのつもりで来たんだけど。実際はそう思ったのだが、さすがにいえないので「はい」と言ってから近くにあるメロンパンを取ってカウンターに置く。

「お金は払わなくていいわよ。そのかわりしつかり食べてね」

「あ、ありがとうございます・・・」

は、恥ずかしい。もう中学生になったというのにまだまだガキンチョ扱いされている気がして顔が引きつってしまう。それに隣にいる宮田も遠慮はしているが、クスクス小さく笑う声が聞こえて頬が熱くなってくるのを感じる。

「それと零ちゃん。リード持って来たんだけど、もしかしてあの犬に・・・」

さつきまで笑っていた笑顔が一変し暗い表情になるおばさんを見て、ああ、宮田の犬が苦

手になった原因を知っているんだなと感づく。

全員の視線がドアの外に居る犬に集まる。まず、この犬をどうするか考えなくては。

「おい、宮田」

気軽に声をかけたつもりだったが、ビクッと怖がるように肩を震わす様子をみて勇太の言葉を思い出す。

『人見知りが激しいってというのが難点だけど』

ヤバイ。無理やり手を握ってしまったから第一印象最悪かも。考えなしに行動したことに反省する。

『でも、男子とはあまりしゃべらないらしいぞ』

ちゃんと聞けばよかったと心の中で舌打ちをする。でも、まさか宮田零とこんな感じで関わりを持つとは思わなかった。

「ご、ごめん。えっと犬に繋ぐからリードかして」

なるべく注意して言っているつもりだが、ビクビクと渡してくる宮田を見ていると少し傷つく。

「少し待ってくれますか？」

そう言うってから零は溪斗と同じくメロンパンを取りながら財布を出そうとする。

「いいわよ、今日はタダで」

零もまたパンを奢ってもらい溪斗のところへ戻ってくる。

「えっと・・・じゃあ、犬を・・・」

繋ぎましょう。だろうか？最後のほうになると小さくなって聞こえない。まあ、いいや。あまり気にしないように意識して溪斗と零は「ありがとうございました」山里ベーカーリーを出た。

「結局、犬どうする？」

無言の中最初に話を切り出したのは溪斗だった。たぶん捨て犬だから捨てるか、飼い主を見つけるかのどちらかだろう。晴れ晴れとしていた太陽は夕日と変わり、オレンジ色の光が溪斗たちを照らす。

零は足を止め、溪斗とリードに繋がれた犬も答えを待つようにじっとみつめる。

「犬を・・・飼います・・・」

ぶわっ。突然吹き荒れる風は落ち葉を空へ舞い上がらせる。

一瞬溪斗は零の言った言葉が理解できなかった。犬が苦手なんだろう？なんで飼いたいなん

て思うんだよ・・・？

零も自分が言ったことはどれほど矛盾しているか分かっているのだろう。わざと目をそらして話を続ける。

「わたしが飼わなくちゃいけないんです・・・！」

涙目で涙声で必死で答える姿を見て溪斗は思う。ズルイよこんな顔をされたらこっちは何も言えないじゃないか。

「分かった」

腹をくくって呟く。

「けど、どうやっておまえは育てるんだ？」

宮田ではなくおまえ。溪斗は真顔で威圧をかける。

「犬が苦手でも飼うんだろ？」

感情は入れず事実を淡々と零に向ける。

「でも、でも・・・わたしが飼わなくちゃいけないんです・・・っ！」

駄々をこねる子供みたいに零はボロボロと涙をこぼす。

やりすぎたかな？少し後悔はするがこれぐらい言わなくてはいけない。

そして最後に溪斗は自分の感情を入れる。

「それなら、俺も飼う」

真っ直ぐに零の瞳を見て宣言する。

「だけど、約束だ。絶対最後まで育てよう」

零だけでなく自分にも約束する。昔誰かに同じように言ったメッセージを。

「ありがとう」

それに答えるように涙を拭いて零は溪斗に初めて笑顔をつくる。

どきっ。勇太の言うとおりだ。すごいいい顔で笑ってる。思わず見とれてしまったが渡辺

ひよりのことが浮かび、零から犬へと視線をうつす。

「あ。」一番大切なことを忘れていた。

「宮田。この犬の名前おまえが決めて」

最初にみつけたこの少女がつけるべきだ。自分には資格がない。

「いいの？」

聞き返してくる零に何を今更と思う。

「ああ」

「じゃあ、ラン。ランがいい・・・！」

迷わずに決めたランという名前はこの犬にピッタリな気がした。

ラン。懐かしいような、嬉しいような不思議な気持ちになる。

「おしっ！」

犬のほうにしゃがんで顔を近づける。

「しっぴかり聞けよおー。今日からお前の名前は

——
ランだ」

第二話

わたしの家にはおとーさんとおかーさんがいました。

おとーさんは真面目でいつもお仕事に一生懸命でした。

おかーさんは優しくいつも一緒にいてくれました。

だからみんな笑顔でわたしは幸せでした。

ある日幼稚園から帰るとおとーさんがいました。いつもこんな時間にはいません。不思議に思っておとーさんを見ると、元気のないお魚さんみたいな顔をしていたので「どうしたの？」と聞きました。そしたら、おとーさんはわたしの顔を見ないで「何でもない」といいました。何でもなくて何がだろう？分からなかったのもう一回聞いてみると答えは

返ってきませんでした。

夜、ベッドから起きると隣に寝ているおかーさんがいませんでした。廊下に出るとリビングが明るかったのを見に行くとおとーさんとおかーさんが内緒話をしていました。こつそりと聞いていたら、おとーさんが「くび」になったことが分かりました。お仕事をやめさせられたらしいです。その後は眠くなったのでベッドに戻りました。

次の日からずつとおとーさんは家にいました。でも頭をかかえて遊んではくれません。何日も何日も頭をかかえていました。一週間たつておとーさんが消えました。おかーさんに聞いても答えてくれません。

おとーさんが消えて一年がたちました。わたしはもう小学校一年生です。学校の帰り道、黄色い落ち葉を踏んでいると犬の声が聞こえました。探してみると茶色い小さな犬がダンボールの中にいました。どうしよう、迷っている。「なにやってんのー？」と言われました。後ろを振り返ると男の子がいました。犬を捨てるのは可愛そうだったので、その子と一緒に親に秘密で飼うことになりました。

そこからは幸せでした。何よりも子犬とその子と過ごす時間が楽しくて温かくて……。ピアノ教室では友達もできました。ひよりちゃんという可愛い女の子です。今飼っている子犬の話で仲良くなりました。

でも、この幸せは長く続きませんでした。

犬を飼って一ヶ月たちおかーさんに見せたくて、犬がいる公園に一緒に行きました。けど犬は様子がいつもより変です。近づいてみると「ウウウ」と怒っています。どうしたの？手を伸ばしたら、ガブリ。容赦なく、初めて腕を噛まれて、わたしとおかーさんは驚きました。じんじん痺れて必死で抜こうとしたら、歯が食い込んできて・・・いたい、いたい、痛い、痛い、痛い、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ、イタイ！

腕から赤い液体が流れて、鉄の臭いがして頭が真っ白になって分からなくなって、ただあの犬のせいで、またわたしは不幸になりました。

——本当に犬のせい？

冷徹な声が自分の頭に響く。

そうだよ、あいつのせい。その後からわたしの腕を見てヤな噂が広がり、友達がひよりちゃんしかいなくなっただもん。

何それ、犬じゃないじゃん。個人的な恨みをぶつけてるだけでしょ。

容赦のない正論がぐさぐさと胸に刺さる。

おまえのせいだ。

違う。

お前のせいだ。

違う！

責めるように自分は昔の自分を追い詰める。

だって、だっておかーさんはわたしのせいじゃないって言ってたもん！

あの犬のせいだって言ってたもん！それにあの後におとーさんが・・・！

愚かな言い訳は地獄の思い出を蘇らせる。

“今”の自分は泣きそうなほど顔を歪ませ、それを思い出す。

久々に帰ってきたお父さんはボロボロの服を着て、髭がボーボーでケタケタ笑っていた。

狂った人形みたいにお父さんはお母さんに向かって言い放つ。

「金をよこせ」

誰？このおじさん。優しい太陽の声を出していたときと違いロボットのような声はまるで別の人。

「借金したんだ。仕事探そうとしてお金借りて・・・！」

よたよたとお母さんに近づくお父さんの目は焦点が定まっていない。

「断るわ」

震える声でお母さんは拒絶する。でもお父さんの耳には入らない。

「金をよこせ」

「・・・」

恐怖でもうお母さんは口がうごかない。

「よこせ」

「・・・」

「よこせ」

「・・・」

「よこせつつつてんだろウがよオツツ!!」

我慢の限界とでもいうかのようにお父さんはお母さんを殴りつける。なすすべもなく倒れるお母さんをみてわたしは思わず目を背ける。倒れたお母さんをお父さんは蹴ったり、踏んだりと遠慮もなく足を動かし続ける。

そんな一方的な暴力を一时间あまりやってお父さんの足がピタリと止まった。お母さんが動いていない。一瞬死んでしまったかと思いきや、ゾツとした。けど、よく聞いているとかすかな息が耳にとどいてホツとする。

「かね・・・」

そう呟く声が響き本能的に壁と壁の隙間に隠れる。

「・・・そうだ、通帳があるじゃないか！」

こつこり様子を覗いていたらお父さんはタンスや引き出しを荒らし始める。しかし、これは長く探していなかった。手を止めお母さんに近寄る。

「通帳はどこだ？」

暗い家の中に発せられるその声は悪魔のようで怖い。

「どこだ？」

でも、返事はない。答える相手は気絶していて聞くことはできない。

「チッ」

もう一度お母さんを蹴ってお父さんは家から出て行った。

しばらくの間は動けなかった。我に戻ったときに最初にしたことはお母さんのそばによることだった。

「おかーさん！」

ボロボロになった体で起き上がるお母さんは「大丈夫・・・」と言ってわたしを抱き寄せた。そのぬくもりがただ温かくて大粒の涙をわたしはこぼした。

次の日になってわたしとお母さんはちらかった部屋をすこし片付けて、すぐ出かけた。

いつもは寄らないゲームセンターなどに行ったりしてわざと時間をつぶした。昼になっても夕方になっても「帰ろう」とは言わなかった。いくら七歳だったあのころのわたしでも理由は分かっていた。

さすがに夜七時ぐらになると暗くなり寒い冬の風が吹き渡る。そんな外の景色を眺めてお母さんは言う。

「かえろっか」

ひっそりとデパートの冷たい床を踏みしめる。置いていかれないため手を握ろうとするが、手の甲に残った昨日の傷が目映り引込める。お母さんの傷は顔には残っていなかったものの、体中には痣が多くできていた。

家に帰るともう八時になっていた。車からおりて玄関を開けようとするが鍵がかかっていた。違和感がありながら中に入る。しかしリビングにいくと疑惑は確信に変わる。

わたしとお母さんの目の前にある光景はダンスや引き出しがあさられた後の無残な部屋だった。

来た。思い知らされたのは一回では済まされないこと。

ガタツ。隣の部屋から聞こえる物音にわたしは歯をガクガク震わせる。

ガタツ。ガタツ。音が徐々に大きくなってくるたびに心臓がバクバクと動く。

ガチャ。乱暴にドアを開けたのはやはり変わり果てたお父さん。

「やつと来たか」

口にくわえているタバコの火は血の赤にみえる。

覚悟を決めたお母さんはわたしから離れお父さんに近づく。

「おかーさんっ！」

けれど、そんな決意を嘲笑うかのようにお父さんの足はわたしに向かって動く。そしてわたしの腕を強引に取って、犬にやられた傷跡にわざとタバコの火を押し付ける。

「ああああああああああっつつつつ！！」

声とまらない叫びが口から発せられる。もう目の前にいるこの男はお父さんと言う言葉にはふさわしくない最低な人間だと分かった。

「これ以上何かやられたくなかったら金を渡せ」

「分かったわ。だからお願い！やめて・・・っ！」

お母さんの必死な声をかすめる。いいよ、わたしのことは・・・あんな男の言うことなんて聞かないで。せめてものの抗いだろうか、わたしは腕を汚した男の手を力の限り噛み付く。

「いてえんだよオツ」

思いつきりお腹を殴られたけど、タバコの火と比べると平気に感じた。また、男はお腹に向かつて腕を振り上げようとする。が……

「警察だっ！大人しくしろっ」

あつという間にお父さん……男は捕まった。

どうやら、わたしの悲鳴を聞いていた近所の人達は警察に電話をしていたらしい。

病院に連れて行かれる前にお母さんは言った。「あの犬が不幸を持って来たのよ……」

ほらね。やっぱりあの犬のせいだ。

嬉しそうに話す幼い自分は目が必死になっていた。違う。

今のわたしはそれを否定する。しっかりと自分自身で考えられるようになった頭は間違っていると言っている。

だって、あの男は最後わたしに言ってた……

ブルブル唇を震わせながらわたしは口を動かす。

聞きたくない！昔の自分は耳をふさぐ。

でも、思い出さなくてはいけない。今の自分は判断する。
全部。全部悪いのは

「れいいゝ」

ひよりの声に零は目をうつすらと開く。

「ひよりちゃん・・・？」

周りを見るとクラスの人達が代わる代わるこつちを見ている。

「せんせえーも心配してたよ？授業中、汗びっしょりかいて寝てたし、起こしても起きないし・・・」

しまった、授業中に寝てしまった。最近はや更かしばっかしているからな・・・。

“ラン”を飼い始めて一週間。今、ランは関根君の家の庭にいる。そして、わたしは餌係で関根君は世話係となった。餌係といっても餌を持っていくだけだから世話係ほど大変ではない。だからと言って人にまかせつきりと言う訳ではない。ちゃんと健康にいい餌を探したり、犬の育て方の基本とかはしっかり勉強している。実際、関根君が分からないこと、知らないことをわたしがサポートすることになっている。この前だってチョコは食べちゃ

いけないのにランにあげようとして止めたことがあった。けど悩みの種だつてある。犬が苦手なことだ。何であの時犬を飼うといったのか自分でも驚いた訳なのだが、このまま見捨てるのも忍びないと思つたんだらう。だからだらうか、このごろは昔つけられた古傷が痛むような気がする。

わざと人に見せびらかすようにして零は犬と父に刻まれた右腕の傷を見る。何人かのクラスメイトにはその痛々しい跡が目に入ったのだらう、特に同じ小学校の人は重い空氣に耐えられなくなり零から離れてく。

「なあ、宮田く。どうしたんだ、その傷？」

何も知らない、零に好意を持っているであらうその少年は話題づくりのために質問をする。

「おい、やめろ」などと、どこからか事情を知っている人の声があるが、男子生徒は構わず問う。

「なあ、俺にも教えてくれよ」

女子だつたら答えていただらう。でもにっこりと笑顔で話しかけられてしまうと優しかったころの父と重なり拒否反応を起こしてしまう。怖い。

「こ、これは……」

「これは零がお父さんにつけられた傷よ」

口がどもって言えない零の代わりにひよりが冷徹な目をしながら答える。

「え……？」

やってしまったとばかりに少年の声は青ざめる。それに追い討ちをかけるようにひよりは言葉が続ける。

「まわりが止めようとしてくれたのに無視して人の傷えぐるのやめてくれない？」
特段嫌味をぶつける。そしてすぐにコロっと笑顔になり零に顔を向ける。

「音楽室に行こつ。次の授業に遅れちゃう」

今まで何もなかったかのようにひよりは零と一緒に教室を出た。
残されたのは呆然と立ち尽くす少年だけだった。

関根溪斗はお人よしだ。

学校が終わり部活の準備をしてる途中ぼんやりとそんなことを思う。

奥澤勇太が溪斗に対する評価は今のところこれだった。だから操り易いというのも事実である。

「関根く。おまえ、すげーな。宮田に話しかけてもらえるなんて！」

現在噂になっていることが本当かどうかさっぱりげなく本人に勇太は尋ねる。

「……っ！そんな訳ねーだろ」

すぐ顔にでるから分かりやすいな……。そうは思っても口には出さない。

「と言うか、もうすでに噂になってるぞ。男性恐怖症の宮田があの関根と話すなんて、と」

「ってか、待て。あの関根ってなんだ？あのはないだろう」

「あの？……ああ。渡辺 I o v e の関根って言ったほうがよかったか？」

「……！！？」

驚いた。まさかこいつまだ渡辺が好きってことバレてないと思ってたのか。いくらオレが他の奴らに言わなくても皆気づいてたのに。

ハア。少しため息をつきながら体育着に着替え終わる。

「で、どうやって宮田と話せるようになったんだ？」

また質問されるのは面倒だからさっそく本題に切り替える。

「捨て犬と一緒に飼うことになったからだよ」

「犬……？」

おかしい。確か宮田零は犬も苦手だったはずじゃあ……。

情報提供者のある少女の言葉を思い出す。

『零ってね。男子とか犬がすっこいダメなの』
あの少女が嘘を言うわけがない。ではどうして飼うんだ？

「犬なのか？本当に」

「うん。って、やっぱり宮田が犬苦手なこと知ってるんだ」

「ん。まあね」

適当に流して話を聞く。

「でも、私が飼わなくちゃいけないんです。って言って結局飼うことに・・・たぶんこのまま見捨てるのがヤだったんじゃない？」

「なるほど」

溪斗の予想とは関係なくそのいきさつに納得する。たぶん零が飼おうと決心した理由は罪悪感。昔の自分がしてしまったことに対する罪の意識があるからだろうと、勇太は予想する。

「で、なんでそこで関根も飼うんだよ？」

「いや・・・可哀相だったから？」

このお人よしが！飼わないように説得するとかしないのかよ!?

自分の立場だったら絶対にやらないだろうと確信しつつ、勇太は今回の溪斗の行動には

つとする。どつちにしろ溪斗は零と接点ができたそれだけでいい。もしかしたら、何もしなくても勇太が思い描く理想の展開になるかもしれない。

「そういうえば、何で宮田は男性恐怖症なんて言われているんだ？」

やっぱり質問するか。くることは分かっていたが、答えるのには少し抵抗がある。

宮田零の過去を最初聞いたとき勇太だつて引いてしまったから、この友人に話すのには酷な気がする。話せば溪斗、零は必ず傷つくだろう。でも、そうしなければいけない。

「そのことなんだけど・・・」

勇太は自分の感情は入れないで、ただ淡々と零が飼っていた犬、零の父親の有様を目を合わせず溪斗に告げる。

一つ、一つ話すたびに溪斗の顔が青ざめてくる。

「・・・言うことがあったんだ」

終わったとたん勇太は繋がれた鎖から解放された感覚があった。

やつと、溪斗の目を見つめることができ、そこで気づく。

「そっかぁ・・・」

笑っていた。静かに顔をほころばせていた。

「だから避けられてたんだぁ」

何も知らなくて不安だった原因がやっと分かって心底安心しているかのように見えた。けれど、出てきた感情はそれだけではない。

「今、宮田どこにいるかわかるか？」

声押し殺している溪斗の表情は怒りに変わっていた。

誰に怒っているのかは分からない。宮田かその父、または犬のどれかだろうな。でも宮田のために感情をあらわにしていることは確かだった。

「たぶん、校門のあたりかな？この日は塾に行くって聞いている」
「分かった」

そう言って溪斗は脱ぎかけていた制服をすぐに着なおし、学ランとエナメルバックを提げて教室を出て行った。

「今日は休みかな・・・？」

一人残された勇太はニヒルに笑い、バックから校則違反である携帯を取り出す。

ピッ、ピッ、ピッ。愛しい人を見るような顔をしながら勇太は指をボタンの上へ滑らす。

「俺、奥澤・・・ああー、ごめん。いきなり電話して・・・でも、宮田の情報提供サンキューな。今、関根に教えた。飛び出して行ってたよ・・・うん。じゃあな——」

声を控えめにしながら勇太は情報を伝えてくれた少女の名前を呼ぶ。密かに抱いている恋

心を胸に秘めながら片思いの相手の名を……。

「——渡辺」

くそ、くそ、くそ！

心に湧き出た感情がうまく頭にまとまらず足を動かすことしか出来なかった。ただ、今、分かることは宮田のところに行くことと、納得がいかないことだった。

ガッ、ガッ。階段を二段飛ばししながら下駄箱に行き靴のかかとを踏みながら校門へ向かう。多少体勢を崩しながらもスピードはいつもより速く感じた。

校門について周りを見渡す。いない。記憶がおぼろげながらも溪斗は塾があるであろう道走りながら下唇を噛む。どこだ、どこだ、どこだ、どこだ、どこだ！口には出さず心で叫ぶ。ドクドクと音を立てる心臓は限界に達しているはずなのに気にしている余裕はなかった。

「宮田あ！」

曲がり角にくせつけのあるふんわりとした茶色の髪をした少女を見つけて思わず呼ぶ。間

違うない宮田だ。根拠はないが宮田零だとすぐに分かった。

「関根君・・・？」

どうしてここに？と疑問を持つのと同時に怯えきっている顔を見て腹が立った。オレはおまえの父親じゃない！そう心にこめながらガツと零の傷つけられた右腕をつかむ。

「なんで教えてくれなかった!？」

知らないうちに声が大きくなっているのが自分でも分かった。もう、冷静になって話しかけることができなくなっている。

でも、それだけでは零には伝わらない。体をブルブルと震わせながらも分からないと訴えていた。

「腕の傷のことどうして教えてくれなかった!？」

一度言ったら止まらない。次々と相手のことも考えず溪斗はマシンガンのように感情をぶつける。

「あと、オレはお前の父親じゃねえ！一緒にするな！」

まず、この話を聞いて一番初めに思ったことを突きつける。オレはそんな奴じゃないと証明する。

まだまだ言いたいことはある。最も気に食わないこと。

「それに犬は何も悪くねえだろ！責任転嫁もほどほどにしろ！いくら親が言ったって犬はカンケーねえだろ！」

いくら溪斗でも分かる。このままだとその犬があまりにも可哀相すぎる。

ハアハア。少し息を吸っただけでこんなにも肩が上がる。今頃になって走ったときの疲れがまわってきた。そして、また続けようとするが零の様子がおかしくなっているのに気づく。

「やだ。やだ、やだ、やだ、やだやだやだやだやだやだやだやだっ！！」

溪斗の手につながれた右腕を振り放し、大粒の涙をこぼしながら零は頭をぐしゃぐしゃにして抱え込む。

「宮田・・・？」

気のせいかと思ひ、溪斗はもう一度手を伸ばす。

ガブツ。突然感じる手の痛みは一瞬理解が出来なかった。しかし、ここで零を突き飛ばしてはいけないと直感し耐える。

「こないで！おかしさんをいじめないで！」

手が解放され、噛まれたところから少しばかり血がでていっているのを感じる。

声は震えているが強い敵意を零から感じた。そこで溪斗は今、零の前には自分でなく零の

父親がいるのだと分かる。

「宮田。オレだ。関根だ」

優しく声をかけても零にとっては父親の声にしか聞こえない。このままだと落ち着かせることは無理だ。

どうすればいい!? 思考をめぐらせながら溪斗は零を見つめる。

「誰か・・・助けて」

今にも消えそうな声は溪斗の耳に届く。

この前も聞いたな・・・。ランと出会ったときも零は震えていたのを思い出す。溪斗から焦りはなかった。

すごいな・・・宮田はこんなにも人を動かせるなんて・・・。

溪斗は躊躇なく零を抱きしめた。

久々に人のぬくもりを感じた。最後に誰かに抱いてもらったのはいつだったのだろうか？
薄れていく意識の中で零は思う。

「だいじょうぶ。だいじょうぶ」

耳元で聞こえる声に安心する。

お父さん？

今、自分の背中を叩いてくれる人はお父さんだろうか？

「だいじょうぶだ。宮田」

違う。別の人だ。

そうだ、お父さんはもうわたしの前にいないんだ・・・

ゆっくりと思いつく。最後の最後に父に言われた呪いの言葉。

「お父さんは全部、全部。おまえのせいだつて」

家族を捨て、金に溺れ、挙句の果てには薬に手を伸ばした男は零に呪いをかけた。

「会社やめさられたのも、みんなが不幸になったのも全部。わたしのせいだつて言ったの」

父親としても最悪で人間としてもダメダメになった男は最後の抗いとして、自分の娘を奈落へ突き落とした。

「わたしは生まれちゃいけなかったの？」

『犬のせい』から解放される今、零はずっと心の中で思っていたことを初めて誰かに口にする。自分は本当にいてもよかったの？と。

「オレはおまえが生まれて良かったと思う」

溪斗は零の存在を肯定する。

生きていてもいい。それを聞いただけで涙がポタポタと頬から流れ出てきた。

嬉しかった。何よりも自分という存在が認められたことが。

安心した。何よりも自分の近くに人がいることが。

「よかった・・・」

長い間つながれていた鎖は途切れ、宮田零は自由になる。

零は体を溪斗にあずけ意識を閉ざした。

目を開けると見慣れない天井が目に入った。

「ここは・・・」

「あゝら。れいちゃん起きたの？」

声が聞こえたほうに振り向くと山里ベーカリーのおばちゃんがにこにここちらを見ていた。

「驚いたわよお。ケイちゃんがいきなり来たと思ったら、れいちゃんがぐったりと背中に

のつていたからあ」

ああ、だからわたしはここに寝ていたんだ。ぼんやりと考え、あれ？と気づく。

「関根君は・・・？」

「ケイちゃんならどこかに行くって言って出て行っちゃったわよ」
むくり、敷布団から上半身を起き上がらせ窓を見る。

良かった、まだ明るい。窓の外にはゆっくりと落ちていく夕日が町を照らしていた。

プルルルツ。部屋にある電話が鳴り響く。おばちゃんはわたしの状態を気にしつつ、急いで受話器を取りに行く。

「はい。山里です。あゝ、零ちゃんのママ？大丈夫よ。・・・今起きたばかりよ」

母親の電話に零は顔をうつむく。おばちゃんから今日の出来事を聞いたのだろうか？

もしかしたら父親が原因だと知っていたらどうしよう・・・

「代わる？・・・分かったわ」

「はい」と受話器を渡され零はしぶしぶと耳にあてる。

「零。大丈夫？パニック起こして・・・お父さんの夢でも見ていたの？」

ドキッ。いきなりそこを言われると焦ってしまう。お母さんの声は自分のことを本当に心配している。でも、だからこそ答えるのが怖い。

「そんなに気にする必要はないのに……零は何も悪くないわ。悪いのは全部あの犬——」
「ちがうっ!!」

反射的に口から発する声は自分でも驚くほど大きかった。

あの日以来お母さんがわたしに言う口癖はいつもこれになっていた。わたしもそうだと思っていたから何も言わなかった。けど、今は——

「犬は何も悪くない！責任転嫁もほどほどにしようよ！いくらわたし達が言ったって、犬は関係ないよ！」

関根溪斗に言われた言葉を自分に母親に言い聞かせる。

「零？何言っているの？」

「わたしもお母さんも逃げてたんだよ！事実から！あの日から！」

零は父親に言われた言葉から、母親は娘が最愛の夫からされたことを……

何が原因か分からなくなつて、自分のせいだと思つて、でも傷つきたくなくて。たどりつたのが「犬のせい」。自分も家族も傷つけない最悪の責任転嫁。

「わたし気づいたから！悪いのは犬じゃない。わたし達家族のせい！正しい方向に行かなかったお父さんのせい！誰も悪いと言わないお母さんのせい！自分のことしか考えていなかったわたしをのせいなんだよ！」

本当のことを言つてわたしを助けてくれた関根君みたいにわたしもお母さんを助ける。零の手はもう震えない。もう過去には怯えない。昔の自分に別れを告げ、前に進む。

「お母さん。ありがとうございます。わたしを守ってくれて……でも、大丈夫。受け入れるから全部……」

最後に感謝をこめて零は「ありがとうございます」をつたえて、受話器を山里ベーカーカーのおばさんに渡す。

しかし、怒鳴つた後の居心地の悪さに思わずトイレに行く。

残つたのは山里ベーカーカーのおばさんと受話器。

「大きくなつたわね、きれいちゃん」

その喜びはまさに孫の成長を見守るおばあちゃんだった。

「……」

返事をしない相手にそのまま話を続ける。

「今度、うちに来て三人でお話をしましょうよ。色々つもる話もあるだろうし」

「ありがとうございます……」

電話越しに聞こえてくる声は涙でいっぱいだった。零と同様、母親も束縛されていた鎖から解放される。

「ほんと、よくがんばったわ。あなた・・・」
血は繋がってはいないが、零の家族にとつてこの女性は家族同然になっていた。

少し落ち着きを取り戻してから部屋に戻るとさすがに電話はつながってなかった。

「いやゝそれにしても、けいちゃんとレイちゃんがまた一緒に犬を飼うことになるとは思わなかったわ」

電話のことを口にしないのはホッと安心するが、零はそのセリフにあれ？と疑問にもつ。

「また一緒ってどういうこと？おばちゃん？」

どうして？わたしは中学生になって関根君のことを知ったのに・・・いい間違いか、それとも自分の勘違いかと思いつつ答を待つ。

「何言っているの、レイちゃん・・・もしかして二人とも覚えてないで飼っていたの？」

とりあえず、言っている意味が分からないので零はあいまいに「うん」とつぶやく。何が覚えていないんだらう？

「レイちゃんが小学校一年生のとき男の子と一緒に犬飼っていたじゃない。あのときの男

の子がほら、けいちゃんよ」

あ。思い出した。お父さんが消えていた間に現れた少年を、犬を見つけて困っていたときに「なにやってんのー？」と話しかけてきた男の子を。確か名前も関根溪斗と書いてたよ
うな・・・

「ケイクン」

「そうそう！レイちゃんよくけいちゃんのことケイクン、ケイクンって言ってたわねえ」
零は考えることが多くて、山里のおばさんの声は零の耳には届かない。一つ一つ溪斗との
思い出が蘇る。『ちゃんとおーつきくなるまで、おせわしようなあ』ぐさり。零の胸に幼
い頃の約束が刺さる。

「やぶちやった」

約束したのに。逃げてしまった。

「ああ・・・」

「どうしたの？レイちゃん。そうだ、今飼っている犬の名前なんていうの？昔の犬の名前
は確か——」

どうしよう。どうしよう。どうしよう。どおしよう！！

頭の中には溪斗に対する罪悪感と焦りと混乱と・・・

「ごめん！待たせた！宮田。えっと・・・早くこつち来てー！」
ガランと店のドアが開く音が鳴り溪斗の音が響く。

今はまだいいや、伝えなくて。考えるのをやめて零は靴を履く。

「うんっ！」

いつかちゃんと話して、またあのときみたたく関根君のことをケイクんって・・・
籠に閉ざされた小鳥は時がたつて大きな翼を広げる。小さな世界から抜け出し、はるかな
大空に飛び立って。零は光に向かって一歩足を踏み出した。

第三話

ハア、ハア。

ランの口からは白い息が漏れる。いくら犬小屋にいたってランは寒そうにブルブル体を震
わせていた。

「ランく。家の中入っていいだって」

活力あふれる少年の声がランの耳に響きむくりと起きて、待つてましたとばかりに玄関へ
急ぐ。体は秋田犬ぐらいの大きさが今回ばかりは廊下を歩いてキッチンへ向かう。ガラ

ガラ引き戸が開いたかと思うと、ぶわっ。なんとも心地よい風がランの体を包み込む。

「寒かっただろうラン。ほらランこっち、こっち」

ランの指定席であるキッチンの勝手口へ少年は招き入れる。しかし、ランはあまりこの席が好きではない。ドアの隙間から風が入ってくるし、下のコンクリートはひんやり冷たいがマットが敷いてあり心なしか寒さが和らぐ。

「クウ〜ン」

しぶしぶと移動はするがずる賢く上半身はキッチンの床に寝そべり暖房の温かい風にうつをぬかす。

「おかーさん、ランに朝ごはんの残りあげちやうね」

「まったく・・・もう」

飼い主の気遣いに感謝しながらほかほかのご飯が入った野菜スープを食べる。やけにニンジン数の多い気がするのは少年の残り物だからだろう・・・

あまり野菜は好きではないランも冷たい朝食を食べるよりはマシなので黙々と口を動かす。「ハア」人では聞こえないくらいのため息が耳をかすめ、何だと振り向く。目に映ったのは少年の母親。ランを見つめるその母親の目は何か壁をつくっているようであまりいい気はしない。

「溪斗。早く学校行きなさい」

「ん。はーい」

少年、溪斗はバタバタ音をたてて家を出て行く。ランはその様子を一通り見てからぬくぬくと眠りについた。

一月。外には一面の銀世界が広がる冬の季節となっていた。

れい、変わったなあ・・・。

朝、学校の教室でクラスメイト達と楽しげに話す零の姿を見てひよりはふと思う。クラスメイトの中にはかつて零が苦手意識を持っていた男子も何人か混ざっている。本当に変わったなあ。机に肘をつけてゆったりと座り、スカートのポケットに入っている携帯を触る。零が変化したきっかけの日、今日からだいたい二ヶ月前の放課後。一緒に塾に向かう途中、突然携帯が震えだして焦ったのを覚えている。とっさに離れて耳に当てると「今、関根に教えた。飛び出して行ってったよ」と奥澤勇太からの電話で大体のことを理解することが出来た。ああ、あたしもう用済みかな・・・？

邪魔になるのは目に見えているのですぐに用事があると零に言って別れた。その後何が起きたかは分からないが、それ以来零は強くなった。もちろんそれはひよりにとって嬉しいことだ。けど、今までほど頼りにされないのが悲しい。

「よお、渡辺〜」

名前を呼ばれて振り向くと寝癖でかなり髪がぼさぼさになった勇太が目に入りめまいがする。

「奥澤・・・ちゃんと髪整えなよ」

「いやいや、男っていうのはあまりそーいうのは女ほど気にしないもんですよ。それに、毎回毎回違うヘアスタイルっておもしろくない？」

その神経見習いたいわ・・・。ぼそつと呟くが勇太の言っていることは半分嘘だと思う。勇太は自分の容姿に自信をもっている人間だ。確かに顔は他の男子と比べると二枚目だ。

そこを狙って髪はあえてぼさぼさにして、でも臭いはしっかり気にしている。ひよりの鼻につくほのかなベリーの香りはシーブリーズによるものだ。下手に何か教えるといつか自分もこの男の操り人形になりかねない。一つ、一つ言葉に注意しないといけないからめんどくさくてしょうがない。

「で、今度はなんのよう？」

「うわ、ひでーな。俺を見るなりそんなこと言うなんて・・・」

さも、落ち込んでるように肩を落とす勇太をわざとやっているのとひよりは判断して、冷たい目で見る。他の男子は嫌いな奴でも普通はニコニコしているが、どうせ奥澤にはバレルと分かっていいるからあえて笑顔をつくらない。

「ただ話したかっただけだ。その何が悪い」

「悪いとは言っていないよ、それに開き直るか・・・」

何考えているか分かんないや、こいつ。少しため息をついて椅子の後ろに寄りかかって、足を組む。

「いや、な。最近、関根と宮田で犬飼ってるじゃん。だから、さ。なあんか関根と一緒にバカやる時間が減ってつまんないっつか、さびしいって少し、少しだけ感じんの」

ドキッ。勇太が話す内容は最近ひよりが感じていることとまったく同じで、その言葉は自分に向けられている気がしてしまう。

いちおう、奥澤も同じ中学生だもんな・・・。まだ、情報とか人の裏事情とかに興味もつてなかった小学校四年生ころは今と比べ物にならないほどピュアだった。けど、今のようにしてしまった原因は自分と分かっているから何もいえない。

『渡辺。おれ、おまえのことが好きなんだけど・・・どう思う？』

彼にとって初めての告白であろう。顔をりんごみたいに真っ赤に話していた。四年生のころの学校帰りに一生懸命に愛の言葉を伝える勇太に対して自分の言った返事は・・・

『ごめん、無理。もう他の男子と付き合ってるから』

それくらいのこと知っててよ。最後にポソツと言って顔も見ず置き去りにしたあのときの自分あまりにも失礼だった。

今は自分のことをどう思っているのかは分からないが、あれ以来奥澤は変わってしまった。

「でさあ、その関根と宮田のことなんだけど」

これが本題か・・・。ちよつと見直した自分がバカだったともう一度考え直し、耳を傾ける。

「二人とも小一のと看一緒だ飼ってただろう。親に内緒で、公園で」

「それはお互い知ってるでしょ？何をいまさら・・・」

去年の夏ごろだっただろうか、奥澤がれいについての質問をあたしに聞いてきたのは。男性恐怖症だからあまり話しかけるなと警告したこと、腕の傷の原因について話したのが、奥澤が一番食い込んだことは話の一部分にできた犬のことだった。

『そういえば、関根も小一のころ親に秘密で他の学校の女子と犬を飼ってたんだ』

最初はまさかと思っていたが、聞いているうちにれいから聞いたことと重なっている部分

が多くあつて関根溪斗がれいと犬を飼っていることが分かった。

もしかしたら、関根はれいのトラウマを克服してくれるかもしれない……!

そうしてひよりは勇太と協力することになったのだが、もうひよりの目的が達成されている今、何を聞く必要があるのだろうか?

「実はな、その話にはまだ続きがあるんだ」

ニヤリと道化師のような笑みを浮かべる勇太にひよりは反論する。

「続きって……別にいいは関根のこと思い出したらいいし、関根だつて覚えてるはずでしょ?それで二人とも仲良くなつて……ほら、これで終わり」

「いや、違うぞ。少なくとも宮田は思い出したが、関根はまだ忘れてる」

「はあ!? 何ですよ? まだ忘れたままなの!」

思わず声を荒げてしまい周りからの注目を浴びてしまう。ヤバ、目立っちゃった。自分の行為に反省しながら奥澤を睨む。

「あいつも宮田と同様にトラウマになつてるんだ。だから、記憶からなかったことにせずと奥にしまいこんでいる」

ひよりにしか聞こえない小さな声で言った後、勇太はふざけたように頭を掻いて、
「いや、ごめんごめん。借りたノートまだ返してなくて」

何のこと？と苛立ちを感じたが、周りからごまかすためかとすぐに感づき、黙る。
「じゃあなく」とさっさと逃げてしまったが、まだまだ聞きたいことがいっぱいあったから腑に落ちない。

「何が、じゃあなくだよ！」

「大変だね、ひよりちゃん。明日は返してもらえるといいね」

どんまい、ひよりちゃん。と話かけてくるれいにあんたのせいで困ってるの！と心の中でつつこむ。

結局、関根のトラウマって何なんだろう？

好奇心が沸いてくるのを抑えながら、零に愚痴を笑いながら言う。

「ほんと、早くしてほしいよ」

ケイクン。

昔、自分はある女の子にそう呼ばれていた。
にこにこ笑顔を向けてくれるかわいい女の子はいつもいちょうが舞う公園にいたのを覚

えている。近くのパン屋からもらったパンの残りを手に持って、餌をあげていた。公園にある誰も使っていない物置をこっそり使って一緒に犬を育てていた。自分の家はペットを飼うなど母親にきつく言われていたからすぐく女の子と犬に会うのが楽しみだった。でも、もうその女の子と犬の名前は覚えていない。

一ヶ月ぐらいたつてだろうか、ある日突然女の子がこなくなった。ちょうどそのとき犬は擦り傷がいっぱいになって、棒に叩かれた跡もあつて驚いた。

でも、女の子が来なくなつて別に平気だった。物置はあるし、餌も家の冷蔵庫から内緒で取つてあげてたから問題はなかつた。

その後は——？

覚えていない。不思議と覚えてないんだ……。でも思い出さなくていいと思う。昔のことより今ががんばつたほうがいいから……

オレは渡辺が好きだから一生懸命……。本当にオレ渡辺のことが好きなのか？

最近は前のように素直に認めることができなくなっている。小六からずっと片思いでタダ恋焦がれていたのに今はそのことすら抵抗を感じてしまう。なんでだよ……。？

考える、考えると浮かんでくるのは宮田零のはかなげに笑う姿。けれど、同時に幼いころにあつたあの女の子も出てくる。

なんだ・・・結局、引きずっている。宮田とあの子を同じにするなんて何考えているんだオレは・・・。

違う。宮田は中学校に入って知ったから別の人。だから違う。

キンコーンカーンコーン。

鐘が鳴り響き意識が戻される。

「おはよく。関根えく」

「ん、はよく。あれ？奥澤。どこ行ってたんだ？」

「情報収集く」

なるほど。今日はその日だったか。

奥澤は月に一回は新しいネタを仕入れるため朝、昼、放課後とそれぞれ別の日に他の生徒と自分が持っている情報を交換する。けれど、口が達者な奥澤は相手も気づかないうちに色々なことを聞き出すことが出来てしまう。

「そういえば、最近。宮田と話せるようになったって言う男子がやけに多くなつたなあ」
ニヤニヤしながらこつちを見てくるのでとりあえずスルーしておく。

「で、他にいい情報あつたのか？」

「いや。このままだと宮田を好きになる男子がぞくぞく増えるだろうなあ」

き、聞いちゃいねえ。大げさに話す奥澤は絶対自分をちやかそうとして言っている。でも、あまり溪斗は自分の行動に後悔はしていない。むしろ良かったと思うほどだ。零が抱えていた大きな心の傷を癒すことが出来たから。何よりも自分の手で救ったことは誇りに思っている。

「あと、関根が宮田を抱きしめたっていう面白いことを言う奴もいたなあ」
「ぶっツ!!」

あの日一番やってしまったと思っっていることを唐突に勇太に言われ動揺する。その後、宮田が意識を取り戻して会ったときは二人とも恥ずかしくお互いなかったことにしてしまったが、誰かに見られたとなると大問題だ。

「誰が言ってた・・・?」
悟られないよう落ち着いたそぶりをして溪斗は尋ねるが勇太はいたずらっ子のようにケラケラ笑う。

「誰も言っていないぞ?ただ、宮田自身から錯乱状態になったとき関根に止めてもらったと顔を赤くして言ってたから、まさかとは思ったが」

「・・・!!!」
頭を真っ白にして口をパクパクする溪斗を勇太は満足げにみて言う。

「安心しろ、誰にも言わないから。でも、渡辺か宮田かハッキリしとけよ」
わざとおちやらけた風に言っているが、たぶん真剣にオレのために言ってくれている。奥澤の気遣いに感謝して、しっかりとその言葉を受け入れる。
でも、オレだってわかんなくなってきたよ・・・。
自分の気持ちがどれほど不安定なものかを自覚して、ハアとため息をついた。

「わんわんっ!!」

「ランちゃんご飯だよ」

にっこりとドックフードをあげる零の目はもうランにメロメロだった。

「やっぱ、ペットが家にいるのはいいね。関根君」

わざわざ溪斗の家のキッチンにまでランに会いに来た零は二ヶ月くらい前と比べると打って変わっていた。

「誰が、わたしの家じゃあ無理言って言ったんだよ・・・」

「えへへ」

甘えたように笑う零をみて、溪斗はドキリと見ほれてしまう。

お、お願いだ。宮田！母さんの前ではそんなふうには笑わないでくれ・・・！！

学校でもその笑い方はしないから、よりいっそう焦ってしまふ。渡辺にもしているのは見たことがあるが、やっぱり自分にそれが向けられると顔が熱くなってくる。

宮田はそんなこと全然気づいていないのが幸いだ、自分の親に悟られるのは思春期の子供としては死ぬほどつらいことだった。

「ちよつとトイレ」

まず逃げるのが一番だと考えて席をはずす。

トイレに少しこもり寒さで頭が冷えるのを待つ。窓を見るともう外は暗く冷え切っていた。そろそろ宮田を家に帰らせたほうがいいかな・・・？

キッチンに戻ると宮田と母さんが楽しげに話す声が耳に入る。

「あ、溪斗。零ちゃんもう帰るって。暗くなっちゃったからおくってきなさい」

「はあ、いい」

「あとついでにランも連れてって散歩もしてきなさい」

「ワン！ワンワン！」

さつきまでおとなしくしていたランが急に騒ぎ始め、勝手口のドアを開けると飛ぶように

出て行ってしまった。

「じゃあ、オレらも行くか」

「うんっ」

二人とも制服だったので、零はコートと手袋。溪斗はマフラーと手袋だけにして外にでる。ビュオオオオ。風は思ったより強く、寒かったので溪斗は肩をちぢ込ませる。

「宮田。寒くないか？」

「わたしは平気だけど、関根君こそ大丈夫？」

やせ我慢して「大丈夫」と返したが、近くに寄ってきたランは見栄を張るなよと言っているように「わんわん」と言ってきた。

ギイイ。外門を開けてリードに繋がれたランを先頭にして歩き出す。

シヤ、シヤ。雪を踏みしめる音が聞こえるたんびに足の感覚が冷えてなくなる感じがする。

「そういうえば、ランって今何歳か分かる？」

「えつと・・・十歳くらいかな？」

結構長生きしているんだなあ・・・。ちらりとランをみてはて？と疑問が浮かぶ。

「大人の犬って成長はしないって聞いたことあるけど、何で十歳って分かるんだ？」

「・・・うん。それは秘密！いちおうわたしの直感ってことにしておいて」

一瞬だけだが宮田が暗い表情をした気がしたのだが、気のせいだと思つて声をかけなかった。ふさあ。鼻に何かがついたと思つて上を眺めるとちらりちらりと雪が粉のように舞つていた。

ほう。吐く息が白くなり上に消えていく。頬をかすめる結晶はなぞる感じに下へ落ちる。そういえば、あの時もこんな雪が降つてたな……。ぼんやりと足を止めて前髪につく雪を見つめる。ひとつひとつ落ちていくたびに記憶の一ページがめくられる。

夕暮れの雪のなか、まだ小さい足で道を駆け抜ける自分は、降ってくる雪に負けないほど大きな涙を瞳からこぼしていた。ただ、目の前にある現実を認めたくなくて、受け入れたくなくて必死で足を動かす。進むことにしか頭になかったからだろうか、影から出てくる車に気づかないまま道路を横切ろうとする。

キイイイイイッ！耳障りなブレーキの音が響きわたり振り向くと黄色い眩しい光が目に入つて――

「関根君？どうしたの？」

そこで記憶がふつりと途切れる。

「いや、大丈夫」

零と一緒にまた足を動かし始める。山里ベーカリーの看板が見えて零が振り向く。

「ここからはもう一人で帰るね」

「じゃあね。ランちゃん」

優しくランの頭を撫でて零はうっすらと笑い手を離す。そして聞こえるか聞こえないかわからないの小さな声で溪斗に呟く。

「バイバイ——君」

そういつて溪斗から去っていく、わざと溪斗の名前だけを小さくしたような気もするが違うと否定する。

「さて、オレらも帰るか」

「ワン」

しやりしやり鳴る雪の音を心地良く聞きながら夜空を眺める。満月の光が溪斗とランを照らし、また雲で隠れる。冬の北風はよりいっそう強くなっていた。

休日の土曜、昼になって陽が昇り空気が温かくなってきたころ、突然一本の電話がリビン

グに響いた。ごろごろ名残惜しそうに溪斗はコタツから出て受話器を取る。

「どちら様ですかあああ？」

あくびが混じりなんとも間拔けな声な返事になる。

『……え、えつと。宮田ですけど。関根君だよね？』

ちやんと言えば良かったと後悔しながら溪斗は零に尋ねる。

「どうしたんだ？ランのことか？」

『あ……うん。そのことだけど……』

『ええつとね……』と零はあまり口を動かさないので聞こえづらい。溪斗は音量を大きくしてもう一度耳にあてると、電話の向こう側にもう一人いることに気づく。誰だ？はつきりとはわからないが、女子だとは想像できる。『あー！あたし言うから貸して！』そう聞こえたかと思うと別の人の声が耳に響く。

『あたし、渡辺。れいが写真撮りたいっていうから山里ベーカーリーに来て。犬もちゃんと連れてきてね……あと、男子一人だけはきついなら他に一人だけ誘ってもいいから』

『じゃあね』言いたいことだけ言われてプツツと切られてしまった。すこし唾然としながらも気を取り直して準備をする。

あ、そういえば誰誘おう……。いちおう考えるが、電話をかける相手は決まっていた。

溪斗とランは電話があつて一時間くらいに山里ベーカリーにつく。

「ごめん。遅れた」

「大丈夫、大丈夫。今昼ご飯食べてたから」

カウンターの後ろからひよっこりひよりが顔を出しておいでおいでと手招きをする。よく見るといつもおさげにしている髪はストレートになっていて新鮮味がある。

「あれ、関根君もう一人呼ばなかったの？」

今度は零がひよっこり顔を出して溪斗に尋ねる。「そろそろ来るかな？」そう呟いてドアに目をやると、ちようど人影が外に見える。

ギイイイ。一斉に三人の視線がドアに集まる。そこに立っていたのは

「なんで、奥澤がここにいるの!？」

「それは、俺が関根に呼ばれたからに決まってるだろう」

やけに反応するひよりと奥澤を気にしつつ溪斗は零にアイコンタクトをおくる。そろそろ行くか？

うん。首を縦にふり零は立つ。

「撮る場所は公園でいいか？」

「大丈夫だよ」

そう言ってランと四人は公園に向かった。

写真はほとんどがランちゃん中心だった。全員で撮った後はランちゃんが走っているところや男子二人を追いかけまわしているところがほとんどで、途中は雪合戦にまでなっていた。実際はひよりちゃんと奥澤君がお互いに攻撃し合っているだけだったが。

「なあ、宮田。渡辺つてもつとおしとやかじゃなかったっけ？」

「うん。何だろ？奥澤君のときだけかな」

恐る恐る聞いてくる溪斗に零は苦笑いして答える。

でも、楽しそう。勇太の悪口をいうときひよりはいつも笑っていたのを覚えている。ほら、今だって不敵な笑みを浮かべているが、嫌いな相手にも我慢してニコニコするときと比べるとずっとマシだった。

時が過ぎるのは早くあつという間に四時と夕日が沈み始めてきた。

「いや、久しぶりに雪で夢中になったなあ」

「そのせいで、あたし服びしよぬれになったんだけど！」

満足げに言う奥澤君と違いひよりちゃんはぶすつと顔を膨らませる。一番はしゃいでいた二人は同じく公園で遊んでいた小学生よりも服が濡れていた。

それに引き換え、溪斗と零はランとじゃれたり、話していたので濡れるということはない。なかつた。

しかし、ランがもう初対面の勇太とひよりに慣れていたので零は安心した。

「あれ、そういえば関根とれいとランちゃんの写真撮ったの？」

「いや・・・」

「ただだけど」

ひよりの発言に溪斗、零はお茶を濁す。

それを見かねてずかずか話しを進める。

「じゃあ、ランちゃんと二人とも並んで並んで！」

カシヤ。一回ひよりが撮ったのを見たが二人ともぎこちなく笑っていて不自然だった。

「うゝんダメだなあ」

率直に否定され零は傷つくが気にしないふりをする。

「今度は俺がやる」

ひよりから勇太はカメラをぶんどり、座って撮る体勢になる。

笑わなくちや、笑わなくちやいつもは自然にできる笑みも今は引きつることしかできない。ランはいつもどおりゆったり座っていてうらやましく思う。

しかし、溪斗のほうを見ると必死で笑いをこらえている。

何でだろう？ 溪斗の目線の先に眼をやると、零も思わず吹きそうになる。

写真を撮ろうと真剣になってる勇太の後ろには満面の笑みを浮かべるひよりが両手いっぱい雪を抱え勇太の頭の上に落とそうとしていた。

「ハイ、チーズ」

ドサツ。カメラのボタンを押すと同時にひよりの手から雪が放たれる。

これにより第二回雪合戦が開幕するが、このとき撮った写真が溪斗と零にとつてのベストショットだった。

月曜日の朝。まだ陽が上がっていない暗い中、溪斗はふと目が覚める。ベットから起き上がり、いちおう制服に着替え、学校のいく準備はしとく。部屋の中でも息は白く寒い。下に行こうとして階段を下りるとキッチンに明かりが灯っているのが分かる。

父さんと母さんか・・・何話しているんだろう？
壁にピタリくっついて溪斗はこっそり話を聞く。

「まさか、溪斗がまた犬を飼うとは思わなかったな・・・」

「そうね・・・」

話を切り出した父親の言葉は意味深に感じた。

「今回は認めたんだな」

「当たり前よ、そのせいで溪斗を傷つけたんだから・・・！」

ゴクツ。唾を飲み込み集中する。ここを逃すともう聞けない気がする。

「でも、またランって名前を付けていたな、あいつ」

また？またってどういうことだ？父親の話す内容は理解することができない。ランの名前をつけたのは宮田零だ。そんなことありえない。

「だから、今回は私達もちゃんと面倒みなくちゃいけないの。溪斗のためにも・・・」

「分かっている。今は好きなようにさせておこう。溪斗が昔飼っていた犬みたくならないように——死なせないように」

え？今何て言った？頭がズキズキと痛み始める。死なせないように？じゃあランが死んだって言うのか？生きているのに？昔の犬がか？でもランではない・・・。

「違う。違うっ！死んでないっ!!」

イミガワカラナイ。でも、溪斗の頭には次々と映像が現れる。聞こえる悲鳴、体全体に感じる痛み。目の前にいるのはぐったりと横たわる最愛の犬。そして自分はただ呆然と座っている。手は真っ赤な血で染められていて・・・殺したのはオレ？

「オレは殺してないっ！嘘だそんなの嘘だっ!!」

認めたくない。声の限り叫ぶ。あいまいな記憶の残像は溪斗を苦しめる。

「溪斗っ！いたのか!?!もしかして今話を・・・」

「ねえ?オレ、ランを殺したのか!?!ラン死んでないよな!?!」

否定してほしくて、違うって言ってほしくて父親にわらをもつかむような思いで問う。

けれど、かえってくるのは無言の返事。それは肯定しているのを意味しているようでイライラがつのる。

「何で何も言わねえんだよ!!」

頭がぐちゃぐちゃで、ここにるのが嫌になってキッチンから出ようとすする。

「溪斗!どこ行くの・・・!」

「どこだっていいだろ!」

ガシャン。引き戸を荒く閉めて溪斗は廊下を走る。家にいるのが、親の顔をみるのが息苦

しくなつて、暗い外に出る。

冷たい風が溪斗の肌を刺し神経を麻痺させる。こんなもの、気にしてられるか・・・！
たまたま制服のポケットに入っていた手袋を手にはめて庭から出ようとする。少し戸惑いはある。けど、誰も追いかけてこない。それが、溪斗の迷いを消す。

ガラガラ。外門を開けたまんま家から離れる。ランは外の犬小屋にいるはずだが今は考えたくなかった。

澄み切つた空に浮かぶ太陽は優しく照らしていた。

ランちゃん元気かな。日曜日は溪斗とランに会いたくて今日が待ちどうしかった。
滑る道路に気をつけながら、溪斗の家に急ぐ。

あれ？外門が開いている。外にランがいたら逃げてしまうではないか・・・。犬小屋を見るがない。きつとキッチンで寝ているのかな？

ピンポンと呼び鈴をならし溪斗が出るのを待つ。けれど出てきたのは溪斗ではなく溪斗の母親だった。

「おはようございます。関根君まだ起きてませんか？」

ニッコリ聞いて尋ねるが浮かない顔をして溪斗の母親は返事する。

「それが、怒っちゃって・・・家出ていっちゃったの」

苦笑いする母親はさほど困っている様子は感じられない。

「そんな・・・！ 追いかけてなくてもいいんですか!？」

なんで!？ 零はその態度に苛立ちを覚えつい怒鳴ってしまう。しかし、溪斗の母親は落ち着いた大人の対応で納得させる。

「もし、私が追いかけても追いつくことはできないわ。それに言っても聞かないと思うから、冷静になるまでそっとしとくのが一番よ」

溪斗の場合はね・・・最後に付け足して、微笑む。実際にそれが正しいのかもしれないが、あまり賛成はしたくない。

これが年齢の差なのだろうか、零はこれ以上の言葉が見つからず仕方なく認める。

「じゃあ零ちゃんも溪斗の代わりに犬小屋にいるランの朝ごはんあげといてね」

そこで零は「えっ?」今までうつむいていた顔を上げる。

「ランちゃんキッチンにいるんじゃないのですか?」

「何言っているの零ちゃん。今日は家に入れてないわよ」

顔が青ざめていくのが自分でもわかる。いない？キッチンに？ランちゃんが始めは冗談かと疑いそうになるが、徐々に本当のことだと理解していく。でも、犬小屋にランちゃんいなかったよ・・・？

もしかして！バツと外門のほうへ駆け出す。零が来るまでここは開いていた。つまり

「逃げちゃった。逃げちゃったよランちゃん！」

頭が真っ白になり何をすればいいか分からなくなる。ただ思いつくのは

「ケイクんっ・・・！」

考えるよりも先に彼の元へ急がなければと体が動いた。

昔、昔の話をしよう。

あるところに男の子がいました。関根溪斗という名の少年です。彼はいつも笑っていました。た。

小学一年生の秋のころでしょうか、彼は寄り道をした帰り道、女の子と犬に出会いました。『かわいそう』そう捨てられた犬をみて言う彼女を見て彼は親に秘密で一緒に飼うことを

決心します。

そして溪斗は少女と公園にある物置を勝手に使って犬を飼い始めます。

彼の家はペットを飼うのを強く禁止されていて、生き物を育てることは初めてでした。

でも、大変なことでしたがそれ以上にとってもやりがいのあることだと知ります。

毎日、毎日、公園を通って溪斗は少女と共にランと名づけた犬の面倒をみます。それがどれほど楽しい日々だったでしょうか、彼は自然に犬を飼うのを生きがいだと感じるようになりました。

『ケイクン』そう親しげに自分の名を呼んでくれた少女はいつのまにか溪斗の隣から消えていました。もう彼は一人ぼっちです。

けれど、溪斗は笑っていました。ランがいたからです。

餌は家の冷蔵庫から、防寒は自分の服から・・・親にいくら怒られても溪斗は必死でランを守りました。ランはもう、おれしかない、おれはちゃんとおつきくなるまでお世話しなくちゃいけない。

しかし、いくら隠してもいざればばれてしまいます。雪が降る夕方、家から公園に行くと母親がいました。後をつけられていたのです。

「この犬は何？今すぐ捨ててきなさい」

冷たくいい放つ母親は溪斗にとって最悪の敵でしかありませんでした。

「いやだあ！いぬをかうんだあ！」

駄々をこねて彼は抵抗します。おれがすてたらランはしんじやう。おかあさんなんかにわたさない。

「ダメよ。そんなの・・・捨てなさい」

聞く耳を持たずバツサリ溪斗の思いを切り捨てます。

そんなのって・・・！ランはものじゃない！

強く溪斗の感情は爆発しました。

「そんなの、いやだあああああつ!!!」

ボロボロ涙を流し、大きく叫んで彼はランと逃げます。大人が通れない細い道を使って寒い雪の中を。

塀と塀の隙間、木の間。さまざまな所をとり、道路を横切ろうとした時——

キイイイイイイッ!! 耳障りなブレーキの音が響きわたり振り向くと黄色い眩しい光が目に入りました。

あ。そう思った瞬間にドンツと溪斗の体は何かには飛ばされ道路に全身を打ちます。目が真っ黒になって感じられるのは痛みだけです。

「いたい・・・いたいよ・・・！」

擦り傷だらけになった顔をやつとのことで上げ、目を開けます。

「あ、あああ・・・」

もし、これが神様のつくったお話ならなんという惨劇でしょう。もし、これが夢だったらどれほど幸せなことでしょう。

「あああああああああああああああああああああ」

声を絞り上げ、溪斗は絶叫します。目の前にいたのは彼をかばって車に轢かれたランでした。

「どうして、どうしてえ・・・ラン」

ランに近寄り溪斗は必死で呼びかけます。けれど、吐く息は小さくなっていくばかりです。ペタッ。血がドクドク流れ出てくる場所を触ると、いつも感じていたランのぬくもりはさめてきています。

「しないです・・・らあん」

ぎゅつと力の限り抱きしめて力を失ってゆくランを見つめます。心配して見に来る人々も駆けつけてきた母親も目に入らず、ただランを・・・。

すうう。心臓の鼓動が聞こえなくなつて、体が冷たくなりました。

「ラン・・・・・・？」

ラン？ラン？ラン？いくら呼んでも前のように答えてくれません。いくら抱きしめても尻尾を振ってくれませんか。

ランは溪斗を守るために死にました。

そして、溪斗の目から光が消えました。

少年は最愛の犬を守ろうとがんばりました。けれど、犬は少年を守って死にました。これはハッピーエンドのない残酷なストーリー。関根溪斗の昔のお話。

「思いだした・・・」

暗闇の中、溪斗目を覚ます。

ポタリ。無意識のうち涙がこぼれていた。やっと思ひ出した。ずっと頭に引つかかっていた楽しくてつらかった記憶。

「ランはオレが殺した・・・！」

なんで今まで忘れていたのだろうか？

昔の罪から逃れようとしていたのか、最悪だ。

「ラン・・・！」

どうしようもない喪失感で溪斗は膝を抱える。オレはランを守ってたんじゃない、守られてたんだ。失ってから気づいた大切なこと。

トン。後ろに寄りかかる。ひんやりと冷たい壁は溪斗の体を痛めつける。でも、あの時のランに比べればと思うと何も感じない。

溪斗がいるのは昔ランを飼っていた公園の物置の中。相変わらずこの物置は誰にも使われず放置されている。鼻につく臭いはツンとカビくさい。

コツン。何かが手に当たり物音がする。よく触つてみると縄跳びだ。誰のだろう・・・？まだ暗闇の中、目が慣れずはつきりと書かれた名前をみることは出来ない。分かるのはピントの縄跳びだけ。

あ。そこで気づく。これはあの女の子のだと。名前ももう覚えてない笑顔が素敵な少女のものだと。

名前が書かれているであろう場所をずっと溪斗は見つめる。

そのときだ。

ガラッ。光が差し込み、視界が白くなる。

縄跳びに書かれた名前の文字が姿を現す。

「ケイクン！」

久々に聞くその言葉に目を開ける。自分をその名で呼ぶのは一人だけ。

溪斗も昔の呼び名で相手を言う。

「レイ」

こうして、悲劇で終わったはずの昔話は今また動き始める。

はあ、はあ。

口から白い息を出して溪斗と零は雪の道を走る。すでに時間は昼ごろとなっていた。

『ランが消えたの』

ある意味で溪斗と零が感動の再会を果たした後、最初に話す言葉はこれだった。それを聞いたときは自分のせいだと溪斗は顔を青くしたが、零は別の原因だと言って続ける。

『違う、ケイクンのせいじゃないよ。もしかしたら、たぶん——』

寿命。ランはもう死んでもおかしくない歳だという。けれど、溪斗はあまり信じることが

できなかつた。あんなに元気だつたのに……!

『十歳くらいがだいたい寿命なんだ……いくら元気つていつても無理はしてたんじゃな
いかな……?』

でも、本当に寿命かどうかはわかんない。弱々しく震えた声で呟く零に溪斗は一緒に捜そ
うと言つた。

「ケイクン。どこにいつてるの?」

零の手をつないで道を駆ける溪斗には答えは決まっていた。

「イチヨウの小道」

そこは溪斗がランを殺してしまつた場所。

嫌な予感がする。根拠はないが直感的に溪斗は感じた。

「着いた」

足を止めて二人は辺りを見渡す。いない。

そして、木々や家の間をくまなく捜す。

「これ、ランちゃんの足跡?」

家の塀と塀の間にある小さな道に犬の足跡を発見する。

「行ってみよう」

溪斗を先頭に続いて零と足跡を追って進む。
塀がなくなつたかと思うと目に映るのは葉が落ちたイチヨウの木々。

「ランちゃん・・・！」

「ランっ！」

その奥にひっそりとランは木に横たわっていた。

溪斗と零はすぐにランのそばに行き、触る。ぼかぼかの湯たんぽみただった温かさはな
くいつもより体温は低くなっている。

昔のあの出来事と重なる。なすすべもなく息絶えたどうしようもない喪失感。

お願いだ。もうオレを一人にしないでくれ。

制服が汚れるのを気にしないで溪斗はギュッと抱きしめる。温めなくちや。このまま寒さ
で死んでしまう。温めなくちや。

それにならうように零もそつと手を背中にやる。

「ランちゃん。ランちゃん」

背中をさすりランを呼ぶ。

「死ぬなよ、ラン！もつとオレはおまえといたいよ。もつと遊びたいよ・・・！」
息が小さくなつていくのが分かる。

「また、雪合戦しよう。春は花見しよう。夏は海に行こう。秋はいっぱいスポーツしよう」
短い間だったが、ランはかけがえのない家族になった。兄弟も同然になった。一緒にやり
たいことはたくさんある。

「しないです・・・らん」

ぼろぼろ涙をこぼし溪斗は叫ぶ。

「クウラン」

か細いが溪斗と零の耳に確かにランの声が聞こえる。尻尾を少しだけ上げる。ボクは大丈
夫だよ・・・と。

「ラン」

ピタ。心臓の鼓動が消えてぬいぐるみのようになる。
ランははるか彼方へ旅にでた。

■エピソード■

一月下旬。日曜日。溪斗、零、勇太、ひよりの四人はデジカメで撮った写真を印刷しにカメラ屋に来ていた。

「よかつたな、関根。一回でもランと一緒に写真を撮ってて」

今日のはちゃんと整えている髪を気にしながら勇太は話す。

「よくないよ。れいと関根はもつとランと一緒に居たかったはずだから・・・！」

ギロツとひよりは勇太に噛み付く。それをなんともないように無視して話を続ける。

「今、写真つくっているのか？」

「うん・・・まあ。やってもらっている」

「ねえ、スルーしないでよ」

相変わらず言い争っている勇太とひよりを見て零はニツコリと笑顔で溪斗に話しかける。

「本当に仲いいよね、ケイクン」

溪斗と零の関係は昔の頃に戻っていた。

それに答えるかの様に溪斗も笑顔で返す。その雰囲気は何日か前と比べるとずいぶん大人になっていた。

「あ、できたらしいな」

店員が現れたのを確認して溪斗は席を外す。写真をもらって枚数や値段のところをみて「あれ？」と呟く。

しかし、溪斗は構わずお金を払い零のほうへ戻る。

「どうしたの？あれって言って」

「いや、な。枚数が一枚多いんだ」

いちおう買ったけど。溪斗と零は一枚、一枚写真をめくってチェックする。最後の一枚になつて溪斗の手が止まる。信じられないものを見ているような目で。零も気になつて隣から覗き込む。

「ランちゃん・・・!!」

二人の目に入ったのは小学校のころの溪斗と零がランと一緒に写っている写真だった。

本来なら絶対この世に存在しない架空の写真。溪斗も零もランも撮る前にバラバラになつてしまったのだから。

そこで、溪斗は気づく。つい最近まで飼っていたランと一年生のときに飼っていたランは同じ犬だと。

何が起こっているのか溪斗自身信じられないし、分からない。でも、この写真はかけがえ

のない宝物。失った思い出は再びランを溪斗たちの前に蘇らせたのだろう。そこに写っている溪斗と零は鮮やかな黄色いイチヨウの木たちに囲まれて、ただ無邪気に笑っていた。そして、その写真にはメッセージが刻まれていた。

「ありがとう、だってよ・・・」

溪斗は泣くのを必死でこらえながら呟く

「よかった・・・！ランは幸せだったんだ」

自分達のせいで死んでしまったランはずっと不幸なのだとはかり思っていた。うらまれていると思っていた。けど、ランは溪斗たちに『ありがとう』を贈った。ボクを育ててくれてありがとう、と。

「ケイクン。この写真はケイクンが持っていてよ」

涙を目にいっぱいにためながら零は言う。わたしは一度ランを見捨てちゃったから、最後まで一人で育てたケイクンが持っていないとおかしい。そう強引に奇跡の写真を渡す。

「じゃあさ、これレイのものでいいか？」

代わりにと、溪斗はこの前撮った唯一の溪斗と零とランとの写真を贈る。

そうやって、二人は宝物を手に入れる。

「どうしたんだ？宮田と関根え」

口げんかが終わって勇太とひよりがこちらを向く。

「なんでもない。あと、写真できたぞ」

あの写真は二人だけの秘密でいたい。溪斗は残ったものだけを見せる。

「そんなことより、はやく遊ぼう」

ひよりの提案に一同は賛成する。

勇太、ひよりと次々に店から出る。

「レイ。オレらも行こう」

溪斗は振り返り手を差し出す。

「うん！」

零は強く握り返し二人は共に大きな一歩を踏み出す。

悲劇が始まったプロローグは今、幕を閉じる。

これから物語はどうなるのかは分からない。けど、彼らはもう立ち止まらない。しっかりと手をつないで進む。

題名は——『僕と彼女の犬物語』

二日間の結末

代口 勇真

なんでこうなったのだろう。

ほんの数分前まではいつもと変わらない生活だったのに。

仕事から帰ってきてのんびりしようとしていただけなのに。

「どうしたのだ？お兄様」

流石にこの展開は誰だって度肝を抜かれるだろう。

驚いた、そんな話じゃない。驚愕だ。

“天使”がゆったりテレビを見ているなど誰が想像できたか。

こんな展開になるなんて絶対におかしい。なにかどこかでアクシデントが起きていたのかもしれない。

伏線のような何かが……

懸命にその伏線を記憶の中から掘り出す。

あつ、伏線もへったくれもなかった。

確か、あれは昨日の昼休みの出来事だった——

「はあ、一人っ子って羨ましいよな」

昼、いつもの昼食メンバーで食べていた時のこと。

このメンバーで一番の兄貴肌の草壁桜紀の言葉から始まった。

「いきなりどうした？桜紀がため息つくなんてさ」

「俺はそんな元気が有り余った脳筋バカだつて言いたいのか？」

実際、桜紀は運動はできるが勉強はからつきしの体育会系ではある。

「あー、違うんだよ。俺の妹がちよつと声掛けただけで怒鳴り散らすんだよ。他にも風呂は妹が先じゃないと嫌だとか、なんか兄離れが進んでるんだろなって憂いていたんだよ」
きつとそれは思春期の嫌悪感からではないのかと思う。

「それはたぶん思春期でしょ？父親とか兄と同じ洗濯にしたくないとか言ってるんじゃないの？」

そう問いただすのは学年成績トップの知識人、相沢優希だ。

そこで桜紀はびっくりした。凶星ではあったのだろう。

脂汗がじつとりと出て少し息が荒くなっていた。

「そ、そんな……俺は嫌われたって事じゃないかよ！」

卑屈になるのは分かる。実際に同じ事を言われれば誰だつて嫌われたと思うだろう。

「まあこの道はある程度覚悟しないといけないよ。私のお父さんもそれで悩んだらしいからね」

「そ、そうなのか……」

そういつてまた悩み始める。またスパイラルに陥るなコレ。

一人っ子というのはきつと、いや絶対俺のことだ。

一人っ子どころか一人暮らしに近い俺の生活に桜紀は羨ましがっているだけなのだが。

正直、人恋しいと思ってしまう。誰か傍にいただけでも心が落ち着くのだと改めて思い至った。

「なあ晴義イ、俺と替わって……いや、やっぱやめておこう」

「なんだいきなりやめるって」

「お前だと変にフラグを立てるし、現に——」

桜紀は教室の外に指を指す。

向かった方向は廊下。向いてみると「……お、おおう」と声を上げてしまった。

外に女子生徒が集っているなんて状態は普通、見かけることは出来ない。

「——これ、晴義のせいだからな。分かるか？」

「いや、なんで俺のせいなんだ？」

逆に俺が聞きたいところなんだが、桜紀はやれやれと言わんばかりに大げさに手を上げる。

「晴義よ……お前は実に罪深い男だ。刺されない事を祈ってるぜ」

「いやいやいやいや！なんで刺されないといけないんだよ
今度は盛大に溜息を付かれた。気がつけば周りにいた野郎共が何故か俺の周りを囲んでい
た。

「貴様の所為で僕の初恋が失恋になったんだぞ！」

え、それ俺関係あるの？

「俺たちの天使がお前みたいな悪魔に盗られたんだぞ！」

天使ってどちら様？俺の知ってる人の範囲にある？

「呪殺呪殺呪殺呪殺呪殺………」

ちよ、かなり危険すぎるんだけど！本当に殺されかねないぞ！?

「………これな、晴義の普段の生活の結果だぞ？」

黒いオーラの妬みを感じるのは俺だけなのか？嫌過ぎる。

異様な空気に包まれて逃げ出したくなかった時だった。

「天使が降臨したぞおお！」

という野次馬の叫びが飛んできた。

「天使？なんのことだ？」

「晴義、逆に聞こう。なんで知らないんだ」

知り合いの中に“天使”だなんて呼ばれる人はまず聞いたことない。そもそもこの学校にいるのかどうかすら怪しい。

アニメの世界じゃあるまいし……

「あ、千駄木さんこんにちはー」

「こんにちは。今日もいい天気ですね。次の授業はなんでしようか？」
誰だ、いかにもお嬢様っぽいテンプレを使った奴は。

廊下側から聞こえたはずだから、振り返ればそこに偽者がいるはずだ！

振り返るとそこにいたのは――

「……………」

千駄木知佳。俺の最も嫌いとするタイプだ。

表の性格は、品行方正・八方美人・文武両道……と、今時のマンガやライトノベルに登場する“本物のお嬢様”だ。

あくまで、表の話だが。

裏の顔は……ゴメンナサイそんな設定はありません。

しかし、あの天然だけはどうも受け付けない。

わざとらしい言動や

「次は体育ですか。あちらの教諭は品が足りませんね。あ、いえ、別に悪口というわけではないのですが」

お金持ち発言を無自覚に言っていたり

「あら？体育着がないですね。じいに至急持ってきて貰いましょう」
そして、最も嫌いなのは今から起きることだ。

「お嬢様、こちら体育着でございます。本日はフローラルの香りでお洗濯させていただきます」

どこからともなく現れた燕尾服の初老の男性。

奴があのお駄木知佳の執事様ってわけだ。

というか、場を弁えない奴が嫌いなだけで。

千駄木知佳というよりもあつちの執事が気に入らないだけの事。

かと言って千駄木知佳を好意に持つつもりもない。

嫉妬とかでもないが、ただお金持ちが好きじゃないっていうやつなのかもしれないもある。

一般人からしたらお金持ちなんて悩みを金で解決するようにはか見えない。無論、俺もだ。

この学校に通えるのはこの学校の学園長の曾孫だということもあるし、優遇されている。

人生が上流階級しかない道の人間に、庶民のことなんて分かるわけも無い。

「はあ、なんかイラつく」

「え、あ、おい晴義？」

自分でイライラすること考えていた所為か頭が痛くなっていた。

早々に葉貫いに行こう。

そんな事を考えながら保健室に向かった。

「……………なるほど、彼がかの有名な——」

その後、何故か知らないが授業中ずっと誰かの視線に晒されながら放課後を迎えなければならなかった。

「はい、今日はこれで解散な。ゆっくり余生を過ごせよ」

まだ先生よりか歳を取っていないんだけども。

「藤堂、歯を食いしばれ」

「え、ちよ、先生？何をする気で」

目の前に拳が飛んできました。

「余生は過ごしたくないようだな」

「いいえ、過ごしたいです！」

ここで逆らえば命がないと思いました。

「じゃ、解散」

そして何事もなかったようにみんな思い思いに動いていく。少しは心配して欲しかった。

「晴義い、ゲーセン行くかく？」

桜紀の誘いには大いに乗りたい、ところなのだが。

「悪い、今日は用事があるんだ」

今日は外せない用事があるので断ることにしている。

「あ、もうこの時期なのか」

バツが悪そうに頭を搔く桜紀。

この時期は俺の両親の命日でもあった。

「もう三年も経ったのか……」

掠れるくらいに小さく、静かにその言葉が出てきた。

あの事故以来、俺の取り巻く環境は桜紀以外変わっていた。

みんな俺を壊れ物のように扱ひ、触れない程度に距離を保ち始めた。

なんて暗い事を考えるのは俺の悪い癖だ。

今、俺が『いる』って事が大事なんだ。生きていければ出来ることは沢山あるんだから。

「じゃ、俺は行くよ」

「晴義、これやるよ」

そう桜紀から渡されたのは菊の花束だった。

「桜紀……お前」

「俺には晴義のキモチなんて分からないしよ、お前の親の顔だって知らないんだ。ただだな、こういう贈り物くらいしても良いだろ？」

居場所を移してまだ日が浅い俺に初めて心から許せる相手がいた事に、俺は恥ずかしさと喜びを感じていた。

「あと、晴義が元気だつて寂しい思いをしていないって、そういうのも含めてのセンベツ？
なんだからな」

「桜紀………」

俺はあるひとつのことに関して言っておきたかった。

「おうっ、なんだ？」

「…………お前が餞別なんて言葉知ってるなんてどうしたんだ？腹でも痛いのか？」

プチッ。

あ、なんか切れた音がしたんだが。

「はああああ、まったく晴義……………お前ってやつは」

溜息を混ぜつつ苦笑いをする桜紀に、俺は感嘆した。

いつも頭の中身がスカスカな会話をする癖に、人の気持ちを人一倍感じられるそんな人間が桜紀ということだった。

ありがたいと胸に残し、シヨルダーバッグを肩に掛けて扉の前に立つ。

「じゃ、行ってくるわ」

その言葉を言い、扉を開ける。

両親の墓は学校の最寄の駅から十五駅ほど乗り継いだところの、ちょうど海が見える丘の側面に静かに佇んでいた。

「……………久しぶり、父さん、母さん」

久々に来た割には雑草はそこまで生えておらず、どちらかといえば綺麗なほうだ。

それでも埃や泥の汚れは目に付く。

早速、墓石の掃除から始めよう。

墓石の下段部の土台は雨などによって泥が飛び散っている。先に汲んでいた水を柄杓で掬いゆつくりと流す。

何度か流した後、スポンジで擦って埃や泥を取り除く。

そしてブラシで水垢を擦り落とす。

その作業が終わったらもう一度水を流す。

同じように上段部まで繰り返す。

こうして掃除をしていると、両親との思い出が鮮明に瞼の裏に現れる。

二人の優しさや厳しさ、そして俺に沢山の喜びと哀しみと、思い出を与えてくれた。

墓石の掃除をしていると、一人にまた逢えた……いや、最初から居た事を思わせてくれる。

無言で掃除をしていると、自然と汗が出てくる。

額を拭うと、そこから汗が出ていなかった。

ふと、この汗が涙だと気が付いた。

更に、嗚咽も零していたのだ。

まだ踏ん切りがつけていなかった。

どんなに忘れようとしても、どんなに前向きに向こうとしても。

「……俺は、赦されないんだな」

『過去』という柵から解き放たれることは無いんだろう。墓まで逝っても、来世に飛んでも、一生、解き放たれない。

桜紀から渡された菊の花を墓の前に立て置く。

墓には『藤堂之墓』と夕日に煌く一輪の菊が汐の音とともに、消え行くように静々と佇んでいた。

それは、遠くない過去の話。

一人の少年が、道を変えざるをえなくなる、悲しくも喜劇であるそんな話。

決別と孤独。その双方で彼の心は蝕まれていく。

そして彼は、知る。

『絶望と絶対』を。

墓石の掃除も終わり、一旦休憩に入る。

不意にスツと涼しい風が頬を撫でる。

潮風が髪を靡かせる。

そして額に見せるバツの痕。

両親が死に、哀しみに暮れていた俺に罪の痕を遺した亡き師匠との思い出を胸に、また一つ棄てていく。

少し軽くなった俺の心を表すように、夕暮れに染まる空は——

「『闇に堕ちていく、この世界の深淵を見せんととき、今、真なる世界を目にするであろう』……師匠の言っていたことだったな」

全てを飲み込む漆黒の闇に逃げるように、その身を隠す。
そして、俺の『時間』が始まる。

“ 応答せよ！こちら一〇八部隊、六六六に指令！至急任務地へ向かいたし！”

「了解……コード：オーメン、出撃する」

携帯電話に模した通信機で交信を終え、道具を片付け墓石の前に置いておく。

「ごめん父さん、母さん。……行ってくる」

荷物を残し急ぎ丘を降りる。

“ 闇が目を覚まし時、悪は蠢き表に生きる者を引き込み貪りそして棄てる。”

「オラア！このクソガキが！死ねや！」

「がつ……！ゲホッグアアア……」

「おーい、間違つて殺すなよ。面倒事は増やしたくねえからよ」

「闇に生きし人の形をした獣は、闇に消え表の守人から逃れる。

しかし。」

“同じ闇であれば、その姿を隠すことも、ましてや逃げることは不可能である。”

「そのクズども、ちよつといいか」

「ああん!?なんだテメエ、やんのゴルア!」

「ここら辺に橋本組っていうのがあるだろ?どこにある?」

「……おい、お前らそいつ潰しておけよ」

“非力なものを守るため、その力を破壊に徹底させる。”

手を後ろに回し、『それ』を取り出す。

「お、おい……それって」

「あ、兄貴……こいつやばいっすよ!逃げましょうぜ!」

『それ』を目の前の逃げる二人組に狙いを定める。

「お前達には吐いて貰わないといけないんでな、覚悟しな」

人差し指をトリガーに掛け、迷わず撃ちこんだ。

小さな発砲音と一瞬の悲鳴。この狭い路地には静寂と硝煙が生み出された。

静寂を打ち破るのは呻き声。

足に撃ちこみ逃げられないようにした。

「さて、お前らの頭領について話してもらおうか」

任務中には私情を持ち込ませない、そうでなければこっちの命が潰えてしまう。

「……なんなんだお前は！俺がなにをしたっていうんだよ！」

「別にお前になんか用はない。だからさっさと言え、お前らの頭領はどこにいる」
こんな状況になるとは思わなかったんだろう。まあ、当然か。

「……はっ、橋元の頭なら、隣町の飯島のところの旦那と一緒にすぜ！」

「ばっ！お前なに口滑らせてるんだよ阿呆が！」

隣町……飯島会のやつらも揃っているなら都合だ。

「そうか、ありがとうな」

お礼は言っておく。

「そ、そうか。なら俺らはこの辺で……」

と、立ち去ろうとする。

俺は背を向いたところを狙い、今度は頭を狙う。

「情報の礼だ。貰ってくれよ」

今度はもつと早く撃った。出来るだけ、一撃で仕留められるように。音もなく崩れる男達。その場に残るのはうずくまる男だけ。

「大丈夫か……？」

出来るだけ優しく声をかけ男を起こす。

「あなたは一体……」

「俺は……」

この仕事は公に出来ない仕事だから、ここでバレるのは問題になる。だから、気づかれないように嘘をつく必要があった。

「俺は掃除屋だよ。色々と掃除しないと」

定石としては掃除屋を通せば納得されるので楽で良い。

「はあ……そうですか」

納得させれば用はない、さっさと次の行動に移すのみだ。

「それじゃ、俺はこれで。それじゃあな」

踵を返して走る。次のミッションまで時間が押しているからだ。

俺のもうひとつの顔——

人の息の根を止める“断罪者”を受け持つ、言わば殺し屋と呼ばれる汚れ仕事だ。対象を速やかに、なおかつ無駄な時間を取らず確実に仕留める。

その手段は音もなく素手や消音銃で仕留めるのがモットーではある。

まあ例外もあるのだが。

後は要人を影で護衛するなども行っている。

今回は日本の中で治安の悪い東亜区のドンと呼ばれる榊次郎の抹殺を以てされている。

主なクライアントは政府暗部。よく彼らにはこういう仕事を渡されているので、仕事には困らない。

俺が所属している“ゼロとイチ”という組織は、政府暗部と深い関係をつないでいるようで、そのツテは足が震えるほどある。

その分の報酬もなかなか良い。ほとんどが公に出るほど名のある者の暗殺だったりするが。今回も政府暗部からの依頼で動いている。

「いかにもいますって雰囲気だしてるな。こんなんじゃないつでも殺しに来いって……なるほど、自信があるからの行動って訳ね」

思わず溜息が出た。今回は人数が多いと踏んで少し装備を硬めにしたのだが、相手はただのアホだった。

「だったら派手にご退場してもらいますか」

ジャケットの裏に仕込んだ即効発火性のある手榴弾を窓に向けて投げる。

カシャンと窓が割れ、その直後大きな音を立てて爆発が起きた。

だが、それで仕事を終わらせないのが俺だ。

すぐさまジャケットから手榴弾を三つ取り出し順に投げる。

できるだけ均等な距離に届くように投げておく。途中で逃げられても後始末が面倒なだけだ。

そして、次に電話を掛ける。

「あ、もしもし、火事が起きてます。場所は東亜区の……」

火災に関しては消防所に掛けるのがセオリーだ。後は報告するだけ。

「はあ、終わりかよ。つまらないなあ」

一人溜息をついてしまう。

師匠の癖がうつったのかもしれないな。

段々と野次馬が集まってくる。これで俺の仕事は完了だ。

そうして一人ひっそりと路地に消えていく。誰も気がつかないように。

「今回の報酬はどれくらい貰えるかなあ？そんなに貰えないかもな」

「遺体も確認済みだ。今回は早かったし、クライアントもかなり喜んでいただ。報酬は期待して損はないな」

帰ってきて早々ほめ言葉から始まった。

「……俺はあんまり納得してないけどな」

「なにを言ってるんだ？同時に飯島も仕留めてるんだ。文句の言いようがどこにあるんだっていうんだ？」

「弱いからに決まってるだろ」

そこで頭を搔いて溜息をつく男は万屋 “ゼロとイチ” の総長・碓氷健二で、同時に創立者でもある。

「いやいや、そのハングリー精神は私も同意したいね。弱いやつ倒して金貰ったって納得はいかんだろうよ」

その隣でパソコンと格闘しているのは副長・宮野恋。同じく創立者で副長の補佐に徹している。

創立者で同じ仲間でも性別も違うのになぜか恋仲ではない二人。理由はあるらしいが教えてはくれない。

「お前は戦うことしかしらねえ戦闘民族だからだろうに」

「だったらもう一人に聞いてみようじゃないか。なあ美紗」

掃除をしていたメイド服を着た少女は体を跳ねらせて後ろをゆっくりと向く。

「え、えーとお。わ、私は諜報専門ですから……戦いに関しての知識は無いんですっ！」
何が恥ずかしいのか分からないが顔を赤くして叫ぶ彼女は誰から見ても可愛いと思えるだろう。

彼女は星野美紗。諜報のプロで彼女から得る情報はほぼ間違はなく正確に当たる。

彼女は表では俺と同じ高校生をやっており、更にアイドルの肩書きもある。

逆によくこつちの世界に入れたなと思ったら、副長がマネージャーだったということらしい。

その上こつちの世界には一つ返事で入ってきたらしいのだが……

「あ、あのっ！私の顔になにかついてますか？」

じっと彼女の顔を見ていたらしい。失礼だったな。

「ああ、悪い。可愛いなって」

「か、かわっ!？」

そのまま彼女は床に座り込む。彼女の行動の意味が分からない。

「全く、ハルはその無意識を直すことから始めたほうがいいわね」
後ろから溜息交じりの苦笑をするのが聞えた。

「誰が無意識だつてユキ？俺はいつでも意識はあるけどな。寝てるとき以外」

「はあ、全く。ハルはどこでもそうじゃないの」

後ろから小言を始めたのは、隠蔽部隊隊長の相沢優希。

そう、知識人の相沢優希だ。

「あ、そうだ総長。ハル宛の任務が届いてます。しかも特務クラスの」
特務クラス。その言葉で明るい空気が一転、緊張感漂う空間に移り変わる。

「なんでハル宛なんだ？要人護衛か？それとも武力介入か？」

ユキは一度前者の方で眉がぴくりと動いた。要人護衛か。

「ハル、人の顔を見て判断しないの。ハルの思う通り、要人護衛よ」

「特務クラスの護衛ってなんなんだ？ここを創立して初だな」

総長ですら困惑してる事態に俺がどうこうできるわけが無い。ここはじっと考えがまとまるのを待とう。

「しかし、護衛だったら俺とか優希のところに来るはずだ。なんだって——」
総長は俺の顔を見て不思議そうに首を傾げる。

「——遊撃・暗殺専門の晴義の指名で来るんだ？」

総長の言うことはごもつとも。

俺は“守る”より“殲滅”する方が得意なのである。

「なんでも、クライアントからかなり強い要望らしいですね」

「もしかしてっ！要人って女性ですか!？」

どうしてそこで美紗が反応するのかは置いておくとして。

「確かにそれは気になるな、それで要人の動きを読むことが出来るからな」

そう、勝手に動かれると対応が遅れる場合がある。そうならば依頼は失敗となる恐れがある。

しかし、性別だけでもどんな行動をするかはある程度の可能性を見出せる。

加えて家族関係、知名度、両親の職業、その他含めれば更に行動を読むことが可能だ。

「いやあ、そおいうことじゃなくてえ！」

「は？ならなにを思っただ聞いたんだ？」

「い、いやあ、それは……」

美紗は何がしたいのかが全く分からなくなってきた。ここしばらくは悪化したように思える。

「マナージャーとしてはありがたいけど一人の女として言わせれば……相手が悪すぎるんだよね」

「それは同意です。彼を落とすにはそうとうの気合と口上手でない」と

あっちの副長と隠密隊長はこそそ話始めるし、総長はただニコニコ笑ってるだけだし。意味が分からない。

「それはともかくとして」

こそそ話は終わったらしく、依頼の話に戻っているユキ。

「女性ですね。私とハルより一つ下の高校一年のようです」

高校一年で女性か……まあ、読めないことはないか。

「名前は公表しても良いとなってますね。ええと……千駄木夢香と記されてます」
千駄木？もしかして………

「もしかして千駄木って……」

「もしかしなくても千駄木知佳の実妹です」

頭を悩ませることになるとは思わなかった。何故あえて疎遠にした千駄木があっちから近寄ってくるんだよ。

「しかし、私たちの通う高校とは違いますね。美紗さんの高校と同じのようです」

「だったらなおさら俺じゃなくてもいいじゃないかよ」

それだったら美紗に任せるのが一番良いだろうに、何故わざわざ違う学校の俺の所にくるんだ？

苛立ちが段々と表に出てくるようになった時。

「でも、クライアントの指示には絶対だろ？」

総長の言葉で怒りが収まった。

最近暗殺専門で動いていた所為か、初歩の掟を忘れていたようだ。

「……ああ、ゴメン。ちよつとイラついてたんだ」

誰かがやらないと、罪無き被害者が出てしまう。だがそれを止める手立てがない。

その悪の華を摘み取るのは俺達がやっている万屋を含んだ裏の仕事が処理をしなければならぬ。

表向きの仕事もしているが、それは裏の仕事を同時に行う伏線でもある。

「師匠の言葉は忘れちゃいけないんだった、危ない危ない」

「真美のこと……そうだな、忘れてはいけないよな」

俺が最も尊敬し敬愛していた師匠と呼ぶべき人物、重坂真美。

この仕事に一番精通し、そしてこの仕事を一番嫌っていた人だ。

「真美はいつだって仕事に対して不満持ってて完遂してきたからな、あんなに愚痴りながらもしつかりやることはやってくる辺り、抜かりなくて笑ってたな」

昔を思い出し、緩やかな顔に懐かしさを思わせるような笑みを総長と副長は浮かべた。

「そうだったね。特に暗殺は事あるごとに舌打ちばっかしてたね」

その話を聞いているうちに、師匠の言葉が一つ、頭の中からゆっくりと浮かび上がってきた。

「でも、師匠はいつもこう言ってたな。『誰かが汚れ仕事をしなきゃ、一歩進めないんだよ』って」

一番殺す事を嫌っていた師匠が毎日のように、諭すように言い続けていたことの一つだった。

「あいつは、死ぬってことを誰よりも知ってるからな。どんなに殺す相手が極悪人でもそうなってしまった理由を知ろうとする癖はあったよ」

今の俺がいるのは、全て師匠が導いてくれたからだ。

あの時、両親を亡くし、絶望で道が見えなくなっていたとき。

“おいボウズ、なに自殺にでも行くような顔してるんだよ。ガキはガキらしく、ニコニコ

鼻水垂らして遊んでこいよな”

その“顔”を知っていてなお、励ましてくれた師匠を俺は一時も忘れたことは無い。

師匠の出会いには衝撃と憤怒の出会いでもあったが。

あの時の俺は悲觀的になりすぎて、師匠の言葉が何も知らないただのお節介のお姉さんぐらいとしか思っていなかった。

だが、その続きで俺の心に光が灯った。

“誰が死んだかは分からないさ。けどさ、それでも、その死が一步違う道を歩む分岐点でもあると思うぞ。アタシはそう思ってる”

死は新しい“何か”と出会うものだ教えてくれた。

当時は意味もよく分からなかったが、心が安らぎ、落ち着きが出てきていた。

「それじゃ、今回の依頼よろしくな」

総長の激励の言葉を貰い、帰宅の道を辿る。

千駄木知佳の妹……同じお嬢様キャラであるのは確かだろう。

そう思うと、嫌気が差してくる。

薄暗い街灯と満月が俺の心を表してくれてるようだった。

どんなに期間が短くとも依頼は完遂することが俺の、師匠と共に誓った、師匠との絆の証、それを破りたくない。

そう思うと、月の薄暗さが一転し未来を照らすように輝いた。

自宅に到着すると同時に戦闘態勢を取った。

家の明かりが点いている。空き巣か？それとも俺を狙って？

相対できる武器は肉体のみ、力んだ力を抜いて動きに隙が無いようにする。

入り口が開いていて、ピッキングの跡は残っていないが正面から堂々と入ったようだ。

自信があると踏んで間違いはない。プロの犯行だろう。

音を立てずに息を殺しつつ、同時に視界の幅を広げ盗人の居場所を特定する。

……リビングに明かりが点いていて、そこにいることがわかる。

気配すら消さない盗人ってことは、相当な素人の犯行だと思う。

別にこそそしなくても平気のようだ。

息を吐いていつも通りのようにリビングの扉を開ける。

「あら、お帰りなさい。藤堂くん」

予想の遙かに上に行く出来事がそこにあった。

「な、な……なななななんでお前がここにいるんだ！」

「なんで申されましても、そこに藤堂くんのご自宅がありましたから」
ダメだ、会話が一方通行になつてる。俺が理解できてない。

「あら、今日の夕方辺りに依頼を取り付けたはずですわよ？」
今ので一方通行化していたものが理解できた。

「その依頼では“藤堂晴義に護衛を依頼する”としか書いてありませんから、詳しい内容をお話しておきたかったです」

丁重にお辞儀までするところ、本当に依頼をしてきたのが分かる。
ようやく頭の中が整理できたところでわざとらしく咳をつく。

「落ち着きましたね。それでは、説明……と行きたいところですが、護衛してもらおう娘が今到着したので紹介しましょう」
と、おもむろに窓を開ける。

目の前に現れたのはヘリコプター。
さつきまで音や風すらしなかったのに、いつ来たのか分からない。

「ああ、このヘリはサイレンサーを投入した試作ヘリですわね。無期限仕様でないのは残念ですが」
いや、それだけで充分戦争起こせるのだが。

ヘリのドアが開き、まず黒服のガタイの良い男が一人降りる。直後にもう一人、今度は女の子が降りてくる。

瞳孔が大きく開いたのが分かった。

何故だか知らないが、知っていた。懐かしかった。

カールが効いた黒い髪、白く元気のある肌、まつげが長く目が大きく開いている。

「お主が……私を守る騎士かえ？」

口調が独特で、耳から離れない。

「ああ、そうだ」

「それならば、私の名を晒そう。私の名は千駄木夢香である。千駄木家の跡取り候補として最有力候補を持ってして、お主に謝辞を申す」

どこか偉そうに、しかし心からモノを言っているので嫌な気持ちにはならない。

「ああ、俺はコード・オーメン。俺のことはなんと呼んでも良いぞ」

クライアントは俺のことをどんなふうに呼んでも構わない。それが俺のやり方の一つでもある。

「ならば“お兄様”でも良いか？」

千駄木知佳が大爆笑した。俺はそれどころじゃないが。

「いやいや待って待って、なぜそんな名前になるんだ」

「そんなの決まっておろくに。私が幼少の頃知っておる男と同じ匂いがする。だからお主は“お兄様”で良いのだよ」

見たことはあるが、話した記憶がない。

そもそも、たしかテレビに出ていたのを見ていただけだ。

「その男はな、私に対して『なんか可愛いけど強がりだね』と言われての、その時は心が締め付けられるような気持ちになつての」

惚気話が始まってから情報収集レベルを二までに下げた。ちなみに最高レベルは一〇だ。

「その男は暗い性格での、事ある毎に悪い方向に考えてしまう」

彼女のデータを集める、そしてどんな種類の敵対者がいるのか予測して対処方法を練るのが今日の目標だな。

色々を集めるのは時間が掛かるが、彼女の後ろには千駄木知佳がいる。これは大きな利点でもある。

そう考えれば有利なことはこの上ない。

今回もまた、苦勞する必要はないだろうな。

「夢香は一度自分の世界に入るとしばらく戻ってきません。まだ詳細は細かく話していな

いからその続きをしましよ」
話を戻して、続きを聞く。

「夢香はちよつと他人とは違う能力をもってるのです」

「能力……テレパシーとか、そういうものの類のことか？」

超能力や黒魔術なんていうそんな類のものなのだろうか。

「近いですね。ですが、それとはちよつと違います」

首を横に小さく振り、俺の顔をまっすぐ見る。

その目つきは優しいものだったが、同時に違う目つきも感じた。

彼女は……千駄木知佳は、とても強く突き刺すような目つきをしていた。

まるでヒョウのように獲物を狙い定めるかのごとく。

「それは、藤堂君がよく知っているはずですよ」

更に強く、圧迫するかのように鋭い目つきが俺の心を抉る。

なぜ、知っているのか。それが不思議でならなかった。

「人体の特異変化で驚異的な力を生み出す。それが特殊能力”SPI”です」

彼女は知っている、俺の力を。

「藤堂君は持っていますね？夢香と同じ能力を」

彼女は知っている。俺がなぜ命がけの世界を若くして生きていられるのか。

「それはどのような能力でしょうか、藤堂君？」

「……チエックメイトだ、俺には隠すことなんて出来ない。

「なんで分かったのか、それは分からないが……。確かにその通りだ」
だから先に俺が言っておく。

俺が、ただのバケモノだと。

「それでは、これにて失礼します。後はよろしくお願いします」

千駄木知佳の挨拶が終わり、彼女は黒い高級車と共に暗闇に消えて行く。

———やたら頭が痛かった。それに体がだるい。

かなり精神面に疲れていた。尋常じゃないほどに。

千駄木夢香はとても俺と環境が似ていた。いや、瓜二つと言っても過言ではない。

彼女は千里を見渡す“千里眼”という能力を持っていた。

世界の情報を、千里眼で収集できるといったものだった。

たとえばどんなに機密でも隠すことは絶対に不可という能力だった。

そんな能力が知れ渡っていたならば……

「誘拐でも暗殺でもなんでもござれってか」

一〇キロ圏内で銃器反応がしたので罾を張って、見事に引つかかっていた。数は用心し、一五ほど仕込んであった。

誰が苦勞しないなどと思いがつたのだろうか。

敵は世界だった。それも名のある者ほど彼女を狙っていた。

「こいつは危険な依頼ときたな……生きていられるか」

留まるのは危険だが、逆に言えばこっちは有利土地にいる。逆手に取って相手の首を絞めることだって出来る。

息を吸う。そして息を吐く。

とりあえず、今は出来ることをしよう。深夜に掛けてから本番だ。

仕留めた敵を総長に任せて、作戦を立て直すことにした。

『晴義が掃除した男はドックタグが装着してあった。こいつはどこかの軍の端くれの者らしい』

さらに調べてくれたところ、あの男はイタリア兵のドックタグだった。予想してはいたが、情報の伝達速度と行動の実行までが異質なまでに早い。

まさかこつちに来ていたことがすでに知られていた……否、もう“いた”のか？ まんまと騙されたわけだ。あの女食えないな。

目を閉じて、歩くのを止める。

“視える……視えた！”

瞼の裏に視えたもの、それは――

『千駄木夢香……この女が今回の金稼ぎか……ちよろいな』

この視点は……そう、あのイタリア兵だ。

今回の情報はこいつから引き出すとしよう。

この男の過去を視て襲撃の理由を探ろう。

『キミに依頼が来た。直接任務の受け渡しというのは名誉だと思え、ルーテン伍長』
男はルーテンと呼び、軍階級は伍長。下っ端の辺りにいるのか。

『ルーテン伍長。キミにしか頼めないことなのだ。よろしく頼むよ』

『はっ！ 准将の要求に応えます！』

『よろしい。下がちなさい』

内容は千駄木夢香の暗殺の件。イタリア諸国の英雄になれと依頼してきた。

実際は成功してもその手柄は准将に盗られるのが目に見えるが。

しかし、なるほど。今回は機密の流出を阻止する為の暗殺か。

イタリア軍に一回コンタクトを取って脅しておかないとあとがないな。

意識を戻し目を開ける。

まず最初にタッチパネル式のケータイを取り出し、いつもの場所に電話を掛ける。

コール音が三度鳴った辺りで無機質な音が消えた。

「はい、こちらヨーロッパ観光センターです。ご用件は何でしょうか？」

毎度毎度最初の一言が違うだろう。前回は『こちら迷子センターです』とか言ってたじゃないか。

まあ対処法もあるが。

「イタリアのネズミ」

「はい、分かりました。担当の方に代わります」

会話が通っていないのは仕方がないこと。暗号のようなものだからだ。

色々な言い方があるが、今回はネズミがキーワードになっている。

毎回キーワードを変えて正体がばれないようにしている。

ただ迷子センターも敵しい感じなのかもしれない。だから観光センターなのか。

『代わりました。それで、視えたの？』

代わって電話に出たのはユキ。この電話は“ゼロとイチ”の本部への電話につながるようになってる。

「ああ、相手はイタリアの軍みたいだな」

規模は大きいはまだ先手を打つことは可能だ。

『それでは、イタリア軍に脅しを掛けておけばよろしいと』

「その方向で頼む」

ユキの話が早くて助かる。総長や副長だともっと時間が掛かってしまうからな。

『……あの、ハル。ちよつといいですか？』

いつもならこの辺りで状況説明を終わらせているが今回は違った。

ユキが普段どおりになったからだ。

「ん、どうした？」

学校と同じように接する。この会話はプライベートのものだ。録音も止まっているはずだ。

『ええと、そのつ、あのっ！』

話しづらいのか、俯いてぼそぼそ言っている。
悩み事でもあるのかと、話すまでじっと待つ。

『……この依頼が終わったら、かかか買物でも行きませんかっ！』

この状況、なんと説明したらいいのやら。

時間を掛けて溜めているから思い詰めているのかと思ったら買物とな。

拍子抜けしたが、別に断ることもない。返答は一つ。

「俺でよければ、いつでも付き合うぞ」

『……っ、はい！それでは失礼しますっ！』

その言葉を最後に無機質な音が聞えてきた。

次に電話を掛ける相手の名前を調べる。

スクロールして二、三回ほどでその名前が見つかった。

コールボタンを押して耳をケータイに当てる。

無機質な音が五回ほど聞こえた後、能天気な声が聞こえてきた。

『ハロー！元気にしてたかい？ミスター晴義？』

「……いつもそのテンションで大丈夫か？」

耳が痛くなるくらい大きな声で笑いながら話す彼にこめかみを押さえてしまう。

『ノンノン！問題ナツシング！これがワタシですから！ハッハッハッハッハ！』
やはり俺にはこの男の性格が好きになれない。

妙に狂ったようなテンションであれこれ言うのは一七年の生涯でこの男以外見たことはない。

「で、なにかブツは得たのか？」

『……その件に関してなんだけどね、ワタシ少し傍観を装いましょうかね』

その答えに何か意味があると考える。

装う、装うか……

『あと、武器もいつもの宅配に仕込みましたんでそっちでお願いしますね！』

それから一方的に通話を切られる。

これで確信はした。あの男が何をするのかを。

止めていた足を再び前に動かし帰路の道を辿る。

そして時は今、深夜の一時を差し掛かるところまで話が戻る。

とりあえず、溜息がこぼれる。他人の家でここまで不恰好でいるのはそうとう度胸のある者だけだ。胸は慎ましいのに。

「別に文句を言うつもりはない。だが節度というものがあるだろうが」
家主として、この家のルールを教えなければならぬ。

「それよりもお兄様！この薄い箱には魔力が備わっておるのだな！」
その指す場所にはテレビ。

「え、ちよつと待て。夢香さん？」

今常識の中でも特に常識のことを聞いておきたい。

「なんじゃ？」

「……“テレビ”って知ってます？」

「……“てれび”？なんじゃその近代科学兵器のような名は」

おいおい、このお方千里眼持つてるはずですよねえ。

「む、なんじゃその目は。お兄様、私を背めておるな。ならば私の本気を見せるまでじゃ」
そう言つて目を手で覆う。一体何をするつもりだ？

「全てを統べよ、事実を述べよ、世界を視せよ、自ずと答えは見つかる……」

風が止まり、水が一滴水面に落ちるような、透き通った声で俺の脳裏に直接聴かせるように、響かせるように、彼女の声で世界が凩いだような感覚になった。

「ふむ、なるほどのう。“てれび”とはそのような力を持つておるのか。いや、なかなか

に興味深いのう」

ゆつくりと目を開けてすぐ腕を組み首を縦に傾かせながら納得したように言っている。俺には何が何だがさっぱりだ。

「この“てれび”というのはマスコミとやらの力で、笑いや感動、情報を皆で共有する画期的な道具なのだな！」

さつきまで知らない奴がここまで簡略かつ的を射た説明が出来るだろうか。

「夢香……なにをしてそれを知った？」

予想は出来ている。が、誰からその情報を引き出したのか。

「お姉様から聞いているのであればその力に頼ったまですよ。お兄様の知識から知ったのじや」

千里眼——これは予想以上に厄介な代物だと今悟った。

同時刻、イタリア軍事部にて——

「……連絡はまだか。一体どこで油を売っているんだあのクズが」

勲章を一〇以上付けた軍服の男は静かに苛立ちをぶつけた。

そこに一本の電話が鳴る。

「やっとか……もしもし、私だ」

『……………』

電話に出ると声が聞こえない。無言電話のようだ。

「おい……………誰だ貴様」

だがその無言に不信を抱いた男。

『ふふっ……………流石准将殿。その実力は確かなものですね』

「……………私に何を求めている。そちらの要求を呑もう」

その電話の相手は女。しかもまだ若い。

『今後千駄木夢香の命を狙わない事。それが条件です』

「……………それで、私の部下はどうした」

男は部下の心配をする。大切な部下であることは確かなようだ。

『要求を呑めばすぐにでも返します。どうしますか？』

男は揺らいだ。部下を取るか、国を取るか。

「……………よし、要求を呑む。イタリア軍部は彼女の命を狙わないと、国旗と我が家紋

に誓おう」

『はい、それではお返しします。しっかりとその部下を休ませるように』

そこで通話は途切れ、無機質な音が鳴り続く。
電話を切った直後、上から何かが落ちる音がした。

「なんだ今の音は！」

窓を開け下を見る。

そこにいたのは私服を着た男。彼はその顔に見覚えがあった。

「私の部下……日本に向かつてまだ十二時間も満たないぞ」

男は直感的に悟る。逆らえばイタリアが負けていたかもしれないと。

「千駄木夢香……彼女の護衛には危険分子がいるということか」

すぐに電話を取り連絡を取り次ぐように指示をした。その相手はイタリア政府。

「私は、千駄木夢香の暗殺計画から降ります。日本には化け物がいる」

それを言い静かに電話を切った——

「それじゃ、イタリアはもう攻めに来ないと」

『は、はいっ。もうイタリアの軍部は暗殺計画を降りた頃だと思えます！』

千里眼の力を確認して驚きを隠せないところに着信が入った。

相手は美紗、交渉も兼ねて今回の件のバックを取ってくれていた。

「さすがというか、いつも頼りにして悪いね」

『い、いえっ！むしろ頼りにしてください！』

本当に、この娘は良い娘だ。

というよりも、自分を省みないで他人優先なのが強い。

だからだろうか、美紗を見ていると保護欲というか守りたい衝動に駆られるというのか。なんとも不思議な感覚に陥ってしまう。

『あ、それと……今回の依頼について詳細を調べてみたんですが、気掛かりなことが一つあるんです』

諜報の情報は鮮度が命。すぐにでも聞いておきたい。

『千駄木夢香さん……ですよね？彼女の情報が何一つ明細に書いてなかったのがおかしいと一つ』

もう一つの気掛かりに、衝撃が走る。

『夢香さんの旧姓が“藤堂”とありましたが……って、先輩!?どうしたんですか!』
俺は呼吸が荒くなっていた。こんなこと、一度もなかったのに。

ここに居るのが怖い。息するのが怖い。存在が怖い。
そんな声にも出ない恐怖が頭の中を一色に染める。

『晴義！聞こえてるか！』

その声でハッと消えかけていた意識が戻る。

消えかけていた？いや、消えてなんかない。いつも通りだ。

「はい、聞こえてます」

『……………急に取り乱したと美紗から聞いていたが、違ったようだな』
総長の言葉に違和感。俺が、取り乱す？

「そんな取り乱すマネなんてしないですよ」

そう、取り乱すのは両親の死以来一度も取り乱したりはしなかった。

『なら、いいけどな』

そういつて受話器から離れていく総長代わりに美紗が出る。

「おっと悪かったな美紗。ちよっと考え事しててさ」

『考え事で呼吸が荒くなりますか!？』

呼吸が荒くなる？どういうことだ。

「ちよっと待て、俺……………呼吸なんて荒くなった覚えはないぞ」

少なくとも今なったということはないはずだ。

『先輩……………少し休むことをお勧めします。今の先輩はおかしいですよ、絶対に』

俺がおかしい？いや待て、それは絶対にない。

「俺は至って普通だ。健康そのものだ。休む必要なんてない、と言おうとしたのだが。」

『先輩はっ、一時間すら寝てないじゃないですか！』

それだってもう日常茶飯事のようなものだ。変える必要もない。受話器の奥から“ちよっといいですか”と代わるように指示をしていた。

『もしもし、ハル。何も言いません、休んでください』

電話の相手はユキ。彼女もまた、美紗と同じ意見の者らしい。

「何度も言うが、俺は至って健康体なんだ。だから心配は」

『だから！休んでくださいと言っているんです！』

耳をつんざくような大きな叫び。

俺は驚きで何も言えなかった。

いつも冷静なユキが、叫んだ。こんなことは初めてだ。

『……ハル。あなたは一人じゃないんです。どうして私たちを頼ってくれないんですか』
それに俺は、答えることが出来なかった。否、答えることなんて出来なかった。

『いつも“頼ってる”なんて嘘ばかりついて、結局自分で全て抱え込んでるじゃないです』

か。こちらに迷惑が掛からないようにほとんどの仕事をハルだけでやってるようなものじゃないですか!』

その叫びに嗚咽が聴こえた。

泣いていた。ユキが、泣いている。

『どうして……いつも一人でなんでもやろうとするんですか。少しは私たちを信用してくださいよ……』

その涙ながらの訴えに俺は折れた。

「……ごめん、ユキ。休むから、だから泣き止んでくれ」

俺に言えるのはこれだけだった。動揺していた。

『本当ですか？休んでるか確認しに行きますよ?』

「それでもいいさ。だから落ち着いてくれ」

服が擦れる音がする。裾で顔を拭いているようだ。

しばらくして、泣き声の代わりに笑い声が聞こえてきた。よかった……落ち着いてくれて。

「じゃあ、すぐ寝るよ」

『はい。すぐに様子を見に行きますから、いないなんて事はないようにしてくださいね』
そこで通話は切れる。

ふう、と息を吐く。

「じゃあ、ユキに心配掛けないようにして早く寝るか」

「お兄様、寝るのかえ？」

寝る前に彼女を休ませるのが先決か。

なんて思っていた時期がありました。

「すうー、すうー」

既に寝ていました。いやいつ寝たんだ。

「はあ………」

溜息がこぼれる。最近ずっと溜息ばかりな気がする。

夢香を抱き上げ寝室に向かう。

護衛対象だから一緒に夜を共にするのは仕方ない。割り切るしかない。

起こさないようにゆっくりと降ろし、掛け布団を掛ける。

俺も休もう。今日は連続して遠出しすぎた。

「お邪魔しますよっと」

音を立てないように静かに布団に入る。

いつ以来だろう、こんなに早く寝るのは。
薄れゆく意識のなか、確かにその声は聞こえた。

「おにい……ちゃん、どこに……いるの」
隣にいる少女の、心の声が。

「……きて……さい。起きてください」

どこからか声が聞こえる。誰かが俺を起こしているようだ。

「……起きませんね。し、仕方ないので、最終兵器を使いましょうっ」
兵器という言葉に反応する。まさか、敵襲だと！

「そ、それでは失礼して………」
「まずい、このままでと………」

嫌な予感がする。この状況を御する方法は……

「んっ………」

そんな事を考えているうちに、唇に柔らかい感触がした。

不意に目が開く。

彼女と目が合う。

「あ、あああ、あああああああ！」
直感的に土下座の形を取る。

「申し訳ありませんでした！」

「ふわあ……お兄様よ、朝から騒がしい……どの？」

この状況をどのように説明しようか。

まず、目の前にいるのは相沢優希だ。その奥にいるのは千駄木夢香。
俺は0距離にユキがいたのを記憶している。

そして唇に柔らかい感触がした。ここから導かれる答えは……。

「あ、あの、ハル？い、今のは、そっその！」

慌てて行動が可愛く見える。ユキってこんな娘だっけ？

それにしても、さっきの感触はなんだったのだろう。

甘酸っぱく、瑞々しい柚のような味がした。

「あ、あの、だから、そのっ……」

わたわたしてて見るに堪えない状態になっていたのでなんとなく頭を撫でてみる。

「わっ……あ、れ？なんか暖かい」

毎日手を加えてるのか、川のように流れていく髪。

ほんのりと香るシャンプーの匂い。朝に風呂に入るタイプなんだと考える。
「落ち着いたか？」

しばらくして声を掛けると、ほんのりと顔を赤らめたユキの姿があった。

「……………はい」

俯き加減に呟くユキにほっと胸を撫で下ろした。

「お兄様……………お腹減ったのじゃが」

空気が暖かいところにやってきた絶対零度の風。

「……………」

完全に空気が死んでる。それも盛大に。

俯いて硬直しっぱなしのユキがいたり、もう状況が良くない。

「お兄様……………お腹、すいた」

しきりにお腹空いていると言いつける夢香。これはもしかしたらさつきまでのやり取りとご飯を食べること重要度がご飯に傾いてる可能性がある。

「よし、じゃあご飯作っておくから顔洗ってきてくれ」

なんとか話を逸らそうと顔を洗いに行かせる

「ふう……………これで大丈夫だなユキ」

「は、はい。ありがとうございます」

こんなに朝が大変なものだと思わなかった。護衛も苦労ばかりだな。

朝食はユキも交えて食べることにした。

「今日はベーコンとスクランブルエッグ、あとフレンチトーストにしたぞ」

いつ以来だろうか、この家にこんなに人が入ったのは。

もうずっと昔のことだ。思い出せるが、あえて思い出そうとは思わない。

思い出は振り返るものじゃない。

「おおお……お兄様はなんでも出来るのか!？」

「本当になんでも出来ますね、ハルは。少し恨めしく思います」

俺にだって出来ないことはたくさんある。俺は他人に自分を任せようって思わないところとか。それで昨日はユキに迷惑掛けることになったんだ。

「昨日は、ありがとな。俺に怒鳴ってくれて」

そうじゃなきゃ俺はみんなに酷い迷惑を掛ける寸前だったんだから。

「素直に引いてくれなきゃ本当に泣くところでした」

じゃあ、あの電話のすすり泣きって……

「嘘泣きかよ……」

「ハルとあろう人があの程度で騙されるなんて、やっぱり疲れてましたね」
軽い畏に引っかけってしまったことに、疲れていたんだと改めて苦虫を噛む思いでいる。

朝食も済ませ、登校の準備をする。

美紗にも連絡をし、一緒に登校という名目の護衛をするという旨を伝え装備を固める。
防弾チョッキは必要で、あとは拳銃を二丁くらい用意しておいたほうが良いだろう。

一丁は制服の内ポケットに入れて、もう一丁は袖の中に仕込む。

警棒は背中の方のベルトに仕込む。

こればかりは使いたくないが、もしもの場合だ。用心に越したことはない。

手榴弾と閃光手榴弾を防弾チョッキのポケットに入れておく。

これ以上無理に入れても動きづらい。

「ハル、今日で全部片付くの？」

「ああ。同時にユキの目的も終わるぞ」

ユキは驚き俺の顔を見る。やっぱり気にはなるよな。

「ユキの両親を殺した男も絶対に来る」

ここまで確信して言えるにはある要因がある。

「ユキから聞いた情報で間違いなければ絶対に来る」
その男はあることが関連していれば絶対に動く。

ユキの両親は共にデザイナーとして名が世界的に上がっていた。

男が狙うのは名声と利益。つまり目立って金が入ることが生き甲斐ということ。

ならば、世界の政府や軍部が目につける夢香を狙わない道義はない。

自分の欲求を満たすだけの奴の行動はたかが知れている。

「ユキの復讐も兼ねて、さっさと終わらせよう」

本当の話、ユキはこつちにいるべきじゃない。

俺は彼女を生死の世界にさせたくない。

「はい、これで……お父さんとお母さんの恨みが晴らせる！」

ユキの想いが固まったところで夢香がやってくる。

「お兄様準備は終わったぞ！」

腰を持ち上げて眼力を強める。

「ああ、それじゃ行こうか」

一つは依頼の達成。一つは復讐の完了。一つはユキを元の世界へ戻すこと。

そうすることで一つの区切りが終わる。

玄関のドアを開くと美紗が待っていた。

「あ、晴義先輩！おはようございますっ」

その元気のある挨拶に違和感がした

空元気って考え方で間違っただけなら、危険な状態が連続して起きる可能性が高いのか。

敵は予想を遥かに超えて多いと思っただけさそうさ。

いつでも対応できるように体の力をありったけ抜く。

緊張の中のリラックス。

一歩間違えば誰かが死ぬ。一時の安堵も必要ない。

「さて、夢香。俺から離れるなよ」

「分かったが……そんなに殺気を出してよいのか？」

殺気をだしてむしろ敵を誘い込むのが俺の得意戦法だ。それで攻めてこなければそれでよ

し、攻めてくれれば叩き潰すのみ。

「もしかしたら、その千里眼の力借りるかもしれないから協力してくれるか？」

「お兄様が言うならば手を貸そう。私もまだやり残したことはあるからの」

靴は銃弾を弾く専用のセラミックプレートで、いざという時足で対応できるようにして

る。

完全武装が完了し、周りを見回す。

既に狙う気はあったようだ。これは今まで以上に過酷な状況だな。

「相手はなりふり構ってなさそうです。人ごみに逃げるのは逆に被害が拡大してしまいます」

殺し屋なら殺気を隠す必要があるのに隠さないということは、相当お偉いさんが苛立っている様子だな。

「狭いところは危険だな、人ごみを回避しながら行くなら………坂道でちょうど広いところがあつたはずだ。そこに行こう」

あの坂道は立地も良いし、なにより見渡しが良い。敵の動向を読める場所の一つにある。坂上からの攻撃さえ注意すればしばらくは抑えていられるだろう。

あとは間合いを見て警察に銃撃戦を聴かせてやれば飛んでやってくるだろう。

「お兄様！坂に行くならやめたほうがよいぞ！」

向かおうとした矢先に夢香によって止められた。

「今見たんじやが、坂上には武装兵が多数に固まっておるぞ。直接学校に向かうほうが良案じゃが？」

千里眼で動きを見ていたのか。ならば彼女の言う通りにしよう。

死なないためには鮮度の高い情報を最優先に取るう。

「しばらく私は千里を見るのでな、歩けぬ。だから誰か私を持ち上げるなりなんなりで連れて行ってくれぬか」

その仕事は男である俺が受け持つ役目だな。

「なら道先案内は頼むぞ、夢香」

「お兄様にはその分力仕事を頼むぞ？」

「言われなくとも自分から進んでやるさ」

それを皮切りに走る。後ろからユキと美紗が後ろと左右を確認しながら付いてくる。

ここからは判断ミスが致命傷になるところ。落ち着いて対処しよう。

「む、左に黒いバンが追突しようと企んでおる。まっすぐいけば蜂の巣じゃ」

ということは右は通っても大丈夫ってことか。

「美紗っ、左の黒いバンのタイヤをパンクさせといてくれ！」

「了解ですっ！」

会話が終わると同時に右に方向を転換し危険を回避する。

それと同時に黒いバンが追いかけてくる。が、バンから破裂する音が一带に響き、バンがバランスを崩しスリップを繰り返しながら減速していく。

「ダーツの先端つてとっても鋭いんですから」
美紗が手にしていたのは銀に光るダーツの矢。悪魔にでも打ち付けるのかというくらい純銀でできていた。

「綺麗な軌道に入ってしまったね。お見それします」

「えへへ……恥ずかしいですよ」

この状況で軽い会話をするのも組織の決まりでもある。

“危険な状況こそ軽口叩いておけば落ち着ける”

「次の二方向に武器を持った奴らがおるぞ！右は人数が少ないが……」

この判断は俺に任せてもらうとしよう。

「だったら左だ。右は人が少ない分それを補う武器が多数あるからな」

殲滅専門であれば常識の常識。この判断はプロでなければ間違はなく蜂の巣だ。

道を左に行くと男達が待ち構えていた。数は八人といったところ。

目で確認できる武器は角材やバットなどが目立つ。が、銃系統の武器は無しと見ていいだろう。

素手で勝てる相手だ。夢香を降ろしユキに託す。

「気をつけてくださいね」

その言葉だけで力が湧いてきた。体中の筋肉が少し緩んだ。動きやすくていいな。ステップを前後にずらし、パワーバランスを計る。

相手は一人だと油断している。その油断が命取りだと言いたい。

まず一人、角材を持つている男の懐に一気に潜り込み腹を一発殴る。

隙を見せずにアッパークットを決める。これで一人目。

正面を向いたまま右にいるバットを持った男に近づき鳩尾に肘をぶつける。そのまま足を引っかけ頭から地面に落とす。これで二人目。

三人目四人目五人目は全員構えがしつかりとしている。有段所持者だとみる。

膝を連続して上げ下げし、高さを調節する。バランスと一撃をあわせて決める必要がある。

右足をスプリングのように縮みこませ、弾かせる。

膝を曲げ敵の鳩尾に狙いを定める。

このスピードなら避けることも防御することも出来やしない。

鳩尾に当たると同時に敵の体を軸に一回転しそのまま飛び蹴りを決める。地面に着く前に両手で地面を支え足を引っかけバランスを崩させる。

あとは顔面に蹴りをお見舞いするだけ。

これで三、四、五人排除した。

「さすが先輩ですね……動きが全然違いますう」

「動きが無駄がなくて、その上隙を与えない連撃を喰らわせる。格闘術ではサバットと同じ動きを手も併せて更に創作性を加えてるようですね」

冷静に判断しながら他の二人を対処しないでください。すつごく傷つくんですけど！

「道は開けたようじゃな。すまぬがまたお願いしてもいいかの？」
疲れているのだろうと心配してくれる夢香に笑って答える。

「じゃあまた案内よろしくな」

「うむ、任されたぞ！」

高校に逃げ込めば勝ちのこの勝負、有利なのはこっちなんだ。絶対に逃げ切つてやる。

「これでラスト……！左に曲がって直進で目的地じゃ！」

走り続けて二〇分が経つ。鐘が鳴る直前辺りで勝ちが見えてきた。
しかし、勝ち逆負けだと確信してしまう。

「な、ん、じゃと……！！」

「そんな、馬鹿な……」

「嘘、ですよね……」

「……………」

全員の反応が違えども、見ている場所は同じ。

今いるのは美紗と夢香が通っていた高校“だった”ものだ。

瓦礫と化した校舎見て俺は思った。今回の件は予想を超えるレベルとかそんなもので片付く話じゃないと。

たった一人を殺すだけに、たくさん犠牲がついてしまっていることに恐怖を感じていた。

「あつはつはつはつは！愉快痛快だよなあー！」

校舎の方向から耳に障る笑い声。

その時、その笑い声に反応した人がいた。

「……………っ！」

反応したのは、ユキ。ということは、あいつが。

「お前が、ユキの両親を殺した……………！」

「ユキイ？……………あア、あの相沢とかいう奴のガキかア。アン時は殺しきれなかったけどよオ、今度は逃がさないぜエ」

男の手に持つ武器は短機関銃。懐に入れているのは膨らみ方からしてダイナマイトだと推測できる。

「右に壁がある、そこからある茂みに使える装備があるのじゃ。それを使ってあの男を倒してくれ！」

今夢香は怒りで頭の中がいつぱいのはずだ。それを抑えてまで指示をしてくれている。負けるわけにはいかない。

右手は使えない。それでも使えるということだろう。

壁まで全力で走る。この際痛いとか言ってる場合じゃない。

発砲と同時に隠れて難を逃れた。しかし、まだ助かったわけじゃない。

茂みの中にある装備を探す。

しばらく探すうちに、見つけた。あの男に勝つ装備が。

「……ふっ、これはすごいな。勝つ方程式が出来上がったじゃないか」

思わず笑みがこぼれる。こんなものがここにあるとは想像だにしていなかった。

「あのガキは右腕使えないからなあ、勝手に死ぬか。次はあのガキをぶっ殺さないとなあ」
セットも完了し、いつ攻撃に仕掛けるかタイミングを決めかねていた。

そこにユキが男の前に出てくる。

「おお！あの時のクソガキじゃねえか！元気にしてたかあ？」

不敵な笑みをし飄々とした態度で話をしてくる男。
それを無視し、銃を構えるユキ。

「…………お前は、お父さんとお母さんの仇です！ここでお前を止めてみせます！」
トリガーに手を添えて引くだけ。

しかし、引く勇気が出ない。

引きたい、でも引けば人が死ぬ。

その思いが彼女にトリガーを引かせないリミッターになっているのだろう。

「……ケツ、結局ガキだったな。さつさと死ぬ」

男はトリガーを簡単に引いてみせた。

それと同時に俺は栓を外した。

「なっ、なんだこれはよオ!？」

「冷たい……これは水？」

俺が使ったのはホースだ。ホースを蛇口にはめてそれを男に向けて掛けただけ。

だが、効果は大きい。発砲したと思えば水の噴射力で軌道を変えられ直撃はなかった。

そして弾がなくなることも想定済みだ。

これで男は対応するすべを失った。今度こそ勝ちだ。

「さあ、俺達の勝ちだ。おとなしく観念しな」

「くくく………ギヤハハハハハ！」

突然狂ったように笑い続ける男。

「オメデタイ脳みそだなア……！この俺がそんなミスするとも思ったかア？」

男の手には無線機。どこかで見た形をして………

「っ！まさか、お前………」

その可能性は考えていなかった。その可能性はありえないものだ。

策に謀られたのは俺たちの方だったのか………！

「……俺だ、武装グループが学校を破壊した。至急応援を。あと、S W A T も呼んでおけ。逃がさないように完全包囲するんだ」

同時に俺の携帯にも連絡が入る。

『晴義！S W A T が出撃してるなんてどういふことだ！』

「総長、俺たちは謀られた。殺し屋の中に警察がいるなんて」

逆になぜ警察が殺しなんてやっているのかが分からないが。

「俺は死つてものが好きだよオ、警察に入ればその死亡状態だつて見れるだろう？ただけだな、入ってからそんなもの見たこともねえ！だったら自分でつくりやいだろ？だから殺し屋

やってんだよオ！」

言ってることもやってることも滅茶苦茶だ。

「その男や女もそうだろう？ 殺し屋なんてみんな楽しいからやってんだろ？」

「私やハルはそんなつもりでやってない！」

同士を見るような目で見る男に啖呵を切ったユキ。ユキの啖呵に首を縦に振る。

「俺もだ。俺は、誰かがやらなきゃいけない事を進んでやってるんだ」

「私は、あなたを追ってこんな汚れ仕事をやってるの！ いつか巡り合うって信じて！ この手で制裁を加えられるって思ってる！」

俺とユキの言っていることは違う。だけど、同じだ。

「俺は悪をはびこらせないように悪を断ち切ってるんだ。なんも迷惑を掛けていない一般人を殺すお前みたいな奴を潰す為にやってるんだ」

「私は、あなただけを追って関連してる人を片っ端から問い詰めた。そして今ここであなたの悪事を止められるの！」

目的は違えど答えは同じだ。“悪を倒す”という目的はここで達成する。

拳銃を男に向けて、狙いを定める。

一発勝負だ、外さないように精神を研ぎ澄ます。

「俺を殺しても、そこにいる千駄木夢香は死ぬ。絶対だ」
不敵な笑みをする男に俺は余裕の笑いをこぼす。

「残念だが、それはないな」

笑みを作り続ける男に、一瞬影が差した。

「俺はお前以上にこの土地を知っている。だから負けることは無いんだよ、絶対にな」
精神が銃口に完全に定まった。どんなに避けようとしても無駄だ。
体を極力動かさないように、男の首の付け根に狙いを付ける。

「じゃあな、今度は地獄で会おうか」

男がその言葉を言った直後、俺の銃口から硝煙が舞った。

ゆっくりと倒れていく男。その一秒がスローモーションに見える。

「まあ、俺が撃つたのは麻醉銃だな」

「あの、お兄様。少しいいかの？」

S W A T に追われちゃ叶わないからさっさと学校から逃走する生徒を装い脱出。今は家に帰るところだ。

「ん、どうした？夢香」

「なぜお兄様はこのような世界に入ったのじゃ？」
夢香は俺の言ったことが気になってるんだらう。申し訳なさそうに聞いてくる。

「まあ、師匠の言葉があつたからこんなところにいるんだらうな」

「その師匠は大層な人じゃつただらうな」

大層な人、か。その言葉が心地良く入ってくる。

「そうだな、大層な人だよ」

そこから会話は一旦切れる。

——千駄木知佳から連絡が入った。内容は夢香を迎えに行くとの事。

まあ、あんなことがあつたならすぐにも場所や環境を変えてくるだらうと予測はしていた。

仕方ないことだと割り切ればそこまで。だが珍しい体験もした。

この依頼は受けてよかつたものだ実感できる。

やつとユキをあの呪縛から開放できたのだから。

総長によると、あの男は警察という名目で犯行を繰り返していたようだった。

一〇年ほど前から繰り返し行われていた犯行だったらしく、その犠牲者にはユキの両親もいた。

ユキは愉快犯によつて人生を狂わせられた悲しい少女だった。しかし、これでユキもこの世界にいる必要はなくなつた。

美紗に関しても、しばらくはこつちには戻らずアイドル活動を本格的に始めるらしい。学校が無くなつてしまい、なにかを決意したらしく。

『私、アイドルを本気でやります！それでみんなが笑つていられるようにしたいです！』と、今まで以上にはつきりな物言いでした。

副長は感動のあまり号泣していたが。

そうこうしているうちに俺の家に到着。

その前には黒いベンツが待ち構えていた。

「お疲れ様でした。藤堂君」

その隣にいるのはもちろん千駄木知佳。

「お姉様！お仕事は終わったのですか!？」

夢香は千駄木知佳の下に走つて抱きついてゐる。彼女も微笑みながら受け止めてゐる。

「今回の件は申し訳ありませんでした。規模が予想以上に大きかったようです」

「別に俺たちは咎めはしないさ。結果は散々だったが歩む人生が決まったから良かったんじゃないか？」

そこについては感謝している。

「……………そういいいますが、藤堂君はどうなんですか？
やはりそこを聞いてくるか。」

「まあ、俺はもう決まってるさ」

その先の未来も予測済みだ。

「そうなんですか……………それならいいのですが」

彼女は目を閉じる。何を考えているのかは分からない。

風が、冷たく感じた。

「それでは、これで失礼しますね」

「お兄様！またどこかで会おうぞ！」

ベンツに乗り去っていく二人。

「さて……………出てこいよ。盗み聴きなんてしやがって！」

俺が背を向けてそう叫ぶと到る所に銃器を持った“同業者”が飛び出してくる。

「それじゃ、第二回戦目……………やるとしますか」

右手が動かない今、勝ち目は皆無に等しいがなんとかしなければならぬ。
死ぬ気はない。生きてみせる。

眩しい光で私は強制的に起こされる。

「ん……もう朝ですか」

ふらふらする体をなんとか建て直し顔を洗いに行く。

朝食を済ませ制服に着替える。

家を出ると、違和感がする。

「いつもと、違う？」

なんとというか、空気が。

もやもやしつとも学校に向かう。

学校に向かう道を進んでいるが、やっぱり違和感。

いつも登校道は少しざわついているのに静寂が支配しつづけている。

学校に到着。ここでも違和感。

なんか町中が違和感に支配されている。異様な状態が続いている。

教室に入るとみんなが俯いている。泣いている人もいる。

なにこの状況。全く理解が及ばない。

先生が来る。先生すら気分が落ち込んでいるように見える。

「…………このなかで知っている人は多いと思うが。昨日の夕方頃に起きた隣町の学校が破壊されたこと。そしてもう一つ」

頭の中で“聞いちやだめだ”とずっと叫び続けている。

が、先生は続きを言った。

一文字一文字がゆっくりと聞こえる。

私の心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

“藤堂晴義君の家が壊滅されていて、藤堂君の姿も見えなかった”

“今、警察が搜索していますが証拠となるものが一つしか出てこなかった”

“藤堂の所持していた携帯が家の前に落ちてあり、それ以外はなにもなかったみたいだ。

携帯は壊われていて情報の解析も不可とのこと”

『短編小説を書いてみよう!』講座

第一回目作品集

二〇一二年三月号

発行者 山本 茂樹

発行所 宮代町立図書館

住所 埼玉県南埼玉郡宮代町百間一三九

電話 〇四八〇三三四一九四四